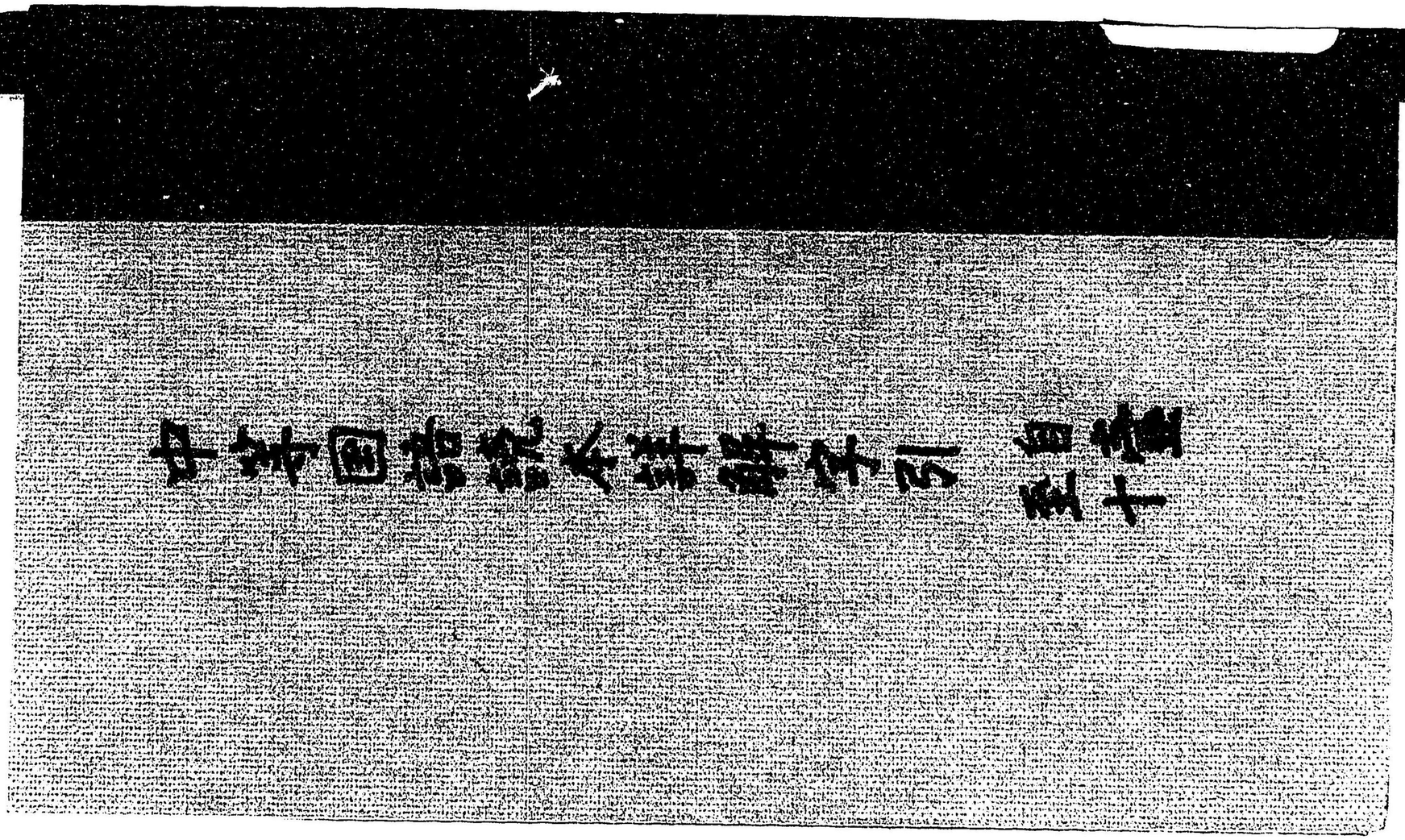

訂[illegible]國[illegible]本詳解

自壹至十合卷

270
394

中等國語讀本評解字引目次

卷一　一

一、伊勢神宮　一
二、汽車旅行　二
三、中學一年生　四
四、生活　四
五、社會の組織　六
六、土地と植物　六
七、朝顔を贈る　七
八、英雄の心事　七
九、公の威儀　八
一〇、クルップ鐵工場 その一　九
一一、クルップ鐵工場 その二　一〇
一二、心の修行　一一
一三、正直の頭　一二
一四、一壺千金　一三
一五、螢　一三
一六、水浴　一四
一七、天の橋立　一五
一八、入船出船　一六
一九、廉潔と節儉　一六
二〇、一錢銅貨　一七
二一、蒔かぬ種は生えぬ　一八
二二、笑話二則　一八
　一、寒熱
　二、禁酒　一九
二三、田園生活　二〇
二四、海舟の苦學　二〇
二五、信用　二〇

目次

巻二

二六、小笠原島通信 三
二七、所澤に飛行機を觀る記 三
二八、月の世界 四
二九、臺灣日記 五
三〇、初度の歐洲行 六

巻二

一、日章旗 一
二、ビスマルクの幼時 二
三、濠洲航路 四
四、秋の夜 六
五、杉の戸 七
六、牛窓村 七
七、國民の義務 一〇
一、兵役 一一
二、納稅 一二
八、征衣上途 一三
九、山田長政 一三
一〇、公子の躾方を申し送る 一四
一、車窓偶感 一六
二、ベルナルド、バリッシー 一六
三、水と火と 一七
四、河内艦の進水式 一九
五、新兵 二一
六、過不及 二三
一七、東京 二三
一八、塙檢校保己一 二四
一九、文字 二五
二〇、藤樹先生 その一 二六
二一、藤樹先生 その二 二七
二二、同情 二七
二三、諺言五則 二八
二四、果物問答 二九
二五、古今傳授の松 三〇
二六、三秀院和尚に答ふ 三〇
二七、山紫水明 三一

目次

巻三

一、列聖遺芳 一
一、物見車 一
二、紅葉の山 二
三、いかづち 二
二、高山彦九郎 二
三、櫻 四
四、星と花 四
五、讀書の樂 五
六、わが幼時 六
七、わのれを風せよ 六
八、英雄の僕 八
九、孝道 九
一〇、奮師におくる 一二
一一、アレクサンドル大王の逸事 一四
一二、日本海の大戰 その一 一五
一三、日本海の大戰 その二 一六
一四、生存競爭 一九
一五、奮闘 二〇
一六、伊能忠敬の晩學 その一 二二
一七、伊能忠敬の晩學 その二 二三
一八、時 二三
一九、南極探檢 その一 二五
二〇、南極探檢 その二 二六
二一、端艇につきて友人に贈る 二七
二二、農業の快樂 二八
二三、レシングの比喩譚 二九
二四、殊勝なる武者振 二九
二五、流泉啄木 三〇
二六、佐久間大尉 三一
二七、わが小園 三三
二八、ポアソナード氏を送る詞 三四

巻四

一、忠君愛國 一

巻四 巻五

二、自國語 四
三、愚公の山 四
四、四明山下の卜居 四
五、蘇武 五
六、冒險ボ 六
七、ベスピオ 八
八、歐米人の氣風 九
九、ボートサイドより 二
一〇、新聞紙 三
一一、模範村長歡迎會 一四
一二、農人形 一六
一三、人の一生 一六
一四、植物の景觀氣象と 一六
一五、植物の景觀と氣象 一六
一六、品性 一八
一七、運命 その一 二〇
一八、運命 その二 二二
一九、水の聲 二二
二〇、朝鮮の風俗 三三
二一、金吾秀秋 二四
二二、桃山時代の工業 二七
二三、職業の選擇 二八
二四、南京の壺 二八
二五、鴻門の會 二九

巻五

一、尊王論の起因 一
二、岩倉公の逸事 その一 三
三、岩倉公の逸事 その二 三
四、先覺者 八
五、ペリー記念彰德會に おける演說 一〇
六、母に上る 二
七、ながれ木 二
八、道話數則 三
九、田舍と偉人 三
一〇、旅況の古今 四
一一、ヒマラヤ紀行 その一 六

一二、ヒマラヤ紀行 その二 一七
一三、望遠鏡と顯微鏡 一八
一四、座右の銘 二〇
一五、蘆庵と君平 その一 二〇
一六、蘆庵と君平 その二 三
一七、岡井某に與ふ 三三
一八、平等院の鳳堂 三四
一九、建武中興論 三六
二〇、芳野の行宮 三五
二一、閑日月 三九
二二、空ゆく雁 その一 三〇
二三、空ゆく雁 その二 三一
二四、鹹 三三
二五、鹽原 三三
二六、擴張せる日本 三五
二七、高田屋嘉兵衛 三六
二八、荒井城址 三八
二九、心育と體育 三九

巻六

一、准后親房 その一 一
二、准后親房 その二 三
三、月雪花 五
四、小品二篇 六
一、杜鵑を聞く記 六
二、砧を聞く詞 七
三、笠置山 七
四、西鄕隆盛に與ふ 八
五、福原 一〇
六、藝苑逸話 一二
一、繪佛師巨秀 一二
二、鳥羽僧正 一三
三、能因入道 一三
九、天の川 一三
一〇、白峰の陵 一四
一一、文話一則 一五
一二、空論を避くべし 一六
一三、讀書の選擇 一七
一四、室鳩巢に與ふ 一八
一五、成吉思汗 一九

目次

一六、武士道　二〇
一七、如意輪堂　二二
一八、人臣の道　二三
一九、はれぬ雲　二四
二〇、道德と法律との關係　その一　二四
二一、道德と法律との關係　その二　二五
二二、忠度と俊成　二六
二三、知己難　二七
二四、桃李不言　二九
二五、幾の記　三〇
二六、わが國の海運　三二

卷七

二七、關學事始　その一　三三
二八、關學事始　その二　三四

卷七

一、忠信の義　一
二、今上天皇御製　三
三、花の譜　四
一、梅
二、雪團
三、芙蓉
四、朴
五、罌粟
六、北京の光景を報ず　七
七、宇治河の先陣　その一　八
八、宇治河の先陣　その二　一八
九、平家雜感　一〇
一、都落
二、入道淺盛
一〇、山鳥時　一五
一一、十八樓の行　一六
一二、筍あらそひ　一六
一三、丈夫の志　一七
一四、自警　一九
一五、白石と宣長　一九

目次

一六、問ふ勿れ說　二一
一七、そぞろごと　二三
一、曙の朝
二、青き眼
三、過ぎにし方
四、賤しげなる物
五、見ぬ世の友
一八、熊野落　三三
一九、舊都の月　三六
二〇、月夜逗子より友人に寄す　三六
二一、荒野の末　三六
二二、故鄕　その一　三六

卷八

二三、故鄕　その二　三〇
二四、讀書　三二
一、石清水詣
二、獅子狛犬
三、國民の抱負　その一　三三
四、國民の抱負　その二　三五
五、見ぬ世の友
二六、國家の干城　三六

卷八

一、園結心と家族制　一
二、壇の浦　その一　二
三、壇の浦　その二　三五
四、修善寺だより　五
五、外人の觀たる富士　六
六、自然のあはれ　六
一、月と露
二、花と月
七、百蟲譜　九
八、うへ野山　一〇
九、戰爭と文學　一二
一〇、爲朝の軍議　その一　一三
一一、爲朝の軍議　その二　一三
一二、奥の細道　一五
一三、木枯　一八
一四、日野山の閑居　一八
一五、死と永生　二〇
一六、義士討入の模樣を報ず　二二

巻九

一七、福澤先生を悼むその一 一三
一八、福澤先生を悼むその二 二四
一九、歡樂鄉 二七
二〇、丹波少將 二八
二一、比良の山風 三〇
二二、落花の雪 三一
二三、故事二則 三三
一、塞翁が馬
二、知音
二四、光賴卿の參內 三五
二五、奈良朝の歐平安朝の文 三八

巻九

一、御國ゆづり 一
二、南へ南へ 二
三、四季の變遷 五
四、芭蕉翁 七
五、梅一輪 九
六、有玉嶋くだりその一 一〇
七、有玉嶋くだりその二 一三
八、人材論 一三
九、いさよふ月 一四
一〇、新島守その一 一七
一一、新島守その二 一八
一二、みやこの錦 三
一三、江戸時代の文學の一斑 三五
一四、和藤内 二七
一五、理想 二八
一六、人の心 三一
一、驥のたぐひ
二、賴むべからず
一七、春夏秋冬四篇 三三
一、雨後の花
二、泊酒舍にて蓮を看る
三、江の月
四、雪中の眺望
一八、春色秋光 三九
一九、餅の辭 四〇
二〇、酒 四一

二一、世界の四聖その一 四一
二二、世界の四聖その二 四三
二三、妹を諭す 四七

巻十

一、國典の研究 一
二、明治の詔敕 二
一、五箇條の御誓文
二、大日本憲法發布の詔敕
三、韓國併合詔書 三
三、菅公その一 三
四、菅公その二 四
五、琵琶行 一〇
六、狂文二篇 一二
一、鼠を責むる詞
二、上野廣小路蕎麥飯の報條
七、世の中 一三
八、鉢の木その一 一三
九、鉢の木その二 一六
一〇、鉢の木その三 一八
一一、西洋文藝復興と明治の盛代 二〇
一二、重盛諫言その一 三
一三、重盛諫言その二 二四
一四、朗詠數則 二六
一五、わが國の繪畫 二七
一六、玉づさ四篇 二九
一、小澤蘆庵主のもとに
二、人の水をおくれるに
三、月の夜友のもとに
四、雪の朝友のもとに
一七、祭のことば 三一
一八、文學藝術の三作用その一 三五
一九、文學藝術の三作用その二 四四

卷十
二〇、鏡の影 三五
一、時平の敕勘
二、鶯宿梅
三、けづり屑
二一、四、大堰川の船 三八
二二、御民われ 三九
二三、孟子ご教育 四一
小原御幸 その一
二四、小原御幸 その二 四三
二五、神道 四五

修訂中等國語讀本詳解字引目次 終

修訂中等國語讀本詳解字引卷一

國漢文學會編輯

一、伊勢神宮

◉（一）試に（コヽロミ）ためしに　擂きを（ヒキ）木を擂くこさ　諸子（シヨシ）諸君　到る處（イタ　トコロ）どこでも　存在（ソンザイ）

引きつゞいてけんおうあさき　版圖（ハント）地圖のこさ、轉じて領地領分の意に用ふ　財力（ザイリヨク）財産の力　風景（フウケイ）けしき

勝れ（スグ）すぐれ　◉（二）天祖（テンソ）天皇の御祖先　蓋し（ケダ）おもふに　神皇正統記（ジンノウシヤウトウキ）南朝の忠臣贈正一位北畠親房の著

◉（三）片田舍（カタヰナカ）　神棚（カミダナ）　大麻（タイマ）おほぬさ　崇め（アガ）たつさび　祀れ（マツ）

る　御靈（ミタマ）おんたましい　敬神（ケイシン）神をうやまふこさ　伊勢參宮（イセサングウ）伊勢神宮に參詣（サンケイ）するこさ

御裳濯川(ミモスソガハ)の流(ナガレ) 五十鈴川　神路山(カミヂヤマ)　翠(ミドリ) 青々と茂れる樹々　◉〔四〕無斷(ムダン) ことわりなくして
咎(トガ)め　内宮(ナイクウ)　外宮(グヮイグウ)　鎭座(チンザ) 神靈がしづまりおはしますこと　御饌(ギヨセン) 神前に供へ奉るべき物
司(ツカサド)り　神境(シンキヤウ) 神のおはしますところ　踏(フ)まば　◉〔五〕古歌(コカ) ふるき歌、此歌は西行法師の作なり
天壤無窮(テンジヤウムキウ) 壤は地、窮はきはまり、天地と共にきはまりなきを　永久(エイキウ)に とこしへに　かはる 渝る

二 汽車旅行(キシヤリヨカウ)

汽車(キシヤ) 煙を書くべからず　しめやかに しつとりと　あたり 邊、ほとり　花盛(ハナザカリ)
紅(クレナヰ)　駿河路(スルガヂ) 駿河國の旅路　◉〔六〕見(ミ)ざりしを みなかつたのを　浦風(ウラカゼ) 海より吹く風
二(フタ)もと三(ミ)もと 二本三本　霰(アラレ)　麥生(ムギフ) 麥の生えて居る畑　霽(ハ)れ 雨のはるるにいふ　飜(ヒルガヘ)れ
る　充滿(ジウマン) 二字共にみつ、いつぱいになること　密柑(ミカン)　詰(ツ)め 入れこむ　◉〔七〕瀬田(セタ)

瀬田の唐橋は名高し　濃(コ)き　山梔子色(クチナシイロ) くちなしの果汁にて染めたる黄色に　塔(タフ)　かへさ かへるさ
かへりみち　薄暮(ハクボ) うすぐれ　花(ハナ)やかに りつぱに、美しく　ここち 心地　須磨(スマ)
かかれる舟(フネ) つないである舟　とりどりに おの〱　◉〔八〕ひま すきま、あひだ
舞臺(ブタイ)めきたる 舞臺の如き　葺(フ)き　欄干(ランカン) てすり　酸漿提燈(ホホヅキヂヤウチン)　奉納(ホウナフ) 神に
なさめたる　◉〔九〕平原一帶(ヘイゲンイツタイ) 平野がずつと　藍(アヰ)　描(エガ)かれ 畫にかく　碁石(ゴイシ)
竝(ナラ)び　蕾(ツボミ)　われは顔(カホ)に 自分一人のやうにじまんげに　靡(ナビ)き　◉〔一〇〕霞(カスミ)
蒲公英(タンポポ)　菫(スミレ)　胡蝶(コテフ)　復(マタ) ふたたび　磯(イソ)　何處(イツコ)　面影(オモカゲ) やうす
いちじるく 著しく、とりわけて　蘆(アシ)　◉〔一一〕芝生(シバフ)　堤(ツツミ)　摘草(ツミクサ)
のどか のびやかなること　やうやう だんだんに　遠近(ヲチコチ)　鎌(カマ)　鋭(スルド)く　さな

がらうど　翁

◉〔一二〕大和田建樹　國文學者

三　中學一年生

學問の海　ゆくて　行く先

水天一碧　碧はみどり、水の天と相接して一つ色になれること。廣きたとへ

彼岸　行きつく先　いでや　さて

腕　◉〔一三〕氣性　元氣　なにして

四　生活

須臾　しばらく　自分で働いて食ふ　食物を得る

額に汗して食ふ　荷もめにも　勞を

執る　仕事をする　貴賤貧富　たつときいやしきこめろまづしき

當然　あたりまへ　◉〔一四〕

飽く　衣て　あへて　少しも

美む　偶然なる　はからはぬ

儼俙　もつけのしあはせ　遺産　のこせる財產

辭して　ことわつて　獨立自活　自分一人で生活す

徒に　無益に

勞苦　ほねおり

貪る　むさぼ

豚兒　ぶたの子

愧づ　はづ

明治初年の洋學者、慶應義塾を創めし人

福澤諭吉

五　社會の組織

百姓　しやう

語をつぐ　話をつづける

密　しげくあつまりあふと

樵夫　きこり

伐る　きる

鑛山　くわうざんかなやま

掘る　堀（ほり）は土偏

斧　をの

鍛へ　きたへ

機織　はたおり

丁稚　でつち

召使　めしつかひ

◉〔二〇〕決シ　けつ　偏

冗談　じやうだん　むだばなし

一心不乱　しんふらん　一所懸命

木綿　もめん

浴衣　ゆかた

◉〔二一〕紡績　ばうせき　つむぎて絲とすること

厄介　やつかい

手拭　てぬぐひ

味噌　みそ

勞力　らうりよく

圖る　はかる

社會　しやくわい　世の中

◉〔一七〕稠　しう

喩ふ　たとふ

驅け　かけ

◉〔一五〕だにへ　さへ

關係　くわんけいかかりあひ

覺悟　かくご

◉〔一八〕掬へ　すくへ

◉〔一六〕

◉〔一九〕

ほれなり

◉〔二二〕シヤボン　石鹸ノかむふよく

六　土地と植物

●〔二三〕森林（シンリン）　もりやはやし　趣（おもむき）　おもしろみ　麓（ふもと）　目（め）

を煮（に）くる　人目につく

●〔二四〕歯輪軌道（シリンキダウ）　アプト式鐵道のこと　碓氷（うすひ）　嶺（みね）　盛（せい）

夏（か）の候（こう）　夏のまつさかりの時　到底（たうてい）

光景（くわうけい）　ながめ　呈（てい）す　あらはす　廟（べう）　みたまや

老杉（らうさん）　急阪（きふはん）　攀（よ）ぢ　湖畔（こはん）　湖のほとり

樅（もみ）　針葉樹　松などの類　密林（みつりん）　よくしげれる林

それであるさ　水蘚（すゐせん）　みづごけ

●〔二六〕固有（こいう）　もとからある　原頭（げんとう）　頭はほとり　花苑（くわえん）

中土（ちうど）　中ほどの土地

◉〔二五〕滴（したた）る　しづくとなつておちる

距（へだ）たる　差異（さい）　ちがひ　鬱蒼（うつさう）　よくしげりあへること　それと

弁（べん）に　自生（じせい）　自然

に生ずる

光（くわう）けし　ひろさのを

●〔二七〕行（かう）を轉（てん）じて　行く方面をかへて

●〔二八〕ほしいまま　きままに

陳（のべ）ふ　言ふ　三好學（みよしがく）　植物學者、理學博士

七　朝顔（あさがほ）を贈（おく）る

●〔二九〕頂戴（ちやうだい）　いただく　肉桂（にくけい）　樟（くすのき）　楊梅（やまもも）　風（ふう）

忙（いそが）し　培養（ばいやう）　つちかひやしなふ

案外（あんぐわい）　おもひのほか　手際（てぎは）

●〔三〇〕風情（ふぜい）　ありさま　廣袤（くわうばう）　廣は東西のひろさ、袤は南北のひろさ、

聊（いさゝか）　すこし　さもあらん　さうでもありませう　回復（くわいふく）　かへりしこと

匆匆（そうそう）　いそがしく、手紙の終に書く挨拶の語　唼（さ）きそめ　さきはじめ

八　英雄（えいゆう）の心事（しんじ）

撫子（なでしこ）　きず　點鉄

園藝（えんげい）　庭などを作ること

◉〔三一〕心事（シンジ）心のなか　家臣（カシン）けらひ

年（ネン）年若きとき　頻（シキリ）に　◉〔三二〕撓（タハ）む　撓（たわ）むる

身方（みカタ）味方と書くは正しからず　◉〔三三〕湯漬（ユヅケ）湯をかけた飯

をあはす　符節はわりふ、物事の正しく合ふにたとふ　箸（ハシ）　弛（ユル）ぶ　安佚（アンイツ）あんらくにあそぶ

九　公の禮儀

◉〔三四〕訪問（ハウモン）たづねる　◉敍（ノ）べ　薦（スヽ）む　椅子（イス）　倚（ヨ）り　座蒲（ザブ）

團（トン）　極端（キヨクタン）かたはしにかたよれること　◉〔三五〕會葬（クワイサウ）葬式に立會ふこと　讀經（ドキヤウ）經をよむこと

弔詞（テウシ）とむらひの文　燒香（セウカウ）香をたくこと　靜肅（セイシュク）おごそかにしづか　悲痛（ヒツウ）かなしむ　肘（ヒヂ）

除（ノ）けて　拋（ナ）げ　先輩（センパイ）年上の人、又は學識等の先に進める人　◉〔三六〕鉢合（ハチアハセ）　劇（ゲキ）

塲（ジヤウ）芝居小屋　這入（ハイ）る　繋（ツナガ）つて　邪魔（ジヤマ）

自（ジ）分と人と　餘（ヨ）のほかの　秩序（チツジヨ）きまり

圓滿（エンマン）滿足に　◉〔三九〕差違（サヰ）ちがひ

穗積陳重（ホヅミノブシゲ）法學博士

一〇　クルップ鐵工塲（テツコウヂヤウ）その一

西曆（セイレキ）西洋の曆、即ち耶蘇降誕紀元　◉〔三七〕鯨波（トキ）の聲　自（ジ）

供奉（グブ）天子の行列にお供するを　◉〔三八〕毆打（オウダ）うちなぐると　擲（ナゲ）る

高官（カウクワン）高き役人

參差（シンシ）いりまじる　車駕（シヤガ）みくるま　半空（ハンクウ）高き空　瑞雲（ズイウン）

齒簿（シボ）行幸の行列のこと　壯觀（サウクワン）さかんなるながめ　荷（ニナ）ふ　戴（いただ）ける

偉勳（イクン）大なるいさをし　懷（オモ）ふ

◉〔四一〕慘憺（サンタン）苦心すること　◉〔四〇〕

建設（ケンセツ）たてかまへる　鑄鐵（チウテツ）鐵をゐる　偏（ヒトヘ）に　迹（アト）をしまず出し

ひたすらにいちづに　辛（シン）

酸なぎ　凪めなめ　收益なさめる利益

技術わざ　素養したごしらへ　境遇きやうぐうまはりあはせ

ひざもと

◉〔四三〕課程くわてい　わりあてたる仕事　脳裏なうりの心のなか　寸時すんじの時　劇しはげし

◉〔四四〕牢かた　驚歎きやうたんほどろき　措おかざるやまない　頭上づじやう　負債ふさい借金

念ねんごろ　精勵せいれいむこと　よくはけむ　效かひ

精良せいりやうすぐれてよき　乃ちそこで

◉〔四五〕凄すざまじ　金牌きんぱい金の賞牌

一一　クルップ鐵工場てつこうぢやう　その二

再度さいど二度目　影響えいきやうさしひびき　◉〔四六〕いふばかりなく　いひやうもない　纔わづかに

やつとのことで　飢渇きかつうるふかくと　購入かうにふかひれる　精巧せいこうこまかくたくみなる

凌しのぐ

◉〔四七〕賞揚しやうやうほめあげる　普墺戰爭ふあうせんさう

一二　心の修行こころのしゆぎやう

◉〔四八〕刀工とうこうかたなかぢ　徵すめす　畢生ひつせい一生　揮ふるへ　鍛ふきたふ

◉〔四九〕鄕義弘がうのよしひろ　右に出づるものなし　賄まひない　◉〔五〇〕覗ふねらふ　刺…刺名を出すを、又は名乘ること

慇懃いんぎんていねい　◉〔五一〕懺悔ざんげ悔い改める　雲泥うんでい天地　か

うがうしく神々しく　注連繩しめなは　祓ひ淨めはらひきよめ　威儀堂堂ゐぎだうだうたるこ

うがうしくやうすの正しくむごそかなること

◉〔五二〕丹誠たんせいまごころ　懇ねんごろに　謙遜けんそんへりくだること

一三　正直の頭しやうぢきのかうべ

神は正直の頭に宿る　正直の頭に神宿る。神は正直の人を守り給ふの意

油斷大敵ゆだんたいてき　油斷は大敵の如く恐しきものの意

◉〔五三〕急がばまはれ　いそがしき時にはゆ
何事もすきなれば上手になれる　塵ももつもれば山となる　すきこそ物の上手なれ
くなる　友を択べ　良薬は口に苦し　忠言は耳に逆ふ　小積つて大と成る　朱に交れば赤
世に遺ること　七ころび八起　何度失敗しても　人は一代名は末代　名譽の後
に分別ある故侮る勿れ　一寸の蟲にも五分の魂　相當

一四　一壺千金

◉〔五四〕中流失レ舟、一壺千金　川の中程で舟が覆つた時は一個の壺も千
命を助かること　事急なる　危き場合　圓の價がある、それはその壺をたよつて
老若男女　火屑　火の　雨の脚　雨の
捲き籠め　斃る　死ぬこと

◉〔五五〕攫み

◉〔五六〕聯想　それにつけて思ひ出すこと
のながめ　故事　いはれのあること
たるもの　航行　舟で行くこと　忍の提燈　忍ぶ時に用ゐる提灯
おやゆび　縛り　たどる　行く、辿る　さがしつゝ　總じて　おしなべて　透明　すきとほれる

◉〔六〇〕繋ぐ　理學博士　庄三郎

一六　水浴

茶毘　死骸を火葬すること　吝む　惜しむ

一五　螢

◉〔五七〕意物　四季折々　心を惹く　注意させること

◉〔五八〕横行　ほしいまゝにあるく　劫す　おどかす　拇指

◉〔五九〕深林　はやし　草叢　草の茂れる地　村

◉〔六一〕撮る　需用　いり　渡瀬

本書ハ文學士　細川潤次郎　文學博士　書官長　秘

◉〔六二〕すこやかなる精神（セイシン）は、すこやかなる身體（シンタイ）に宿（ヤド）る　すこやかは健康。此の格言は、ローマ人ツュベナリウス(Juvenalius,45-130)の言にして、Mens Sana in Corporesano. メンス サナ イン コルポレサノ)を訛したるもの也　ローマ紀元前七百五十二年ロムラス(Romulus)の建てし都、紀元前五百十年より全三十年前迄は強大なるローマの首府なりき、今は伊太利の首府也　チベル河　Tiber. 長さ二六〇哩、地中海に注ぐ　塵垢（ジンコウ）ちりやあか　游泳（イウエイ）およぐこと　鐵石（テッセキ）かたきたとへ　彫刻（テウコク）ほりもの　軀幹（クカン）　沐浴（モクヨク）ゆあみすること　惡性（アクシャウ）わるい性質　◉〔六三〕醫家（イカ）　醫者　齊（ヒト）しく　一や　うに　湯浴（タウヨク）　淡水（タンズヰ）まみづ　礦泉（クワウセン）鑛物性の水　刺戟（シゲキ）し　つくる　抵抗力（テイカウリョク）はりあふ力　浸（ヒタ）す　紋（シボ）る　摩擦（マサツ）する　◉〔六四〕頒（ワツラヘ）し　虛弱（キョジャク）よわい　常習（ジャウシフ）牛（ギュウ）耳（ジ）の習慣　鹽嗽（カンソウ）うがひ口そゝぐ　廢（ハイ）する　やめる　激（ゲキ）　浪（ラウ）はげしきなみ　遠淺（トホアサ）　特種（トクシュ）とくべつ　撫摩（ブマ）なでさする　相挨（アヒマ）ちて　相助けて

◉〔六五〕捴（ヒカ）へ　劇變（クキヘン）はげしき變化　礫石（レキセキ）小石　◉〔六六〕強（シ）ひて　保（ホ）養（ヤウ）　紅塵萬丈（コウヂンバンヂャウ）塵多き都會の形容　オゾン　酸素と同素體、(Ozone. O_3)　胸襟（キョウキン）むねの中　爽快（サウクワイ）さわやかにこゝろよし　大（ダイ）大きくひろげる　胸郭（キョウクワク）むね　擴（クワク）　一七　天の橋立　曇（クモ）り　一覽（ラン）の念（ネン）一度見たいとの志　勃勃（ボツ〳〵）むく〳〵　◉〔六七〕儻（ヤト）ふ　客舍（カクシヤ）　宿屋　江上（コウジャウ）海上　苫（トマ）菅又は茅を以てあめる舟の屋根　毛氈（モウセン）毛布　布（シ）く　櫂（カイ）　漁（ギョ）村（ソン）　れふれする村　婆娑（バサ）かげのうつれるさま　長洲（チャウシウ）ながす　舟子（シウシ）ふなこ、せんどう　憩（イコ）ふ　一休（ヤスむ）　藁草履（ワラザウリ）　◉〔六八〕成相山（ナリアヒヤマ）　嶮（ケハ）し　同（カヘ）す　與謝の海（ヨサのウミ）　橋立より外の海　與謝の江（ヨサのエ）　橋立より内の海　劃（カギ）る　劃（さかひ）する　波（ハ）　萬頃（バンケイ）ひろ〳〵たる

光なみの光　映じ　うつりあふ　海士詩趣　詩に作られるやうなおもむき　◉〔六九〕眼鏡

眺望ながめる　古雅ふるくしてみやびやか　ゆかし　したはし　漂ふ　下枝えだ　◉〔七〇〕ひとしほ一層

一八　入船出船

錨　はしけ　靜　◉〔七一〕波止場　埠頭　ふかぢ　舵　こあげ歌　荷物を小揚げする歌　賑ひ　まほ　眞帆、追風に正しくあげたる帆　瀬戸せと海　水夫かこふ　舵手かぢとり

一九　廉潔と節倹

◉〔七二〕廉潔　利慾にうとく潔白なること　卑み　伺候うかがふ　談笑わらひばなし

◉〔七四〕下知　さしづする　采配　兵に號令する具　にみに　客嗇やぶさか、しわきこと　◉〔七五〕披露　ひろめしめす　指圖　さす　人な人　◉〔七六〕事足り　役に立つ　藤岡作太郎　故文學博士、有名なる國文學者

二〇　燈錢

同社中　同門の弟子一同　瑣細　小さい　さし支ふ　◉〔七七〕牢獄　義士　節義の士　節婦　操ある婦　有餘　ありまる　銘銘　おのおの　よもや　先師　亡き先生　長者持　金持　理　ことわり　膏　あぶら　◉〔七八〕

儲け　囊中　さいふ　同じく　拂底　底を拂ふことは乏しくなること　迂闊　うくわつ　眞字　本字、まな　◉〔七九〕同斷　前正四位、松陰門下第一の俊才なりしが不幸夭逝す　久阪元瑞　くさかげんずゐ

二　蒔かぬ種は生えぬ

諺（いひならはし）　報酬（むくい）・勞動（ほねをること）　◉〔八一〕虹　涌く　確む　蔽つて　蠅　孵つて　◉〔八二〕消毒法（病毒を取除く方法）　微細（こまかい）　罐　◉〔八三〕理窟　觀察（みてしらべる）　粗漏（おろそか）　推　理（理をおして考へること）　精密（くはしくこまかし）　蜆　鰻　◉〔八四〕孵化（かへること）　所謂　溯る　溝　匍ふ　◉〔八五〕模樣　詳しく　慥　附着（くつつくこと）　◉〔八六〕鴫　論決（ろんじきめる）　輕卒（かろはづみ）　斷言（いひきる）　◉〔八七〕丘淺治郎（理學博士）

三　笑話二則

〔一、寒熱〕　膨脹（ふくらせる）　收縮（ちゞまらす）　◉〔八八〕伸び

〔二、禁酒〕　貰つた　呆れて　◉〔八九〕笑布袋

三　田園生活

田園（ゐなか）　二百十日（立春より二月十日目の日、暴風起る時節なれば、農家は厄日（ヤクビ）とす、稻の花盛なる頃なればなり）　截り　索　午（むまの刻、正午）　玉蜀黍　◉〔九〇〕かしまし（やかまし）　棗　窺ふ　茄子　葱畑　殺氣（すごき有樣）　◉〔九一〕驟に　韮　陰曆（舊曆）　八朔（八月ついたち）　舊例（ふるきためし）　擣く（臼にてつく）　◉〔九二〕洪水（大水）　噂　蕃椒（たうがらし）　芋　さやか（はつきり）　千里の波（ひろびろたるさま）　調子　◉〔九三〕鮒　ほとゝぎす（文學雜誌の名）

二四　海舟の苦學

船載（ヘンサイ）す船來、書肆（ショシ）書店　新刊（シンカン）新に發行せしもの　購（アガナ）ふ　辛（カラ）うじて　やつとのことで

調（トトノ）へ　◉〔九四〕遺憾（ヰカン）れん　與力（ヨリキ）奉行の手下にして同心を指揮する役人　切（セツ）に　しきりに

借覽（シヤクラン）かりて　みるも　執拗（シフエウ）しふねんぶかきこと　◉〔九五〕差（タガ）へず　手寫（シユシヤ）うつしとること

了（テ）へる　終　厚意（コウイ）せつ　◉〔九六〕不審（フシン）ぬ、わからぬ　つまびらかならぬ、質（タヅ）す　問ひたゞす

通讀（ツウドク）り讀む　一と通　慚愧（ザンギ）かし　はづ　野人（ヤジン）　禮節にならはぬ者、自分の謙稱　固辭（コジ）とはる　かたくこ

二五　信用（シンヨウ）

萬人（バンジン）の人　多く　◉〔九七〕簡易（カンイ）てがる

遠（エン）さまはり　ほい　迷惑（メイワク）　印章（インシヤウ）判　捺（ス）す

複雜（フクザツ）くむ　いり　敏活（ビンクワツ）きこと　すばや　迂（ウ）　浪費（ラウヒ）ひやす　むだにつ　幾何（イクバク）

二六　小笠原島通信（ツウシン）

宿（タダ）に　箇人（コジン）一人　體面（タイメン）さい　ていに旅すること　こゝろのまゝ

事務（ジム）　役所のしごと　修繕（シウゼン）　修をさむ、繕つくらふ　歸朝（キテウ）　外國より歸ること

員（イン）の人　かゝり　帳簿（チヤウボ）めん　◉〔九九〕合札（アヒフダ）　チエツキ　籐（トウ）　縣（カケン）直

御配慮（ゴハイリヨ）　御心配　出帆（シユツパン）　坂錨、ふなで　追手（オヒテ）の風（カゼ）　風追　駛（ハシ）る　◉〔一〇一〕有利（イウリ）

利益ある　痔（ヂ）　草木の育たぬ土地　パインアツプル　鳳梨　咖啡（コーヒー）　カツフイ　タコ

の木（キ）　その葉は編みて蓆籠等を作り根の纖維にてなはを作る　◉〔一〇二〕通商（ツウシヤウ）　互に往來して商賣すること　薪水（シンスヰ）

薪たきぎ　碇泊（テイハク）　碇いかり、船の港にとまること　放擲（ハウテキ）　擲なげうつ、なげすてる　要港（エウカウ）　必要なる港　氣（キ）

力氣（リョクキ）元（もと）に回復（クワイフク）かへる　懼（オソ）る　ひとかご　一人前　向後（カウゴ）之（これ）より後

◉〔一〇三〕歸化人（キクワジン）　他國人が國籍を移して其の國民となること

正覺坊（シヤウガクバウ）うみがめ　生計（セイケイ）くらし　徒跣（トセン）かちはだし　カヌー船（セン）　獨木舟

涼風（リヤウフウ）すずしきかぜ　油桐（ユトウ）　蓄積心（チクセキシン）金錢をためる心　許多（キヨタ）たくさん

◉〔一〇四〕　頓首（トンシュ）頭を下げてお辭儀をすること

手紙の結末の語　敬法學博士（タクチウキヂ）田口卯吉

二七　所澤にて飛行機（ヒカウキ）を觀る記（キ）

喇叭（ラツパ）　格納庫（カクナフコ）をさめおくら　信號旗（シンガウキ）

◉〔一〇五〕當局（タウキヨク）その局に當る、それにたづさはる意用

白扇（ヘクセン）しろきあふぎ　秩父（チツプ）　屏風（ビヤウブ）　四望（バウ）四方をながめる

鬱々（ウツ〳〵）よく茂れるかたち　凌ぐ（シノ）　風速（フウソク）風の速力　茶（チヤ）

褐色（クワツシヨク）ちや色　微笑（ビセウ）ほゝえみ

◉〔一〇六〕推進機（スヰシンキ）　プロペラー　廻轉（クワイテン）まはること

呻（ウナリ）猛然（マウゼン）勢よきおと　躍進（ヤクシン）をどりすゝむ　滑走（クワツソウ）すべりはしる

旭日（キヨクジツ）あさひ

◉〔一〇七〕雙翼（サウヨク）両方のつばさ

往左往（ワウサワウ）に　あちらにこちらに　美觀（びくわん）うつくしきながめ　塹（ネグラ）　右（ウ）

してここ　奇觀（キクワン）きもうなながめ

ろよい　雄大（ユウダイ）をこしくおほきい　輕快（けいくわい）輕さうにし輕快て氣持よき　壯快（サウクワイ）さかんに

喝采（カツサイ）手をうちて聲をあげる　翔翔（カウシヤウ）ごびまはる　陪觀者（バイクワンシヤ）高貴なる方の供をしてみて居る人　拍手（ハクシュ）

◉〔一〇八〕悠悠然（イウ〳〵ゼン）ゆるやかに

師（シ）ぐや　羽翼（ウヨク）つばさ　操（アヤツ）り　飜（アガ）る　空中にびあがる　表具（ヘウグ）

郊外（カウグワイ）町はづれ　羽搏（ハネウ）ちて　はゞたきして

◉〔一〇九〕有司（イウシ）役人　追放（ツヰハウ）刑の名、鄉里をおひはらはるること　先進國（センシンコク）

長歎（チヤウタン）ながくなげく　多時（タジ）しばらく　轟然（ガウぜん）大なる音の形容　愕（オドロ）く　びつくりする

先に進歩せる國

二八　月の世界

●〔一一〇〕缺乏（クツパフ）　なきこと

想像（サウザウ）　外になきことを心の中で考へてみると

いただきてつべん　坑（アナ）　底深きあな

連山脈（レンサンミヤク）つづいてゐると

孤立（コリツ）ひとりだち

直接（チヨクセツ）にちかに

日向（ヒナタ）

日蝕皆既（ニツシヨクカイキ）　日食の全面のくらくなるもの

●〔一一一〕軸（ヂク）　緩（ユル）い

辛抱（シンバウ）

●〔一一二〕温（アタヽ）つて

じやまする

●〔一一三〕腰巾着（コシキンチヤク）

放散（ハウサン）　はなちちらす

遮（さへぎ）る

●〔一一四〕要（イ）る

曇天（ドンテン）　くもつたてんき

大差（タイサ）　大なるちがひ

●〔一一五〕

観測（クワンソク）天氣象等を器械にてはかりしらべること

肉眼（ニクガン）

桂男（カツラヲトコ）　月の中に住めりといふ

男

盈虧（エイキ）　みちがけ

朔（サク）　ついたち

●〔一一六〕粗（ソ）　あらきこと

幅（ハヾ）

翅（ツバサ）

寺尾壽（テラヲヒサシ）　理學博士

●〔一一七〕

●〔一一八〕屯兵（トンペイ）　屯（たむ）しろしてゐる兵

●〔一一九〕牢（カタ）く　しっかり

●〔一二〇〕若干（ジヤクカン）　いくらか

●〔一二一〕祝意（シユクイ）　いはひのこころ

●〔一二二〕擔架（タンカ）　病人負傷者などをのせるもの

途（ト）

二九　臺灣日記（ダイワンニツキ）

雲林（ウンリン）　臺中廳斗六街東南方にあり

はひにかゝるに用ゐる字

曩日（ノウジツ）　曩（さき）に。此の間、先日

兵燹（ヘイセン）　戰爭による火事

罹（カ）りわざ

假設（カセツ）　かりにこしらへた

脆弱（ゼイジヤク）　もろくよわし

酸鼻（サンピ）　あはれみいたむこと

檳榔樹（ビンラウジユ）　熱帶樹にしてその實は黒色の塗料に用ふ

禁（タ）へず

土匪（ド）　土着の賊

潛伏（センプク）　ひそみかくれること

虞（オソ）れ

警戒（ケイカイ）

前以ていましむること

小憩（セウケイ）　小やすみ

寓豪（フガウ）　かれもち

屋瓦（ヲクグワ）　やねかはら

襲（オソ）はる

屋宇（ヲクウ）　いへの地

病臥（ビヤウクワ）　病氣にて床にふすこと

錠（ヂヤウ）　まへ

北白川宮殿下（キタシラカハノミヤデンカ）　能久親王、近衞師團長

要害（エウガイ）　守るに易く攻むるに難きかなめ

次途中、みちすがら　うちかづきて　ひきがぶりて
軍醫監　少將相當官　無言つて　旅裝したく　戰況やうす　指揮さし
よし　どよい　病名、猩紅熱　駐在　本部よりわかれて出て居るを　討伐　ひらぐ　炎熱　あつさマ
ラリヤ　同胞　はらから、兄弟姉妹　實況　實際の有樣　見せまほし　見たい
食饌もの　出陣　出ること　煮付　ジャボン　橙の類
劇烈　はげしき　胃さる　わざはひにかかること　一滴　ひとしづく　濺ぐ　可ならん
石黒忠悳　陸軍醫總監　全權公使　聘問の禮　おとづれの禮

三〇　初度の歐洲行

◉〔一二五〕京極　特命　こくに命じた

◉〔一二三〕あたかも

◉〔一二四〕

員末に列す　その人數の末につらなる、謙遜していふ語　初度　はじめて　派遣　さしつかはす　屬
何度も　携帶　たづさへる　節略　にするも　宰相　大臣　支度
採用　とりあげて用ゐる　減員　人數をへらす　贈品　おくりもの
笑話　わらひばなし　駕籠　甲冑　よろひ　挾箱　英斷　よきもひきりのこと
物の用にやく　評議會議　叱り　香の物　つけもの　腐敗　くさること
長途　ながみち　崎嶇　けはしきこと　草鞋　渺茫　ひろくはるさま　適はぬ　履物
異臭　にほひをかしな　秘傳の手　おく　笑止やしい　遍歷　あるきめぐる
詮議　さく　神州　日本の美稱　恥辱　はぢ　茗荷　めうが　託す　ことづける

◉〔一二七〕

◉〔一二八〕

◉〔一二九〕

◉〔一三〇〕

◉〔一二六〕格式　おきてきまり

修訂 中等國語讀本詳解字引 卷一終

修訂 中等國語讀本詳解字引 卷二

一　日章旗

◉〔一〕日章旗　日の丸のしるしのはた、章しるし

◉〔二〕祭祀　まつり　國體　國のなりたち

◉〔三〕赤心丹心　赤も丹もあか、まごころ

◉〔四〕氣性　性質　標本　ひょうほん

◉〔五〕象る　欽仰　つゝしみあふぐ　萬邦　普く

◉〔六〕記章　しるし　眞丸　まんまる

缺點　きず

世一系　系はすぢ　血統

籠る

進取の氣象　進んでゝ元氣

汚れ　きよきこと

清淨潔白　けがれなくきよきこと

標し　しるし

塊　かたまり

破裂　やぶれさけること

◉〔一三一〕待遇　もてなし

不作法　ぶさはう　困じ　こう

使節　使節團の使

壓制　おさへつけること

叫び　さけび

干渉　横からさし口を出すこと

外國文を飜譯　ほんやく　譯すること

順次　じゅんじに

追想　そうさう

疏通　かよふ

通辯　つうべん

寄港　港によること

疲る　つかる

失敗　しっぱい　宴席　えんせき

疎忽　そこつ　そそう

遊歷　ぶらくあるくこと

看盡　みつくし

笑む　えむ

福地源一郎　有名なる文人、號は櫻痴居士

固守　かたくまもること

彼我　かれとわれと

奔命　命令によりてかけまはること

依賴　たのむ

接待官　つき役目

好商　すきくの商人

坐臥　すはつたりねたりすること

てこまつて

瑣細　ちひさいこと

◉〔一三一〕待遇　もてなし

不作法　ぶさはう　困じ　こう

使節　使節團の使

壓制　おさへつけること

叫び　さけび

干渉　横からさし口を出すこと

外國文を飜譯　ほんやく　譯すること

順次　じゅんじに

追想　そうさう

疏通　かよふ

通辯　つうべん

寄港　港によること

疲る　つかる

失敗　しっぱい　宴席　えんせき

疎忽　そこつ　そそう

遊歷　ぶらくあるくこと

看盡　みつくし

笑む　えむ

福地源一郎　有名なる文人、號は櫻痴居士

固守　かたくまもること

彼我　かれとわれと

奔命　命令によりてかけまはること

依賴　たのむ

接待官　つき役目

好商　すきくの商人

坐臥　すはつたりねたりすること

てこまつて

瑣細　ちひさいこと

海外國（カイグワイ）　松波仁一郎（マツナミジンイチラウ）　法學博士

二　ビスマルクの幼時（エウジ）

英雄（エイユウ）　すぐれて ふらき人　豪傑（ガウケツ）　豪は百人にすぐれし人、傑は萬人にすぐれしもの。ふらい人

の行ふ道　忖り（ハカ）　心にはかる　偉業（井グワ）　大事業

天稟（テンピン）　天よりうけたるもの、天性　諦む（アキラ）　常（ジヤウ）

人凡人（ジンボンジン）　英名（エイメイ）　すぐれし名　辛酸（シンサン）　なんぢ嘗め（ナ）

心をさられる　淫し（イン）　いりびたる　●〔八〕爭闘（サウトウ）　あらそひ　耽り（フケ）

時勢の變にあふこと　●〔九〕嚴格（ゲンカク）　きびしい　創立（サウリツ）　はじめたてる　偉勳（井クン）　大なるいさをひ　風雲の會（フウウンクワイ）

泳ぎ（エイ）　およぎ　過激（クワゲキ）　はげしすぎる　朝餐（テウサン）　朝食　悠長（イウチヤウ）　ゆつたりのびやかに　家塾（カジユク）　私塾　游（イウ）

おきて　臆する（オク）　わるびれること　新來（シンライ）　あらたに入たる　●〔一〇〕卓（タク）　つくゑ　制裁（セイサイ）　きまり、

●〔一一〕悠然（イウゼン）　ゆつたりおちつけること

首領（シユリヤウ）　かしら　●〔一二〕粗暴（ソバウ）　てあらし　聰慧（ソウケイ）　さとくかしこし　儕輩（セイハイ）　仲間を壓し（アツ）

の上に立つ　感歎（カンタン）　かんしんほめる　殘燈（ザンドウ）　のこりのともしび　空想（クウザウ）　出來ないことを心に思ふこと　得（トク）　得意なること

得（〳〵）　●〔一三〕連夜（レンヤ）　まいばん　玆（シン）　よくつさむるさま　裁決（サイケツ）　物事をさばくりさばく

流るるが如く（ナガゴト）　水の流るる如く早きこと　奇策縱橫（キサクジウワウ）　人の思ひつかぬやうなはかりごとが自由に出ること

周到（シウトウ）　あまねくゆきわたること　肇固（テウコ）　かたきを　賜（タマモノ）　●〔一四〕琢く（ミガ）　瓦礫（クワレキ）　かわら

小石　我を折り節を屈し（テ　セツ　クツ）　がまんをおさへて　鑑み（カンガ）　てがら　戰端（センタン）　いくさ　旬日（シユンジツ）　十日

城下の盟（シヤウカ　チカヒ）　降參させて盟はせること　勳威（クン井）　てがらや威光　赫赫（クワク〳〵）　光り輝やくかたち　凱（ガイ）　勝つてかへる

舊師（キウシ）　昔の先生　欣喜（キンキ）　よろこぶ　稱揚（ショウヤウ）　ほめあげる　●〔一五〕讃（サン）　ほめことば

素志（ソシ）　かれての志　薫陶（クントウ）　學德を以て人を化し導くこと

三 濠洲航路（ガウシウカウロ）

航路（カウロ）船の みち

◉〔一六〕約（ヤク）そよ

見（アラハ）れ 見（アラハ）え

蓊鬱（テウウツ）の よく茂れる さま

相映（アヒテイ）じ うつり あふ

輕舸（ケイカ） 小き 舟

綴（セツ）り つゞり あはす

指點（シテン） ゆびさし 示す

相應（アヒコタ）へ 互にこたへあふ

雅趣（ガシュ） 風雅なおもむき

◉〔一七〕漸次（ゼンジ） だんだん

模糊（モコ） ぼんやり

幽（カスカ）に

水煙（スヰエン） みづけむり

裏（ウラ）

茫茫（バウ〳〵） 水のひろきこと

航程（カウテイ） 船の進むみちのり

水（スヰ）

天涯髣髴（テンハウフツ） 水と天とのさかひがぼんやりせること

島（トウシヨ）の こと

青螺（セイラ） 島は大島嶼は小島

採貝業（サイバイグフ） 貝をとるわざ

出稼（デカセギ） 鄉里を出でか せぐ

◉〔一八〕制（セイ）して おきて

圏はわ、南北両緯度二十三度半以内

熱帶圏内（ネツタイケンナイ）

知事の如き官

駐在（テウザイ） 派遣せられて留り居ること

おもむろ

◉〔一九〕太守（タイシュ）

◉〔二〇〕

住（カ）い 點（テン）

棹聲（タウセー） さを の音

進航（シンカウ） 船のすゝむこと

島嶼（トウショ） 島は大島嶼は小島

形勝（ケイショウ） 景色よきこと

屈指（クツシ） 指を屈する有名なる

媚（コビ） あきらかに うつくし

匹敵（ヒッテキ） たぐふ

頻（シキリ）

崛起（クッキ） 急に高くなる

丘阜（キウフ） をか

みえかくれ

悉（ツク）す 尽きつくす

根據地（コンキョチ） もとゝするところ

稠密（チウミツ） しげくこみあふ

都府（トフ） みやこ

稱（ショウ）ほめる

大廈（タイカ） 大なるいへ

船のはせすこむこと

◉〔二二〕呎（フイート）

手間 政廳所（セイチヤウ）

價値（カチ） ねうち

漫（マン） 咲き亂れること

恍（クワウ）として ぼーつとして

故國（コク） 本國

岬嘴（カフシ） みさきの先

錨地（ベウチ） 船のとまる處

一瞥（ベツ） ちらつと見る

港澳（コウオウ） みなと

◉〔二一〕

鬱蒼（ウッサウ） 茂れること

村莊（ソンシャウ） 別莊

隱見（インケン）

砲壘（ハウルヰ） 砲臺

偉觀（ヰクワン） 大なるながめ

◉〔二二〕長足（チャウソク）の進歩（シンポ） 進歩の早きこと

歎（タン）

高樓（カウロウ） たかどの

櫛比（シッピ） くしの齒の如くならぶ

駛航（シカウ）

運輸（ウンユ） 荷物をこぶこと

枚擧（マイキョ） かぞへあげる

追（イトマ）

移植（イショク） うつしうゑる

艷麗（エンレイ） つやゝかにうつくし

爛漫（ラン）

四　秋の夜

◉〔二四〕めでたき　美し、結構なり

瓦　目ざまし　目にたつ

◉〔二五〕をかし　おもしろし

靈氣　くし氣　浸み　中の秋　陰暦八月のこと　わが魂　おのれのこころ

かすけく　かすかに　咽く　小さき音をたつ　雜木　様々の木　梢　雫葉　垂葉

纖葉　き葉　素月　白き月　照り　輝り　闇や　闇み　闇の如き　闊葉　ひろき葉

詩情　詩のおもしろみ　おのがじし　各々　畫　畫の如き　おもむき

◉〔二六〕廊下　廊には　廊に　天心　天の中、中天　爽涼　さわやかにすずし　清澄　きよくすめること　醸し　作り出し

◉〔二七〕光華　はなやかなひかり　六合　上下四方

五　杉の戸

清水濱臣　徳川時代の國學者

◉〔二七〕おしあけ方　あけかた　軒端　のきばに近い

なかば　中程　すぎの戸　杉の戸、こゝにては過ぎのスギと杉のスギとをかけて　そぼふる　しよぼし

いへるもの　よぼろ　香にほへ　かほりよくにほふ　たちばな　橘　芭蕉　薫る　岩もる　岩の間から流れる　くひな　水雞　しきる　鳴きしきる、たびかさなる　しみづ　清水　ばせを

◉〔二八〕冬ごもり　冬の日に家の内にこもり居ること　埋めたる火　暖の男　ねや　閨、寝る間　うづみ火

六　半家村

◉〔二九〕幡多郡　水を挟み　川を兩方からはさむこと　巖壁　壁の如きいは　世ば

なれ　世間ばなれして　人げ疎き　人のけはひのない　當世風の　情誼（ジャウギ）　人情や義理を守ること　今樣（イマヤウ）　吉凶（キツヤウ）よしあし、めでたいことさわざわひ　禍福（クワフク）わざはひさいはひと　田租（デンソ）　田の年貢　獻（タテマツ）り　差上げ　ふ　自己（ジコ）おのれ　疾病（シッペイ）やまひ　賦役（フエキ）　賦は稅をわりつくること　役は人夫を云付けること　郡吏（グンリ）　郡の役人　督促（トクソク）さいそく　侍養（ジヤウ）はべりやしなひ　に　逃亡（トウバウ）にげうせる　流離（リウリ）　他國へさまよふ　所職業なくふらく〳〵せる者　公役（クヤク）おかみのやく　はあるべき　報いないでよからうか　無賴（ブライ）の徒　一定の職なきもの　前　病に臥し　病氣にかゝり　享保（キヤウホウ）　中御門天皇の御代の年號凡そ二百年

◉〔三〇〕語（カタ）りあはせ　相談しあひて　俱（トモ）に　凶荒（キヤウクワウ）　農作物のできぬこと　恆（ツネ）の産（サン）　暮して行くだけの財産　浮浪（フラウ）の者（モノ）　一定の居所なくふらつく者

◉〔三一〕さには（さう）では　報（ムク）いずてや　あながちに　強ちに、さほどに　榮譽（エイヨ）　名譽

◉〔三二〕家柄（イヘカラ）　家すぢ。よきいへから　諭（サト）し　聞（キコ）えるに　申上げたるに　めでてほめ

◉〔三三〕職分（ショクブン）　つとめ　さばかり　それほど　褒賞（ホウショウ）　ごほうび　餘財（ヨザイ）の金　あまりの金　造作（ザウサク）　家のつくり　賞賜（ショウシ）　褒美　楮皮（チョヒ）の皮　かうぞの皮　葛（クズ）　藤繩（ワラビナハ）　梁木（ハリキ）　棟（ムネ）と打ちちがへに組みて屋根を支ふる木　均分（キンブン）　ひとしくわける　租米（ソメイ）　れんぐの米　土産（ドサン）　みやげ　穢（クワイ）れ　不作（フサク）ふでき　收（シウ）　かこつ（なげく）　睦（ムツ）みし　近藤芳樹（コンドウヨシキ）　名高き國學者

◉〔三四〕さのみ　それほどに

七　國民の義務（コクミンノギム）

【一】兵役（ヘイエキ）

兵役（ヘイエキ）　兵に出る可きつとめ　徵兵（チョウヘイ）　兵をめす　布（シ）き　あまねくふれる　防衛（バウエイ）　ふせぎまもる　任（エン）

ず　其事にあたる

●〔三五〕徴集（チヨウシウ）　めしあつむ　壯丁（サウテイ）　二十歳以上のさかんなる男子　養成（ヤウセイ）　作りそだてる　特設（トクセツ）　持別にまうけたる　機關（キクワン）　だうぐ　期間（キカン）　あひだ　武門（ブモン）　武士の家柄　階級（カイキフ）　くらゐ、等級　勅諭（チヨクユ）　天子のおさとしの言

●〔三六〕朕（チン）　天子の自稱　大元帥（ダイゲンスヰ）　兵權をすぶる君主　股肱（ココウ）　もゝやひぢ、たよりとするもの　頭首（トウシユ）　かしら　上天（ジヤウテン）　天のこと　應じ（オウ）　こたへ　祖宗（ソソウ）　皇祖皇宗、　稜威（リヨウヰ）　みいづ、威光　我武維揚り（ワガブコレアガ）　我國が強くなりて　耀す（カヾヤカ）　倶に（トモ）　宣はせ（ノタマ）　日夜（ニチヤ）　平常　服膺（フクヨウ）　心にとめてまもる　訓へ（ヲシ）

●〔三七〕旨（ムネ）　忠節（チユウセツ）　忠義のみさを　本分（ホンブン）　大切なるつとめ　尚ぶ（タット）　貴く思ふ　信義（シンギ）　信をまもると義を行ふと　第一　忽に（ユルカセ）　おろそかに　誠心（セイシン）　まごころ　嘉言（カゲン）　よきことば　装飾（サウシヨク）　かざり

●〔三八〕公道（コウダウ）　おほやけの大道　人倫の常經（ジンリン・ジヤウケイ）　人のふみ行ふべきみち　兵制（ヘイセイ）　兵のおきて　完備（クワンビ）　まつたくそなはる　精鋭（セイエイ）　すぐれてするどし　忠良（チユウリヤウ）　忠義心あつきこと　啻に（タヾ）　明教（メイケウ）　よきをしへ

【二】納税（ナフゼイ）

●〔三九〕出づるを量りて（イ・ハカ）　拂ひ出すことを計りて　入るを制し（イ・セイ）　税をとることをほどよくさだめる　財源（ザイゲン）　金の出るもと　國用（コクヨウ）　國の入費　統治（トウチ）　すべておさめる　自治體（ジヂタイ）　公共事務を自身にて處理する團體市町村など　分擔（ブンタン）　わけてひきうける　種目（シユモク）　種類の項目　國庫（コクコ）　國家收入支出をつかさどる大もと

●〔四〇〕消費者（セウヒシヤ）　つかふ人　地方官廳（チハウクワンチヤウ）　府縣廳郡役所等の如き一行政區劃内の行政事務を行ふ役所　賦課（フクワ）　わりつける　休戚（キウセキ）　休は喜、戚は悲、よろこびとかなしみ　徴收（チヨウシウ）　とりたつ　漫に（ミダリ）　苛税（カゼイ）　おも過ぎる税　負擔（フタン）　ひきうける　廢頽（ハイタイ）　すたれやぶれる

●〔四一〕協賛（ケフサン）　帝國議會の議決　大隈重信（オホクマシゲノブ）　伯爵

八　征衣上途（セイイジヤウト）

征衣（セイイ）いくさに出る軍服　上途（ジヤウト）途に上る、出かける　動員令（ドウヰンレイ）在鄕軍人を召集して戰時編制を行ふ命令　生涯（シヤウガイ）一代、一生　整列（セイレツ）たゞしくならぶを　終へ（ヲ）　幽玄（ユウゲン）奥深くてゆかしい　莊重（サウヂウ）おもおもしき　吹（スヰ）奏（ソウ）なきならす　鬱勃（ウツボツ）おさへ難き壯んなるさま　●〔四二〕漠々（バクバク）ひろびろ　感慨（カンガイ）物事に深く感じて起る心　隊伍（タイゴ）くみ、れつ　一睨（ゲイ）ひさにらみ　耳朶（ジダ）みゝのは　劈く（ツンザ）つきさほす

故國（コク）本國　訓示（クンジ）をしえさとし　朗讀（ラウドク）朗ほがらか、聲高くよむ　益荒雄（マスラヲ）の伴（トモ）たゝしき男のつれ　戈（ホコ）　嚮ふ（ムカ）　●〔四三〕軍靴（グンクワ）　暇乞（イトマゴヒ）　敵壘（テキルヰ）てきのとりで　聾す（ロウ）つんぼにする　喊聲（カンセイ）さきの聲　反響（ハンキヤウ）ひゞきかへし、山彥　●〔四四〕巨彈（キヨダン）大なるたま　掠め（カス）すつて通る　旦（アシタ）　膚（ハダヘ）　露營（ロエイ）野宿　熱血（ネツケツ）まことの元氣　絞つた（シボ）　可憐（カレン）かあいらしい　無心（ムシン）無邪氣　感奮（カンプン）感じてふるひたす　蹲つた（ウヅクマ）　數珠（ズズ）　爪ぐり（ツマ）指にもつ

痛切（ツウセツ）いたく心を動かすこと　肝（キモ）　刳つた（エグ）　●〔四五〕歡呼（クワンコ）よろこびよぶ　樹て（タ）すぐくたてる　舳艫（ヂクロ）相銜み（アヒフク）舳は船首、艫は船尾。船の相續いて航進すること　噴き（ハ）　波濤（ハタウ）小波大波　蹴破つて（ケヤブ）　櫻井忠溫（サクラヰチウヲン）陸軍大尉

九　山田長政（ヤマダナガマサ）

●〔四六〕布帆（フハン）ぬのほ　旌旗（セイキ）はたやのぼり　殺氣（サツキ）ものすごきけしき　酣（タケナハ）さかん　鄕社（ガウシヤ）鎭守の社　扁額（ヘンガク）がく　摸寫（モシヤ）にせてうつす　暹羅（シヤム）　藁科鄕（ワラシナガウ）　豪放（ガウハウ）膽力ありて大まやかなること　周遊（シウイウ）へめぐる　知己（チキ）己を知る、己れの心をよく知る人　薦め（ス）おしすゝめる　●〔四七〕諾ふ（ウケガ）承知する　竟に（ツヒ）　仕を求む（シ・モト）奉公をしようとする　功名（コウメウ）を博す（ハク）てがらを立てて名をあぐ　雄志（ユウシ）大志　密に（ヒソカ）こつそり　內憂（ナイイウ）國內のみだるゝうれひ　外患（グワイクワン）

外國より攻めくるうれひ

隣邦(リンパウ) となり國　禦(フセ)ぐ　●〔四八〕豫言(ヨゲン) 未來の事をあらかじめ言ふ

詢(ト)ふ とひはかる　軍略(グンリヤク) いくさのはかりごと　推重(スヰチヨウ) 重んずること　上將軍(ジヤウシヤウグン) 大將のこと

流寓(リウグウ) ながれさすらふ　士兵(ドヘイ) 土人の兵　援兵(エンペイ) たすけの兵　威(オド)し　副將(フクシヤウ) 大將の次

擒(トリコ)　●〔四九〕大擧(タイキヨ) 大軍をこぞって來ること　伏兵(フクヘイ) 伏勢　おびきよせ 隠って招く

北(ニ)ぐ 敵に背をむけてにげる　長驅(チヤウク) どんどん追ひ進む　●〔五〇〕妻(メアヘ)せ　委任(ヰニン) まかせゆだぬ

四鄰(シリン) 四方の隣國　怖(オ)ぢ おそれ　殂(ソ)し 崩じ　奸臣(カンシン) 惡い臣　簒(ウバ)ふ しひてとる

祖國(ソコク) 本國故國　●〔五一〕方物(ハウブツ) 土地の產物　恭順(キヨウジユン) うやまひしたがふ　商賈(シヤウコ) 商人

別郭(ベツクワク) べつのくるわ　坪內雄藏(ツボウチユウザウ) 文學博士、號は逍遙。

一〇　公子(コウシ)の躾方(シツケカタ)を申し送(オク)る

餘寒(ヨカン) のこりのさむさ　障(サハ)り　一段(ダン)の事(コト) 一段よろこばしきこと　●〔五二〕黎明(レイメイ) よあけ前

薄著(ウスギ) 以(モツ)ての外(ホカ) おもひの外　成長(セイチヤウ) 成人する　公家(コウケ) 公卿(クゲ)　町人(チヤウニン) 商人

出家(シユツケ) 僧侶　鍛(キタ)ふ　出精(シユツセイ) せいだす　●〔五三〕柔弱(ジウジヤク) よわい　文武(ブンブ) 學問武藝

外聞(グワイブン) よそへのきこえ　稽古(ケイコ)　竹刀打(シナヘウチ) しなへにてうちあふこと　●〔五四〕如才(ジヨサイ) わけめ、ておち

序(ツイデ)　超(コ)す 上にこす　浴(ア)び　さるかはり そのかはり　●〔五五〕德川(トクガハ)

齊昭(ナリアキ) 水戸の藩主、有名なる勤王家、烈公

一一　車窓偶感(シヤソウグウカン)

偶感(グウカン) ふと考へ浮びたること　漫遊(マンイウ) ぶらぶらあるくこと　遊覽(イウラン) めぐりてみる　瀑布(バクフ) たき　轆轆(ロクロク) 車の音

●〔五六〕下車(ゲシヤ)　僻村(ヘキソン) 田舍の村　旅情(リヨジヤウ) 旅のこころ　紳士(シンシ) 身分學職ある人

◉〔五七〕豪商（ガウシヤウ）大商人

調査（テッザ）しらべる　割（サ）き　核（カク）れ　唾壺（ダコ）つぼ

鄕（ナガ）つ　◉〔五八〕徐（ナモムロ）に　對抗（タイカウ）むきあつてはりあふ　多大（タダイ）おほく　救助（キウジョ）たすけ

一桃核（トウカ）一つの桃のさね　所爲（ショヰ）すること　壯（サウ）ん　さかん

快感（クワイカン）こころよきかんじ　再會（サイクヰ）またあふこと　期（ヤ）す　慚愧（ザンキ）はぢ入る心　●〔五九〕蓁蓁（シンシン）葉のしげれること　公德（コウトク）公け

その場で　大橋又太郎（オホハシマタタラウ）號は乙羽

の徳　そぞろに　一二　ベルナルド、パリツシー

〔◉六〇〕測量（ソクリヤウ）かる　生計（セイケイ）くらし　陶器（タウキ）陶土にて作れるもの　粗惡（ソアク）そまつに

してわろし　釉藥（イウヤク）うはぐすり　磁器（ジキ）石粉にて作れるもの

色（イロ）いろどり　努（ツト）め　力をつくす　覓（モト）め　中（アタ）る　れらい所にあたる　豊（ユタカ）

◉〔六一〕祕（ヒ）奥の手　彩（サイ）

貧乏でこまる　◉〔六二〕資料（シリヤウ）もとでの材料、だね　緒（ショ）いとぐち　瓦工（クワコウ）かはらやき　錢財（ゼンザイ）金や財産

屏（ヘイ）　毀（コボ）つ　◉〔六三〕焚（タ）く　端然（タンゼン）正しく坐する貌　疲（ツカ）る

◉〔六五〕許多（キヨタ）おほく　才覺（サイカク）金や物のやりくり　苦境（クキヤウ）くるしい場合

不撓（フタウ）たはまない　幾（ワヅカ）　◉〔六六〕詬罵（コウバ）惡口をいふこと　近鄰（キンリン）近所　侮蔑（ブベツ）

あなどりのゝしる　蓬髮（ホウハツ）よもぎの如くみだれしかみ　徒跣（トセン）はだし　悄然（セウゼン）しほしほと　竈（カマド）

精神一到何事不成（セイシンイツタウカナニゴトカナラザラン）宋の朱文公の句「陽氣發する處金石も亦透る精神一到何事か成らざらむ」

無比（ムヒ）たぐひない　◉〔六七〕巧妙（コウメウ）たくみなること　比類（ヒルヰ）たぐひ　精良（セイリヤウ）すぐれてよい

中村正直（ナカムラセイチョク）文學博士號は敬宇　徑（ケイ）　たしわ

一三　水と火と

功用（コウヨウ）　役に立つこと

◉〔六八〕看過（カンカ）　みすごす

莫大（バクダイ）　極めて大なること

剝落（ハクラク）　はげおつ

溪谷（ケイコク）　水の流れる音

變換（ヘンクワン）　かりにも常なること

何物が常住のものがあらう

あすか川（カハ）　飛鳥川

◉〔七〇〕秋霖（シウリン）　秋の長雨

暴雨（バウ）

漲（チヤウ）　みなぎる

崩（クヅ）し　田圃（デンポ）　たは

目擊（モクゲキ）　目でみる

砂洲（サシウ）　砂のす

堆積（タイセキ）

うづたかくつむ

崩壞（ホウクワイ）　くづれる

積聚（セキシウ）　あつまりつむ

巍巍（ギギ）　高き貌

◉〔七一〕洋洋（ヤウヤウ）　水のひろき貌

時時刻刻（ジコクコク）　一時も休まずに

顯著（ケンチヨ）　いちじるし

熔岩（ヨウガン）　岩石の地熱に溶けて火口より噴出せられて流れるもの、ラバ

溫煖（ウンダン）　あたたか

衝（つ）き

摩擦（マサツ）　すれる

做（なら）う

普及（フキフ）　あまねく及ぶ

◉〔七二〕闇（ヤミ）　まれる色

◉〔七三〕硬（カタ）き

尖（サキ）　鑽（キリ）　揉（モ）みもむ

鑽火（サンクワ）

◉〔七四〕捲（マ）き

轆轤（ロクロ）

天眼鏡（テンガンキヤウ）　人相見の用ゐる凸レンズ

たやすく便利（うるさい）

一四　河内艦（カハチカン）の進水式（シンスヰシキ）

◉〔七五〕進水式（シンスヰシキ）　ふなおろし

局（キヨク）　くくり、なはり

記念（キネン）　紀は并也

有數（イウスウ）　多くない

燧石（スヰセキ）　火うち石

導火機（ダウクワキ）　火を導く道具

輕便（ケイベン）　輕便

煩雜（ハンザツ）　煩雜

荒（すさ）ぶれ

滿艦飾（マンカンショク）　軍艦全體を美しくかざること

聚合（シウガフ）　れ

新興國（シンコウコク）　新に盛になれる國

威風（ヰフウ）　威力あるさま

海上を壓（アツ）す　海上に威をふるふ

◉〔七六〕因（ヨ）る　原因する

載炭（サイタン）

量（リヤウ）　炭の分量

◉〔七七〕量（リヤウ）　大きさ

型（かた）　のせる石

趨勢（スウセイ）　なりゆき

快駿（クワイシユン）　速きこと

質（シツ）　性質

無上（ムジヤウ）　此上なき

精銳（セイエイ）　すぐれてよい

敵（テキ）　やくしよ

偏に（ひとへに）　いづ

◉〔七八〕拘る（かゝはる）

むき　艦首（かんしゅ）　軍艦の　へさき　舷（げん）　ふなばた

まれる　陸續（りくぞく）　つゞきつゞいて　瞬（またゝ）く

艦長の最も先に任ぜられたる軍艦　皇禮砲（くわうれいはう）　天皇皇族等に敬意を表する爲の發砲

便殿（びんでん）　おやすみ御殿　燦爛（さんらん）　きら〳〵

竿（かん）　を　◉〔八〇〕整頓（せいとん）　さゝのへる

に　號笛（がうてき）　あひづのふえ　支柱（しちう）　はしら　繋索（けいさく）　つな

やかに　さはやかに　徐徐（じよ〳〵）　しづしづと　一打（だ）　さゝのきれ　軋（きし）り　すれて音たつ　驀進（ばくしん）　まつすぐにすゝむ

◉〔八一〕五彩（ごさい）　五色　布片（ふへん）　著（ちやく）　進みはかどるさま　汲汲（きふ〳〵）　一心なるさま

◉〔七九〕既定（きてい）　かれて定　◉〔八二〕狂喜（きやうき）　くるひよろこぶ

◉〔七七〕竣功（しゅんこう）　功をはる　出來上る　彩る（いろど）　傾斜（けいしゃ）　かたむき

玉座（ぎょくざ）　天子の御座　註す（ちう）　書きあぐ　玉輦（ぎょくしゃ）　鳳輦　先任艦（せんにんかん）　先に任ぜられた艦

般般（いんいん）　さかんなるさま　撼し（うごか）　搖ぎ（ゆる）　嚴（おごそ）　物事は中程がよい　（論語）　孔子の言行を記せる書　四書の一

◉〔八三〕編入（へんにふ）　くみ入れる　◉〔八四〕御尋（おたづね）　親し（した）く

◉〔八六〕阿房（あほう）　馬鹿　譯（わけ）　氣色（けしき）　顏色、やうす　苦（く）　（孟子）　孟子の著書、四書の一　遠（とほ）キ

◉〔八七〕西洋笑府（せいやうせうふ）　文學士和田萬吉の著

◉〔一五〕新兵（しんぺい）

近衛（このえ）　天子に近くまもる兵

自分で　檢閲（けんえつ）　みしらべる

笑（せう）ひ　にがわらひ　仔細（しさい）ない　かまはぬ

◉〔一六〕過不及（くわふきふ）

過ギタルハ猶及バザルガゴトシ　程がよい

舜（しゅん）モ人（ひと）ナリ我（われ）モ人ナリ　舜は古の支那の聖人、自重せよの意

慮（おもんばかり）ナキトキハ必（かなら）ズ近（ちか）キ憂（うれへ）アリ　先々を考へよ

ニ如カズ　仕方よりも心が大切　（鹽鐵論（えんてつろん））　巧（たくみ）ナル詐（いつわり）ヘ拙（つたな）キ誠

己（おのれ）ノ欲（ほつ）セザル所（ところ）ヘ人（ひと）ニ施（ほどこ）スコト

勿レ（ナカレ）　自分のすかぬことは他人にしてはならぬ

病ハ口ヨリ入リ禍ハ口ヨリ出ヅ（ヤマヒクチイリワザハヒクチイデ）　食物を慎む如く言語をつゝしめ

（口銘（クチノメイ））　好事門ヲ出デズ悪事千里ニ傳ル（カウジモンイヅアクジリツタヘ）　好き事は人に知れぬでも悪い事はすぐ遠くまで知れる

（事文類聚（ジブンルヰジュ））

●〔八八〕玉琢カザレバ器ヲナサズ人學バザレバ道ヲ知ラズ（タマミガキシ　ヒトマナシ）　學問をするが第一

（禮記（ライキ）　五經の一）

一七　東京（トウキャウ）

武藏野（ムサシノ）の末（スエ）なりけん　武藏野のつゞきであつただらう

遠き昔（トホカシ）　凡そ三百年前までは城はなかりしなり

府幕（フバク）　府（フ）　星霜（セイサウ）　年（ネン）　明治元年十月三日のこと

賀（ガ）め　賀（ガ）　民草（タミクサ）　人民（ジンミン）

帝京（テイキャウ）　帝（テイ）　京（キャウ）

●〔八九〕夙（ツト）に　夙（ツト）　早（はや）く

市井（シセイ）　市（シ）　井（セイ）

丘陵（キウリョウ）　丘（キウ）　陵（リョウ）　高き土地

平坦（へイタン）　平（へイ）　坦（タン）　らか

大（タイ）　半（ハン）　以上　半分以上

●〔九〇〕なべて　おしなべて、一體に

物寂（モノサビ）し　以來（イライ）　この

面目（メンモク）

を革（アラタ）めぬ　やうすがかはつた

算（サン）する　數へる

四通八達（シツウハツタツ）　四方八方にさとほる

辻曲（ウキョク）

まがる

辨（ベン）ず　用を辨ず、事を足す

碁盤割（ゴバンワリ）　碁盤割（ゴバンワリ）　正しくわるること

阿彌陀割（アミダワリ）　阿彌陀如來の後光の如くあるものを中心として四方にわること

●〔九一〕寄席（ヨセ）　講談落語義太夫などを演ずる席

熱鬧（ネッタウ）　にぎやか

ふ　就中（ナカンヅク）　その中で

東叡山（トウエイザン）　靈廟（レイベウ）　みたまや

●〔九二〕

不忍池（シノバズノイケ）

境域（キャウヰキ）　さかひ

擁（ヨウ）し　かこへ

絶佳（ゼツカ）　此上なくよい

こもごも（かはる）

色彩（シキサイ）　いろどり

映射（エイシャ）　うつり　あふ

奥深（おくふか）きもむき

幽趣（イウシュ）

闘（たゝか）うす

殿宇（デンウ）　御堂

帆影（ほかげ）

胸襟（キョウキン）　むねの中

からつとする

壯麗（サウレイ）　大きく美し

丹碧（タンペキ）　丹（あか）　碧（あを）

耀（カガヤ）き

雷神門（カミナリモン）

址（アト）

參詣（サンケイ）

●〔九三〕店舗（テンポ）　みせ

贋（カンガン）

笄（カウガイ）

木偶（モクグウ）で

玩具（グワング）　おもちや

煎餅（センベイ）　陳（ウラ）ね

艶美（エンビ）　つやゝかにうつくしき

眼（メ）を奪（うば）ふ　めをひく

土産（トサン）　雑沓（ザフタフ）　人のこみあふこと　百戯（ヒャクギ）　いろ〳〵なくさみもの　興行物（コウギャウブツ）　観客を集めてする演戯、芝居　其他相撲等

埋地（ウメチ）　堵（ト）　かき。人の多きにたとふ

◉〔九四〕培栽（バイサイ）　うへつくる　行楽（カウラク）　散歩のたのしみ

勝境（ショウキャウ）　けしき　よき地　歳（トシ）を逐（お）うて　年々。　外濠（グワイガウ）　そとぼり　近郊（キンカウ）　近き町外れ　修竹（シウチク）　修（なが）き竹　長し　擬（ギ）し　なぞらへ　平出鏗次郎（ヒラデカウジラウ）　風俗史に通ぜし人　飛鳥山（アスカヤマ）

一八　墻檢校保己一（ハナハケンカウホキイチ）

検校（ケンゲウ）　盲人の官位にして最も高きもの　◉〔九五〕群書類従（グンショルヰジウ）　書名　校刻（カウコク）　かんがへ正して版に上す

瞽盲（コマウ）　めくら　便（タヨ）る　九段坂（ダンザカ）　靖國神社前にあり　さめざめと　涙を流すこと　仔（シ）

細（サイ）わけ　遙遙（ハル〳〵）　本銀町（ホンシロガネチャウ）　日本橋區にあり　行方（ユクヘ）　頼む木蔭に雨漏り（タノムコカゲニアメモリ）

よるべなきたとへ　せん方（カタ）　致しかた　◉〔九六〕談合（ダンガフ）　相談　侍（サムラヒ）　復命（フクメイ）　受けた命令

事の返になる　不便（フビン）　かわいそう　扶助（フジョ）　たすける　◉〔九七〕閲（ケミ）し　見る　貨事（サンジ）　小さいこと

番町（バンチャウ）　麹町區にあり　和學所（ワガクショ）　國學を研究する所　不器用（ブキヨウ）

あとにのこす　刻書（コクショ）　出版　諳誦（アンショウ）　そらんず　上達手（シャウタツシュ）

天子の御書になりしもの　太上天皇（タイジャウテンワウ）　天子の位をさり給ひし後にいふ尊號　屋代弘賢（ヤシロヒロカタ）　訪れ（オトヅ）　祕藏（ヒザウ）　大事にひめておく　宸翰（シンカン）

禁之闕（キンノケツ）　宮城の門　◉〔九九〕宸居（シンキョ）　天子の御座所　御署（ゴショ）　御署名　諱（イミナ）　忌み名　帝（テイ）

一九　文字（モンジ）

思想（シサウ）　おもふ事、かんがへ　符牒（フテフ）　しるし　通信（ツウシン）　たよりをすること　◉〔一〇〇〕要具（エウグ）　大切

道具（ドウグ）　野蠻（ヤバン）　承認（ショウニン）　うけがひみとめる　◉〔一〇一〕象字（シャウジ）　意字（イジ）　音字（オンジ）

象（ショウ）　◉〔一〇二〕符號（フゴウ）　しるし

めあてとするもの

優（マサ）る　比較的（ヒカクテキ）　他にくらべて

二〇　藤樹先生（トウジュセンセイ）　その一

◉〔一〇四〕俗稱（ゾクショウ）　普通にいふ名

江州（ゴウシウ）　近江の國

大溝在（オホミゾザイ）　大溝の近在

王陽明（ワウヤウメイ）

流（リウ）を汲み　學問藝術などの流派をうけつぐこと

一世（イッセイ）　その時

秀（ヒイ）で　風（フウ）を望（ノゾ）む　其德をしたふ

士人（シジン）　さむらひ

途次（トジ）　みちのついで　藁屋（ワラヤ）

歿後（ボツゴ）　死後

尾州（ビシウ）　尾張の國

◉〔一〇五〕戶外（コグワイ）　恭（ウヤ）しく

更（アラタ）め　さうではありません

◉〔一〇六〕慈（イツク）しむ　かはゆがる

辨（ワキマ）へ　さうではありません

敎へ化すること、敎化訓育

化育（クワイク）

擧動（キョドウ）　ふるまひ

敬慕（ケイボ）　うやまひしたふ

◉〔一〇七〕飛脚（ヒキャク）　いそぎの使

二一　藤樹先生（トウジュセンセイ）　その二

◉〔一〇八〕行李（カウリ）　嘗座（トウザ）　其場合の

金子（キンス）　かれ

鞍（クラ）　對面（タイメン）　かほをあはす

委（ユダ）しく

◉〔一〇九〕二歩（ニブ）　一兩の半分

謝禮（シャレイ）　お禮の品

◉〔一一〇〕懷（フトコロ）

氏素性（ウヂスジャウ）

昔支那にて驚眼鏡を作れり中の孔は方にして周りは圓きものなり、錢のこと

烏目（ウモク）

家筋（イヘスジ）

在所（ザイショ）　ふるさと

講釋（カウシャク）

儒（ジュ）學者（ガクシャ）

隨從（ズイジュウ）　つきしたがひてをうくること

無理非道（ムリヒダウ）　理にそむき道ならぬこと

◉〔一一一〕修（シュ）　立ち止まり

よしやいなみいやさかりに

契約（ケイヤク）　やくそく

◉〔一一二〕たたずみ

橘春暉（タチバナシュンキ）　號は南谿、昔の名高き文人

二二　同情（ドウジャウ）

◉〔一一三〕同情（ドウジャウ）　おもひやりの心

ダニエル、ウエブスター　Daniel Webster

鼷鼠（ムクラ）　憫（アハレ）に　辨（ワキマヘ）　復（アタ）二度

の　すべての生物　罪惡（ザイアク）みつ　生（イ）きとし生（イ）けるも

互に論じ合ふこと　原告（グンコク）告訴する方　被告（ヒコク）訴へられる方

●〔一一四〕押問答（オシモンダフ）

棲息（セイソク）す　む　覆（クツガヘ）し　後患（コウクワン）　後のうれへ

●〔一一五〕寃仁（クワンジン）

狡猾（カウクワツ）惡ろがしこし　心のひろくしてめぐみぶかきこと

●〔一一六〕寃仁（クワンジン）

わるひどい　菜根（サイコン）野菜の根　然（シカ）さやうに　賢明（ケンメイ）かしこい

情狀（ジヤウジヤウ）ありさま　慈悲（ジヒ）なさけ　潤（ウルホ）ひ

二三　諭言五則（ユゴンゴソク）

●〔一一七〕吝（ヤレ）み　出しぶる　生（セイ）いのち　判決（ハンケツ）さばき

慨然（ガイゼン）大に感じたるさま　現境（ゲンキヤウ）今の有様　有情（ウジヤウ）心のある　暴戾（ボウレイ）

償（ツグナヒ）　澱（ヨド）まず　滔滔（タウ〳〵）すら〳〵

●〔一一八〕騎（キ）し　馬にのり　遭（アフ）ふ　でくはす

小猴（セウコウ）猴は　さる　髭剃（ヒゲソ）る　偸（ヌス）み　擬（ギ）して　似せて

●〔一一九〕菌（キン）

膿脂（エンジ）にべ　擢（ツ）み　摘み　嚙（カ）み　誡（イマシ）めよ　氣をつけよ

●〔一二〇〕滋味（ジミ）み　うまみ　昂（タカ）く　昂然（カウゼン）頭を高くして

那珂通高（ナカミチタカ）　充實（ジウジツ）みつ　翹慝（ヒンシュク）かほをし　かめる

二四　果物問答（クワブツモンダフ）

島崎春樹（シマザキハルキ）　號は藤村、新體詩に小説に名高き人

●〔一二一〕辛（カラ）き　唐（トウ）がらし　辛

つたなき　敏捷にない　酸（ス）く　辛きことばかりを　ひとつを

二五　古今傳授の松

◉〔一二三〕さらなり　云ふまでもない
公卿　◉〔一二四〕智仁　本意分　内使　内々の使　沙汰　仰せ、命令
叡慮　天子の御考　拒み　◉〔一二五〕玄旨　幽齋の入道ぜし後の名　◉〔一二六〕
廢城　城をやめる　遺蹟　井のこれるあと　埋沒　うもれうせる　碑　いしぶみ　追慕　あこがれしたふ
ゆゑよしれ　いはれ　細川護成　堪能手上　奥義おくのて　祕訣極意

二六　三秀院和尙に答ふ

歲首　さしのはじめ　法札　僧侶の手紙　清勝　せいしょうすぐれてつしや　御詠　御歌
拜誦　よむ　◉〔一二七〕萬福　おめでたい　同前　つれあって　束髮　髮をゆふ　不

才　さいかない　所作　しょさわざ　埒　らちおなじ
懷し　なつかしい　情意　じょういこころなか　◉〔一二八〕消遣　せうけんうさばらし　雨森誠清　あめのもりせいせい號は芳洲

二七　山紫水明

◉〔一二九〕東寺　とうじ九條にあり　山紫に　やまむらさき水明　みづあきらかきこさ景色よ
柴　しば大原女　おはらめ大原の里より薪を頭にのせて出づる女　現　うつつ　躑躅　つつじ
一幅　いっぷく　姥　うばる老いた女　蕨餅　わらびもち　如意嶽　にょいだけ　堤　つつみ　◉〔一〇三〕
祇園　ぎをん　◉〔一三一〕篝火　かがりび　淺黃　あさぎ正しくは淺葱　墨がき　墨繪にかく　映り　うつり
御室　おむろ　樓門　ろうもんやぐら門　撲つ　はたくうつ　田樂　でんがく　◉〔一三二〕
絕え絕え　たえだえつゞいたりきれたり　颺り　あがり風に吹きあげらる　誦經　ずきやう

經をよむ　とこしなへに 永く　踏み（フ）　闌（タケナハ） 正しくは酣、盛なり　袂（タモト）　大堰（オホヰ）川（ガハ）

◉〔一三三〕西陣（ニシヂン） 西陣織　友禪（イウゼン）　夕陽（セキヤウ） 夕日　老媼（ラウアウ） 婆　紙（カミ）礫（ツブテ） 紙の小玉　暮色（ボショク） くれのけしき　淡く（アハ）　寂莫（セキバク） さびし

◉〔一三四〕大和（オホワ）田建樹（ダタテキ） 國文學者

修訂中等國語讀本詳解字引卷二終

修訂中等國語讀本詳解字引　卷三

一　列聖遺芳（レツセイヰハウ）

◉〔一〕【一物見車（モノミグルマ）】　剛健（ガウケン） 心たけくつよし　嚴明（ゲンメイ） 物事に明らかにしてきびしきこさ　東宮（トウグウ） はろのみや皇太子　世故（セコ） 世間の俗な事　練熟（レンジュク） なれろ　政務（セイム） 政治上の務め　得失（トクシツ） よしあし　辨へ（ワキマ）　即位（ソクヰ） 即はびつたりさつく　精を勵し（セイ）（レイ） せいだして　百方（パウ） いろいろさ　治（チ） 國をなさめるを　外戚（グワイセキ） 婚姻によりて生ずる親戚　專横（センワウ） わがままなふるまひ　華奢（クワシヤ） はなやかなるおごり

◉〔二〕風（フウ）を成し（ナ）　◉俗（ゾク）を作せり（ナ）。ならひさなつた　淫猥（インワイ） みだら　いたく 甚しく　躬ら（ミヅカ） 御自身で、　率先（ソツセン） さきに立つて　節儉（セツケン） 節は物をほど〳〵する 儉はつゞまやかにする

前代（ゼンダイ）後朱雀天皇の御代　進贄（シンシ）地方より上る産物

魚（ウヲ）炙（アブ）り　胡椒（コセウ）充（アテ）て

女（ヂョ）みやこの人々　鑾輿（らんよ）みくるま　剝（ハガ）し

◉〔三〕〔二紅葉（もみぢ）の山（やま）〕

にやであるやら　野分（のわき）の風　晩秋初冬頃の風

朝の掃除　焚（タ）む　奉行の　仰付けられた　藏人（クラウド）役人

◉〔四〕

儘（まま）　奏聞（そうもん）申上げる　燒（タク）

〔三いかづち〕　英生（えいせい）すぐれし天子

ひがひなく　つまらぬことゝ　覺（おぼ）し考へ

停（トヾ）め　檜（ヒノキ）　柄（エ）　貼（ヘ）り　青（アヲ）

石清水（いはしみづ）　鹵簿（ろぼ）行幸の行列　都人士（トジン）

痕（アト）　奢侈（しゃし）おごり

檻（ハア）　楓（カヘデ）　賞翫（しょうぐわん）ほめもて

殿守（とのもり）御殿をまもる　仕丁（しでやう）雜役の者　朝清（あさきよ）め

罪科（ざいくわ）つみとが　懼（おそ）れ畏（かしこ）み

會計の役人

叡感（えいかん）御感心

怖（おそ）ぢれ　夕立（ゆふだち）　心地（こゝち）

復（かへ）る　偏（かたよ）り

◉〔五〕

豁然（くわつぜん）

がらつさひらくるさま　凄（すさま）じ　倚子（いす）の方正し

若（じゃく）色のかはらぬこと　毫（がう）も毫は毛、すこしも

〔二〕

高山彦九郎（たかやまひこくらう）

一宿（しゅく）一晩どまり　總髪（そうはつ）月代（サカヤキ）を剃らず全體の毛をのばすこと　歷代（れきだい）代々

◉〔六〕

山陵（さんりょう）みさゝぎ　たまたま偶（ぐう）　王室（わうしつ）皇室　流涕（りうてい）涕（なみだ）な

行（かう）人と異（こと）る行ひ　閑谷（しづだに）學問（がくせい）學制のおきて　奇事（きじ）妙な事　巽（いな）井

づれ相識（さうしき）しりあひ　夕（ゆふ）つ方（かた）夕方　規約（きやく）きまり

◉〔七〕北郊（ほくかう）北の町は

樂（らく）赦（ゆる）す罪をゆるす　節季（せつき）季はする處、年の暮　內侍所（ないしどころ）御神（おかぐ）

塞（ふさが）り　酒錢（しゅせん）さかて　巖山（しんざん）みやま　棲（すみ）　イミ（たちこもり）

慮外者（りょぐわいもの）ふとき者

◉〔九〕よもや　舌（した）を

捲き　驚き歎すること　一揆　仲間をくみて亂をおこすこと　萬四郎　賴山陽の叔父　路程　みち　のり　亂世　物さわがしき世　歎稱　感心してほめる　旗本（將軍直參）　心以上のもの、八萬騎ありたり　虛日　むなしき日、來らぬ日

◉〔一〇〕賴

◉〔一一〕有司　司ある人、役人

遊行　あそびあるく　武者修行　武術の稽古の爲に諸國をまはること　あざやか　鮮か　講　當途　老中となりて幕府の政にあづかること　說義　ことわり　便り　賴み　謎ひ　なき事を作りて惡口すること

◉〔一二〕名告り

◉〔一三〕管晉帥　號は茶山、有名なる詩人

三　櫻

國花　國を代表する花　櫻桃　チエリー　Cherry　濃艷　こつてりと美しい　粧ひ　ないふにいはれぬ

◉〔一四〕まがふ　まぎれる　艷治　なまめかしき　態

清楚　つばりと美し　野趣　自然らしき飾りなきおもむき　風趣　おもむき　言語に絶す　言語にいふにいはれぬ天氣

◉〔一五〕大宮人　宮中に仕ふる人のこと　楚楚　かざりなく美

◉〔一六〕朧月夜　ふさはしい　よくつりあふ　純白　まつしろ　瓣　びら　猛烈　はげしい　微塵　すこしき　花ぐはし　くはしは美し、美しき花の…　日和　ひより　詠んだ　詩歌に作る　特色　他に無き點　孕まれ　廿日草　はつかさう　何んでもうれる都の繁昌をよめるもの　駘蕩　のどかなり　峻嚴　しゅんげん　掩はれ　きは立つ　すぐれる

◉〔一七〕愛でる　芳賀矢一　文學博士

四　星と花

土井林吉　號は晩翠、新體詩人、天地有情、曉鐘等の著あり　おなし自然のおん母　自然といふ同じ母親

御手（ミテ）

◉〔一八〕ゑみ（笑ひ）

の 曙

しぼむ（萎む）

よひ 宵

かはす（互にかよはす）

あけぼ

五 讀書の樂（ドクショ タノシミ）

◉〔一九〕四時（シ）の（春夏秋冬）四季（ワカ）

目の前に 狹仁傑（キョウジンケツ）

朝から晩まで 書案（ショアン）つくゑ

號は益軒、時代筑前の學者 不レ厭（アカ）レ山（トーテイトハズ）

六 わが幼時（エウジ）

◉〔二二〕草紙（サウシ）（物語など書ける本）

火燵（コタツ）

腹這ひ（ハラバ）

透寫（トウシャ）すきうつし

取り傳（トツタ）

分かず（區別せず）

經傳（ケイデン）（經は聖人の書、傳は賢人の書）

名教（メイケウ）しへ

◉〔二一〕及（シ）ぶ

終日（シウジツ）

◉〔二二〕憾（ウラミ）

長在（トコシヘニアリ）

空流（ムナシクナガレテ）

◉〔二三〕師友（シイウ）（師匠や友達）

往來物（ワウライモノ）（手紙の本）

家人（ケニン）

生（シャウ）

◉〔二四〕畢り（ヲヘ）

義（ギ）

七言絶句（シチゴンゼック）（漢詩の一體、一句は七言にて四句より成るもの）

三首（サンシュ）（詩は一首二首と云ふ）

頑な（カタク）

誦（ショウ）

かの人（ヒト）

上公（氏）

◉〔二五〕學匠（ガクシャウ）（學者）

御いつくしみ（オン）

御側の役をつとむること

協ふ（カナ）

誇らせ（ホコ）

自慢

睡の催し（ネムリモヨホ）

◉〔二六〕侍ふ（ハベ）

おほおた

ふ（もてはやす）

◉〔二三〕師友（シイウ）（師匠や友達）

往來物（ワウライモノ）（手紙の本）

家人（ケニン）

生（シャウ）

◉〔二四〕畢り（ヲヘ）

義（ギ）

七言絶句（シチゴンゼック）（漢詩の一體、一句は七言にて四句より成るもの）

三首（サンシュ）（詩は一首二首と云ふ）

頑な（カタク）

誦（ショウ）（そらでよむと）

かの人（ヒト）

上公（氏）

◉〔二五〕學匠（ガクシャウ）（學者）

御いつくしみ（オン）

御側の役をつとむること

協ふ（カナ）

誇らせ（ホコ）

自慢

睡の催し（ネムリモヨホ）

◉〔二六〕侍ふ（ハベ）

おほおた

國生れし國

太平記評判（タイヘイキヒャウバン）（和田助則の著）

わけ

奇特（キトク）しい

めづら

文字（モンジ）などあり（學問がある）

聽聞（チャウモン）き

く

利根（リコン）（才智）

氣根（キコン）（氣根）

黄金（ワウゴン）（金錢）

かあいがること

御側を離し給はねば（御側の役をつとむること）

參覲を終りて上總國久留里に行きたるとき

上總（カヅサ）の國（クニ）に行（ユ）き

明年（アケノトシ）

課（クワ）（日々のきまり）

日（ヒ）の中（ナカ）の間（ひろ）

竹緣（チクエン）（竹のえん）

十二月（シヘツ）

われに附けられたる者（モノ）（召使の者）

ねむけがさして

入（オホ）やう

かたの如く　立派ではないがかたの通り　庭訓往來　浮寫きれいにかく　冊さつ

●〔二一八〕大方ならず　大そうであつた　贈答やり　太刀打劍術　技わざ

わぬしへ　おまへ　さこそは　さやうでは　刀太刀　脇差　不用だめ、役に立たぬ

ことわり　道理　●〔二一九〕木刀　心にも染めず　氣にもさめず　新井君

美　號は白石、吉宗時代の大學者。

七　おのれを屈せよ

ベンジャミン、フランクリン　Benjamin Franklin　●〔二二〇〕ボストン

府　Boston　老儒　老いたる學者　訪れ　何くれと　いろいろと　屈しかゞめ

鴨居　敷居に對する上部の横木　年少氣鋭　年若くて元氣なる　快談　面白き話　意氣　頗る

揚る　精神の元氣づけること　直線に　まつすぐに　●〔二二一〕心なき　ふんべつなき　身邊　みの

まはり　不測　おもはぬ　發らん　途上　行くさき　心して　氣をつけて　●〔二二二〕

大傷　おほきず　額　ひたひ　印せられん　あとをつける

まさに　丁度　遺子　親の死にしあとにのこりし子　成業　業を成しとげる

戒　をしへいましめ　心の駒　心の動き易きものなるより駒にたとへていふ　心裏　心のなか　訓

恩澤　おかげ　浴し　うるほふ　特み　邂逅　めぐりあふ　●〔二二三〕無謀　無考へなること

舞　猛進　勢よくずんずむ　客氣　若い元氣　振

八　良雄の僕

元祿　東山天皇の御宇　討死　隅田川に架せし橋の一　同勢　なかま　葬禮

たいら　足蹟 あしどり

噂 うはさ　喧し かしま　従僕 つきしたがふ下男　指揮 さしづ

介 すけ　食み いたく　國家老 くにがらう の家老　小兵 こひやう 男　立居 たちゐ 起居　山 やま

鹿素行 かそかう　經學 けいがく 聖人の學　辭 ことば　心腹 しんぷく まごころ

庸器 ようきなみのうつは。凡人　封知行 ほうちぎやう（チギヤウ）　狼狽 らうばい うろたへる　重用 じうよう おもくさり用ゐらる

周章て あへて　處理 しよりさばきなさむ　器量 きりやう うでまへ　心服 しんぷく 心から感服する　進退行動

洛東 らくとう 洛は都、京は東の　山科 やましな　朽ち くち　形見 かたみ

撫で なで　騒動 そうどう　途方 とはう 行くさきたない　仕官 しくわん 主をさること

思ふやうにならぬ けがらはしい

◉〔三六〕離散 りさん はなればなれになる

◉〔三七〕心に任せず

◉〔三四〕浪士 らうし 主にはなれし士

◉〔三五〕厚遇 こうぐう てあつきもてなし

高恩 かうおん 大恩　御城主 ごじやうしゅ 淺野匠頭　恨 うらみを呑んで

ざんれん 思ひ乍ら　御最期 ごさいご 御自害

下郎 げらう づまらぬ男　◉〔三八〕腰扱 こしぬけ 侍 ざむらひ 卑怯な侍

俯き うつむき　諫 いさめ　姿 すがた

參らする 與へる　憤 いきどほり

◉〔三九〕賤 しづ

かしづき つきそひ つかへる　ながらへ 生きながらへて　復讐 ふくしう かたき討ち

が伏家 ふせや いやしきもの家、自己の家の謙稱

幾ばくもなき世に 餘命短ければ　朝夕 てうせき 朝に晩に　藤岡作太郎 ふぢをかさくたらう 文學博士、號は東圃

九　孝道 かうだう

一擧一動 いつきよいちどう 一寸の起居振舞　發現 はつげん あらはれたるもの　逆境 ぎやくきやう まいなら ぬ境遇　順境 じゆんきやう 得意の境遇

已む やむ　◉〔四〇〕理想 りさう 心の中に完全圓滿なりと作れるかんがへ　庶幾はくは 出來ること

◉〔四一〕奴 やつこ　聖人 ひじり　槍 やり　御意 ぎよい おぼしめし　箭 はう き

晛ひ　●〔四二〕ありあふ人一同の人　皇さ　かつぎ　●〔四三〕函南村　仁科　にだやかにすなほ　模範手本　表彰善きをあらはしほめる　衰弱おとろへる　營養やしない　四肢手足　●〔四四〕浴場風呂屋　隙　菓子　舖　せみ　飴　葛　購ふ　身を以て　からだのぬくもりで　●〔四五〕　資性うまれつき　温良　喘息いきのきれる病　痼疾持病　衣裳　瓦石かはらのかけや石ころ　至情まごころ　虚僞うそいつはり　熱情あつきなさけ　輕薄者流人情のうすき者共　虚飾うはべのかざり　熱誠熱心なるまごころ　至大此上なく大なる　恨事ざんねんな事　死後の孝養親なき後の孝行

一〇　舊師に贈る

●〔四六〕舊師昔の先生　轉任がへ　御高年御老年　生前の中　二分十分の十分の上　較べ　悲歎かなしみなげく　●〔四七〕無常常なくはかなきこと　今生此の世　厭　ほとほとんど　生者必滅生きたるもは必ずほろぶ　諦め　豫て　療養治療すること　家計くらし　鴻恩鴻は大也　忽焉　たちまちに　在さず　斷腸はらわたを斷つ、悲しみの極にいふ　創設はじめておこす　●〔四八〕　周旋しんぱいとりもち　忝うせし　下さつた　遠隔さほくへだてたる　公務おほやけのつとめ　勤務つとめる　死生の運生き死にのうん　徹夜小き心の中、課遜していふ　了察さつする　昇任役の上ろこと　●〔四九〕佐久間勉海軍大尉、周防灘に沈沒せし潜水艇の艇長　罷り　放念安心

◉〔一〕アレクサンドル大王の逸事

アレクサンドル Alexander

弱冠（ジャクカン）二十歳　驅られ

こちき　なげ　逸事（イツジ）　史にもれしおもしろき事　功名心（コウメウシン）　てがらを立てたい心

荐（シキリ）に　歎息（タンソク）く　なげ　餘地（ヨチ）　あまれるところ　か

マケドニア Macedonia

大志（ダイシ）　大なるこころざし

◉〔五〇〕掌大（シャウダイ）　手のひら位のせまき

波斯（ペルシヤ）　馬のひづめにふみにじられろ

征討（セイトウ）　征伐に行く

鋭鋒（エイホウ）　するどきほこさき

史傳（シデン）　歴史中にあろ傳記

興味（キヨウミ）　おもしろみ

馬蹄（バテイ）に委（イ）し　全豹（ゼンペウ）　豹の全體、全部

光彩（クワウサイ）　はなやかなること

一斑（パン）　一さぶち、一部分

【その一】タルズス Talsus

服從（フクジユウ）さす　脱（ヌ）ぎて

發（オコ）り　蒼白（サウハク）　あをしろ

チドヌス Titonus

◉〔五一〕征服（セイフク）して　征伐

戰（タヽカ）ひ　倦（フ）れ

侍臣（ジシン）　側そばの臣

扶（タス）け　ダリオス、コドマヌス Darius Codomanus

督（トク）し

すべ　快復（クワイフク）　病氣のなほること

◉〔五二〕侍醫（ジイ）　王者につかへづく醫師

心（コヽロ）まめなる　心がけよき

フイツリップス Phillips

手段（シュダン）に訴（ウッタ）へて　方法をきりて

萬一（マンイチ）に決（ケツ）せん　萬に一も助かるか助からぬかの事をきめる

病革（ヤマヒアラタマ）れる　危篤になること

惱（ナヤ）し

最後（サイゴ）　いよいよの

胃（フクロ）す　あへてす

パルメニオ Palmenio

◉〔五三〕

そと　そりて

右手（メテ）　信任（シンニン）　信用して任じたること

盃（サカヅキ）

◉〔五四〕邪正（ジャセイ）　正しからざるか正しきか

立證（リツシヤウ）　證據

將士（シャウシ）　大將兵士

畏敬（ヰケイ）　をそれうやまふ

病牀（ビヤウシヤウ）　やまひのとこ

殊死（シュシ）　命がけで

◉〔五五〕迎日（ゲウジツ）　毎日毎日

【その二】ガウガメラ Gaugamera

薬効（ヤクカウ）　くすりのききめ

薬劑（ヤクザイ）　くすりの

秘書（ヒショ）　秘密の手紙

きはみ　はてなきこと

左手（ユンデ）　だてろ

干（ホ）し　釋（ト）かん

一望きはみなき 目のごとくはてもなき　困苦 くるしみ　渇す のどかわく　少許 許はばかり

冑　◉〔五六〕感激 ひどく感じさせる　水火 どんななんぎ

【その三】瀕し のぞみ　◉〔五七〕瞑目 めをつぶる　上衣　燦爛 ぴかぴか

死屍 なきがら　暗涙 聲を立てぬ涙　咽び

二　日本海の大戰　その一

◉〔五八〕天佑 天のたすけ　擊滅 うちほろぼす　出現 あらはれでる　上命 上よりの命令

迎擊 むかへうつ　計畫 もくろみ　集中 一所にあつむ　北上 北に進む

寄泊 港によろ　豫定 前以て定めた　◉〔五九〕數隻 隻は船を數へる詞　哨艦 見張の軍艦

配備 くばりそなへる　姿勢　果然 はたして　警報 いましめ知らすと　踴躍

をどり上がり　對敵行動 敵に對するふるまひ　開始 はじめる　◉〔六〇〕終始 つゞいて、つねに

接觸 はなれぬこと　敵情 敵の樣子　濛氣 きり　展望 みはらし　陣形 ぢんだて

二列縱陣 二列にたてにならべる陣立　主力 おもなる隊　先頭 一番のさき

後尾 うしろ　◉〔六一〕心算 心づもり　暫時 しばらく　左舷 舷はふなべり

興廢 おこるさすたるさ　各員 たれも　奮勵 ふるひはげむ　努力 力をつくす　◉〔六二〕

壓迫 おさへつける　戰策 はかりごと　舵　單縱陣 一列の縱の陣形　◉〔六三〕

竝航 ならびすゝむ　短縮 みじかくちゞまる　須臾 しばらく　旗艦 司令官の乘組める軍艦

戰列 戰鬪線　炎煙 ほのほやけむり　靆き　蔽ひ　◉〔六四〕煙霧 けむり

緩に　變鍼 鍼ははり、方向をかへると　遁走 にげはしる　扼し おさへて　猛射 ひどくうつ

混亂（コンラン）　みだれる　事蹟（ジセキ）　てがら

徨（クワウ）　さまよふ　縱橫（ジウワウ）に　四方八方に

逼（セマ）れる　鬱陵島（ウツリヨウトウ）　結了（ケツレウ）　をはる

一三　日本海（ニホンカイ）の大戰（タイセン）　その二

朝來（テウライ）　あさから　不利（フリ）　不利益　勘（スクナ）からず　千歲（ザイ）一遇（グウ）　めつたにない　時機（ジキ）

よきをえり　風濤（フウトウ）　風や大波　◉〔六六〕蝟集（ヰシフ）　蝟はりねずみ。あつまること　肉薄（ニクハク）　近くせまること

激烈（ゲキレツ）　二字共にはげし　探照燈（タンセウトウ）　探海燈を照して砲撃するも　極力（キヨクリヨク）　一生懸命で

四分五裂（シブンレツ）　ちりぢりばらく　血路（ケツロ）　敵の圍みをつ いてにげる路　覓（モト）め　應接（オウセツ）　相手になる

◉〔六七〕照準（セウジユン）　ねらふ　黎明（レイメイ）　しのめ　煤煙（バイエン）

俯角（フカク）　下に向ける角　追（イトマ）

けむり　數條（スウデウ）　條はすぢ　殘敵（ザンテキ）　のこりの敵　包圍（ハウヰ）　かこむ

のこり　優勢（イウセイ）　すぐれしいきほひ　抵抗（テイカウ）　あふはり　降意（カウイ）　降參のこころ

◉〔六八〕敗餘（ハイヨ）　まけ

漣（サヾナミ）　陽炎（カゲロフ）　追及（ツヰキフ）　おひつく

◉〔六九〕幕僚（バクレウ）

司令官大將等の直接の部下　汲汲（キフ〳〵）　一心

◉〔七〇〕特務艦（トクムカン）　特別な任務に服する艦

國本（コクホン）　國部下（キガ）　奇績（キセキ）　ふしぎなてがら　殘獲（ザンクワク）　殘りのえもの　擊滅（ゲキメツ）　うちほろぼす　洩（モ）れ

役務（エキム）　いくさのつとめ　支障（シシヤウ）　さしつかへ　祖（ソ）

人爲（ジンヰ）　人の力　◉〔七一〕加護（カゴ）　まもり　嚮（サキ）　に

一四　生存競爭（セイゾンキヨウソウ）

餘地（ヨチ）　あき　◉〔七二〕若干（ジヤクカン）　いくらか　犧牲（ギセイ）　いけにへ、他の爲に命をすつるもの　犯（ヲカ）さず

他を攻める　釋迦（シャカ）　難行苦行（ナンギヤウクギヤウ）　つらい修行

て　餓死（ガシ）　うるに　腿（モモ）　殺（ソ）ぎ

◉〔七五〕長閑（ノドカ）　讃（タタ）へる　皮相（ヒサウ）　うはべの　平穩（へイヲン）　おだやか　◉〔七六〕

幼蟲（エウチウ）　卵よりかへて成蟲と成るまでのを　蜘蛛（クモ）

◉〔七七〕年年歲歲（ネンネンサイサイ）　毎年　餌（エ）　狙（ネラ）ふ　風前の燈（トモシビ）　危きたとへ

總量（ソウリヤウ）　全体の分量　制限（セイゲン）　かぎり　繁殖（ハンショク）　ふえる　假定（カテイ）　かりにきめる　◉〔七八〕

飽食（ホウショク）　あきぐひ　◉〔七九〕丘淺治郎（テカアサジラウ）　理學博士

一五　奮闘（フントウ）

奮闘（フントウ）セザレバ勝利（ショウリ）ナシ　しっかりかたゝかねばかてぬ　シオペンハウエル　Schopen hauer.

獨乙の大哲學者　境遇（キヤウグウ）カ、ワレ境遇ヲ作ル　自ら運命を開拓し自然の成り行きに任すな　ナポレオン

Napoleon Bonaparte　生命（セイメイ）ノ存スル間ハ、ソコニ望（ノゾミ）アリ　命あれば希望あり　キケ

羅馬の大政治家にして又學者　Cicero.　河深（カハブカ）ケレバ流（ナガレ）靜（シヅカ）ナリ　底ひなき淵やはさゝぐ、山川の淺き瀬にこそ仇波

英國の大詩人の詩聖と稱せらる　William Shakespeare　はたてシエクスピア　吠（ホ）ユル犬ハ、ふらい者もちつさして居てはだめだ　アービング

米國の文豪　Washington Irving　眠（ネムレ）ル獅子（シシ）ヨリモ遙（ハルカ）ニ有用（イウヨウ）ナルコトアリ　數多（スウタ）ノ事件（ジケン）ヲナスベキ捷徑（せフケイ）（ちか道）ハ一時（タチ）ニ唯一事件ヲノミナスニアリ　一時に多くを望む勿れ　リチヤード、セシル　Richard Cecil

◉〔八〇〕怠惰（タイダ）ハ猶錆（ナホサビ）ノゴトシ使用（シヨウ）セザル鍵（カギ）ハ錆（サビ）ニヨリテ腐蝕（フシヨク）（くさる）　精出せば氷る間もなし水車　フランクリン　Beujamin Franklin

日常使用（ニチジヤウシヨウ）スル鍵ハ光輝（クワウキ）ヲ放（ハナ）ツ

一六　伊能忠敬（イノタヾヨシ）の晩學（バンガク）　その一

晩學（バンガク）　年老へて後學問するを

凡々（ボン〳〵）　尋常一樣の

養嗣子（ヤウシ）　あとつぎの養子

一意專心（イチイセンシン）　心をこめて

一擧手一投足（イツキヨシュイツトウソク）の勞　一寸の勞力

委（ユダ）ねて　自分でかくして

圓清（エンセイ）　缺點なく

麗（ウルハ）しく　平〳〵

◉〔八一〕

◉〔八二〕奇才（キサイ）

◉〔八三〕丹誠（タンセイ）だす

閑散（カンサン）ひま

老境（ラウキヤウ）　老人の境遇

◉〔八四〕前途（ゼント）將來

多望（タバウ）　有望、望み多き

爲（ナ）すある人　一事を成す能ある人

花月（クワゲツ）の遊（アソビ）　自然をたのしみ遊び暮すこと

一七　伊能忠敬（イノウタダヨシ）の晩學（バンガク）　その二

◉〔八五〕寓（グウ）かりのすまひ

笈（キフ）おひづる、本箱

精（クハ）し

鄕關（キヤウクワン）　鄕里

都門（トモン）　みやこ

擧（キヨ）く

算數（サンスウ）　數學

嗜（タシナ）み　好み

資性（シセイ）　天性

市井（シセイ）　俗世間の

闢（ツンザ）き　あとめをつぐ

德量（トクリヤウ）　德や器量

◉〔八六〕契（チギリ）

流石（サスガ）

笑柄（セウヘイ）　わらひぐさ

しのたれ

嘲笑（アウセウ）　あざけりわらふ

非凡（ヒボン）　人なみすぐれた

不可（フカ）　いわるて

區區（クク）　小い形容

堤防（テイバウ）　つゝみ

決潰（ケツクワイ）　水の爲にくづれる

蘊奧（ウンオウ）　おくそこ

◉〔八七〕志（コロザシ）を抱（イダ）いて　志を遂げずして

群小（グンセウ）　多くの小人

蛙鳴蟬噪（アメイセンサウ）　蛙や蟬のこゑ

◉〔八八〕肩（カタ）を比（ヒ）す　優劣

修得（シウトク）　をさめえたる

運用（ウンヨウ）　はたらかせる

暮齡（ボレイ）　おひぼれ

旺盛（ワウセイ）　さかん

滿面（マンメン）　顏一杯に

即日（ソクジツ）　その日

勇往直前（ユウワウチヨクゼン）　心のくすゝむ

飽（あ）くまで　盛なるさま

滿（マン）勃（ボツ）　勃

◉〔八九〕胸裏（キヨウリ）　中

豈（あに）　我國成人となる

辟易（ヘキエキ）　おそれたぢろく

われに　われに

早熟早老（サウジユクサウラウ）　早く

一八　時（トキ）

巧妙（コウメウ）　たくみ、うまいこと

嗤（ワラ）ふ　あざもちふ

◉〔九〇〕ワーテルロー　Waterloo

一敗地に塗れ（こりかへしのつかぬまけをすること）
おくれて來る　祕訣（ヒケツ）の手（おく）　著手（チヤクシュ）かろ　部將（ブシヤウ）　グルーシーの大將　遲參（チサン）
日（ジツ）將（しやう）、來いつか　進捗（シンセフ）はかどり　索然（サクゼン）なくなるさま　他（タ）
息（やす）まず　◉〔九二〕夜半（ヨハ）　季節（キセツ）その折々　沐浴（モクヨク）水をあびる　ヘラクリトス
枯草（カレクサ）は　西洋のことわざ也　草枯（カレクサ）　乾し草、ことわざ也　茫然自失（バウゼンジシツ）ぼんやりと氣ぬけする　鐵（テツ）は　西洋のことわざ也
促（うなが）へ　つかまへる　責任（セキニン）ひきうけたるせめ　分陰（フンイン）少しの時間　機會（キクワイ）よきなり
斷じて　決して　ウオシントン
◉〔九三〕傭（やと）ふ　奴僕（ドボク）　辯解（ベンカイ）
余（よ）が余（よ）たる　自分の人にちがふ　晚餐（バンサン）ばんめし、
◉〔九四〕各自（カクジ）めい〳〵の食卓（ショクタク）Table　George Washington.　辯疏（ベンソ）いひわけ　Admiral Nelson　チルソン　義務（ギム）つとめ

一九　南極探檢（ナンキヨクタンケン）　その一
霙（みぞれ）　こもごもがかはる　映光（エイクワウ）雲などの如き物にうつり來る光　黑暗暗（コクアン〳〵）まつくろ
寂寞（セキバク）さみしい　◉〔九五〕極地（キヨクチ）はての土地　險惡（ケンアク）あぶない　天候（テンコウ）てんき　遭（ソウ）
逢（あ）はでく　檣頭（しやうとう）帆柱の上　激（はげ）しく　ふきつける　氷塊（ひようくわい）氷のかたまり　舷側（げんそく）な
べりむしる　搓（よ）る　秒（べう）一秒　刻一刻　奈落（ならく）地獄　いはん方なし　いひやうがない
グラハムランド　Graham land
じさされる　すきになぶられる　危難（きなん）あやふき目　堅牢（けんらう）かたくて丈夫　芥（あくた）
◉〔九七〕躊躇（ちうちよ）ためらふ　翻弄（ほんろう）　尺寸（せきすん）ちよつと　囲圖（いご）ひとや　禁錮（きんこ）されるとこ　洋（やう）
鷹（おう）たか　翱翔（かうしやう）そらをかける　ペンギン　Penguin　風委（ふうし）たか

●〔九八〕イ千たむ　地軸の南北の極心を貫くと假定せる軸

二〇　南極探検　その二

氷陸　氷の陸地　氷田　海水凍りて田の如くなれるもの　四邊　あたり　●〔九九〕依然　いぜんや　もとのまゝ　地點　ちてんばしよ　靜止　せいしてゐる　漂ひ　まよひに流される　水平線　すいへいせん　齊し　ひとしら　桅　きほばしら　條　すぢ　氷丘　ひょうきゅう　氷のなか　地平線の意　覺束なき　おぼつかなき　心もとなき　點綴　てんせつつゞりあはす　海豹　かいへうあざらし　暗憺　あんたんきさま　暗くすごき　極光　きょくくわう　Aurora　はて　しまひには　●〔一〇一〕沮喪　そうそうくちかせる。沮はばむ、喪うしなふ　況や　いはんてや　孤影　こえいひとり　蕭然　せうぜんしよんぼり　前途　ぜんとゆく　絶望　ぜつばうのぞみのなきこと　託せる　たくすまかせ　橈　そうかぢ　鈍き　にぶき　沒し　ぼつしはいろ　橙色　とうしょくだいゝろ　●〔一〇二〕半身　はんしんかた　身

雀躍　じゃくやくよろこびをとること

二一　端艇につきて友人に贈る

近狀　きんじゃう近頃のやうす　起居　きごやう　湘南　しゃうなん湘は相模國の意　荒磯波　あらいそなみ磯邊の荒波　●〔一〇三〕漕習　そうしふいこぐけ　一かど　廉一　レース　Race　競漕　野心　やしんたくらみのこころ　楊柳川　やうりうかは柳川　繋ぎ　つなぎ　岸頭　がんとう頭あたりきしべ　蘆荻　ろてき蘆あし荻をぎ　●〔一〇四〕なかなかに　かへつてみつまた　房總　ばうそう安房上總　●〔一〇五〕趣意　しゅいこゝろぐみ　三叉　さんさ　晴嵐　せいらんゆふやけ　浩濤　こうとう大波　漫波　まんぱ小波　積日　せきじつ毎日　苦學　くがく勉強　●〔一〇六〕心神　しんしんここ　好箇　かうこよき　コース　Course　航路　過半　くわはん半分以上　諭言　ゆげんさとし　●〔一〇七〕圖る　はかる

二二　農業の快楽

健全（ケンゼン）やか　◉〔一〇八〕大氣（タイキ）　空氣　戸外的（コグワイテキ）　家の外で　著實（チャクジツ）　ぢみ

てかろがろ　しくない　性急（セイキフ）　せつかち　なる性質　人事（ジンジ）　人間の力　天命（テンメイ）を待つ　あさ

は運にまかぜる　妙理（メウリ）　奇妙な道理　科學的精神（クワガクテキセイシン）　物事を研究する心　◉〔一〇九〕

妙機（メウキ）　ふしぎな　はづみ　因果（イングワ）の理法（リヘフ）　原因結果の道理　整然（セイゼン）　きちんと　會得（エトク）　さと

趣（シュ）　美しきものをしたふ心　詩材（シザイ）　詩に作る材料　千古（センコ）　世々に比なき　無名（ムメイ）　名も知れぬ　幽草（イウサウ）　美

小草　討（タヅ）ね　さがしもさむ　◉〔一一〇〕餘業（ヨグフ）　片手間のしごと　掌大（シャウダイ）　手の平位の大さ　貧（ムサボ）る　貪る

培養（バイヤウ）　培つちかふ　別墅（ベッショ）　別荘　殺戮（サツリク）す　殺ころす　霄壤（セウワウ）　霄はそら、天地　徳富猪一郎（トクトミイチラウ）　號は蘇峰、新聞記者

二三　レシングの比喩

比喩（ヒユ）　たとへ　譚（ダン）　はなし　◉〔一一一〕鵞（ガ）　鳥白

だ　鵠（カウ）　鳥　肩（イサギヨ）　しし　快　鷹揚（オウヤウ）　つたかぶりてゆ

ぶらつく　頸（クビ）　外觀（クワイクワン）　よそからのみえ　滿身（マンシン）の力　からだ中の力　あだ　だむ

武骨（ブコツ）　やさしからすしてかたすぎるこさ　◉〔一一二〕畸形（キケイ）　かたはの形　驢馬（ロバ）　驢馬　英邁（エーマイ）　すぐ

られてゐらいい　輩（ハイ）　ともがら　伍（ゴ）　仲間入りする　投（トウ）　手下となる　任俠（ニンキヤウ）　をさこだて

◉〔一一三〕囘（メグ）れる　さばかり　それほど　御（ギヨ）せらる　自由に使はれる　殊勝（シュショウ）なる武者振（ムシャブリ）

二四　殊勝（シュショウ）　健氣（ケナゲ）　阿閉掃部（アベカモン）　◉〔一一四〕厚祿（コウロク）　てあつきろく　狛（コマ）　世（セ）

祿の歷歷（ロクレキ）　代々祿をうくる立派なる士

饗膳（キヤウゼン）の膳　馳走　嫡子（チヤクシ）　家を嗣ぐ子

愚息（グソク）のこと　自分（ソレガシ）

志津が嶽（シヅガタケ）　賤ヶ嶽の合戰に引（ヒ）かへ　默（モク）して　鎧（ヨロヒ）　著初（キソメ）　招待（セウダイ）

おぼし　おぼれ　御人體（ゴニンタイ）　おひさがら

◉〔一一六〕雜兵（ザフヒヤウ）　つまらぬ兵

浸（ヒタ）し　物のあやめ　物のいろ、あやめは黑白

◉〔一一七〕陣頭（ヂントウ）　いくさ　入魂（ジユツコン）　したしく

八手（ヒトデ）の手　他人の手・わりなく　此上なく

◉〔一一八〕浮（ウ）きたる事（コト）　そ　緘（アドシ）　鎧をつなぐ絲

膝（ひざ）　膝をすつて出る

こころさ

愕（オドロ）き

室直清（ムロナホヨ）　號は鳩巢・新井白石と同門の學者

二五　流泉啄木（リウセンタクボク）

流泉啄木　琴の曲の名、啄木（きつつき）いばむ

金子元臣（カネコモトアミ）　國學者

◉〔一一九〕あふ阪（ザカ）　逢ふことあふ阪となぐ

かげたるもの　杉（スギ）むら　杉のむらがれるもの

琴、琵琶など數へるに云　心（コヽロ）なぐさに

應答（オウ）返し　柴（シバ）の門（ガド）　しばにて作るもん

こよひ　宵（今）

彈（ヒ）く　うなづく　合點する

いう方（カタ）　傾きかゝる頃　手（テ）　彈きかた

月のかつら　月の中の桂の木

二六　佐久間大尉（サクマタイヰ）

慷慨（カウガイ）　國をおもひていきどほりなげく

節（セツ）に死する　節義の爲に死す

はかられぬ　急の場合に處する

應急（オウキフ）

港（ミナト）

各種（カクシュ）　いろ〳〵

故障（コシヤウ）　さはり

◉〔一一二一〕職（ショク）に殉（シュン）し　殉は命を捧ぐ、職務の爲に死す

俄然（ガゼン）　には　かに

從容（ショウヨウ）　おちつき

不慮（フリヨ）

母艦（ボカン）　水雷艇等の小形なる船のおやふね

新（シン）

◉〔一一二〇〕心（コヽロ）あらん人（ヒト）　なさけある人

ひめたる　秘傳とした

いみじ　たへなるあらい

◉〔一一二一〕撥（バチ）

百方（いろ〳〵）　即刻（すぐ）さま

經過（へろ、たつ）　腕を拱き（うでぐみする）

●〔一二三〕排水（水をの）ぞく　換氣（空氣を）かへる

端坐（正しく）坐す　絕息（いきが）たへる　仰（あぐ）

●〔一二四〕悲壯（あはれにも）いさましい　臨終（いまはの）際

言言句句（一言一句）　巨細（くは）しく

沈著（おちつ）いて　誤解（かんがへ）ちがひ

發展（さかんになりゆくこと）　打撃（くじきたぐこと）

あやふきこと　至尊（井ソクの）陛下　遺族（のこれる家族）

●〔一二五〕勉勵（つとめはげむ）　安危

こゝろ　告別（いさま）ごひ　自若（あはて）ぬさま

窮す（なんぎす）

●〔一二六〕念頭（おもひ）　悲慘（いたましきさま）

沈勇（おちつきて勇氣あること）　壯烈（いさましきさま）

●〔一二七〕趣味（おもしろみ）　幸使（よきたより）のついで

不測の變（はからぬわざはひ）

●〔一二八〕龜鑑（てほん）　典型（手本）

斃而後已（たふれてのちやむ）

たか（偉らいこと）

二七　わが小園

控へ　塲末（郊外につゞく所の町はづれ）

開く　物めかし（風流らしく）

吟興（ぎんきょう）を鼓す（詩歌など作る心をおこさす）

●〔一二九〕翔ける　斂（さび）　拓き（ひら）地を

びしくなり　憶ふ（おもふ）　萬感（ばんかん）のかんじ

就レ荒（くわうにつく）　遥き（へだたる）みち　口すさむ（くちずさむ）　白の吟ずる中で

吟（うめ）く　芳蓖（かんばしき花びら）

●〔一三〇〕さからさ命（あやふきいのち）　三逕（けい）

うららかなる　病衣（びやうえ）　牖（まど）　呻（しん）

●〔一三一〕獄窓（ごくそう）　隙（すき）を侵（おか）す

屑（着物の間を吹くこと）

治第一の俳人

刈株（かりかぶ）

●〔一三二〕午過（ひるすぎ）　椎（しひ）　正岡常規（まさをかつねのり）　號は子規、明

二八　ボアソナード氏を送る詞（オクルコトバ）

文机（フヅクエ）　凭（ヨ）り　餘念（ヨネン）なく　一心に

◉〔一三三〕腫（ハ）れ　法律（ハフリツ）の條文　起草（キサウ）下書等をする

當事者（タウジシヤ）相手　秘書官（ヒシヨクワン）側につきて書信などつかさどる役人　轉地療養（テンチレウヤウ）土地をかへてれうぢする

◉〔一三四〕つかさある人　官に仕へる人　いそしみ　つとめ

立法（リツパフ）法律をたつること　諸般（シヨハン）いろ〳〵　一小件（セウケン）一小事件　公衆（コウシウ）世の中の多くの人　演（エン）

述（ジユツ）口にのべること　餞（ハナムケ）送別の會　席（セキ）の

すゝめつげること　井上毅（ヰノウコハシ）號は梧陰、文部大臣として名高かりし人

◉〔一三五〕さはみ　極（キハ）まる　勸告（クワンコク）

修訂中等國語讀本詳解字引　卷二終

修訂中等國語讀本詳解字引　卷四

一　忠君愛國（チウクンアイコク）

◉〔一〕留學（リウガク）外國へ學問にゆくこと　祝宴（シユクエン）いはひのうたげ　シーボルト　Siebolt有名なる植物學者

革命（カクメイ）王統の代ること、又政治の主權の移ること　不滿（フマン）ぞく　縮小（シユクセウ）ちゞめて小さくす

顚覆（テンプク）くつがへる　權威（ケンヰ）いきほひ　文化（ブンクワ）文明の化

◉〔二〕稜威（イツ）威光　成就（ジヤウジユ）できあがる　◉〔三〕唯井（ヰヰ）

詔勅（セウチヨク）みことのり　既得（キトク）すでにもつて居ること　枚擧（マイキヨ）かぞへあげる

煥發（クワンパツ）煥あきらかに發布すること　維持（ヰヂ）もちつゞけること　沙汰（サタ）事柄

諾々（ダク〳〵）はい〳〵と承諾すること　事實（ジツジツ）まことがら　斷頭臺（ダントウダイ）首斬り臺

出奔（シユツポン）にげだす　刑場（ケイヂヤウ）しおきば

暇（イトマ）遑の字正し

◉〔四〕慘酷（ザンコク）むごたらしい　百姓（シャウ）人民　贏（カ）ち得（う）る　素性（スジャウ）　王侯（コウ）國王大名　してうがふこと　挽（ひ）く　叛臣（ハンシン）叛はそむく　寵愛（チョウアイ）　顧（かへり）みる　◉〔七〕輩（ヤカラ）ども　法（ハフ）王道、國君の命　坐（スワ）る　不屆（フトドキ）　しりぞける　廢立（ハイリツ）　女（ムスメ）

二　自國語（ワンコクゴ）

自國（ワンコク）のおのれのくに　血液（ケツエキ）ちしほ　精神的血液（セイシンテキケツエキ）心のうへ　肉體（ニクタイ）から　同胞（ドウハウ）はらから、兄弟　精神上（セイシンジャウ）、

◉〔八〕望月（モチヅキ）十五夜の月　◉〔九〕散亂（サンラン）ちらばる　大難（タイナン）大なるさいなん　奮（フン）

◉〔五〕類例（ルイレイ）似たためし　輿望（ヨバウ）世の人望　將相（シャウシャウ）大將宰相　◉〔六〕覬覦（キユ）分外の望を起　大義名分（ダイギメイブン）君臣の大なるみちをけじめ　謀反（ムホン）　檢非違使（ケビヰシ）今の裁判官と警察官とを兼ねし如き役、非違をだす役　王（ワウ）　了簡（レウケン）がへ　神託（シンタク）神のをしへ　排斥（ハイセキ）け

起（キ）ふるひおこる　あくまでも　ごこまでも　齊（セイ）にいつしよに　ことほぎ　いはひ　德（トク）美しき德行　措（オ）きよそにして　國（くに）ぬ　ギリシア Greece　脅奉（キョウホウ）おどしたてまつる　一朝（テウ）ひとたび　慶報（ケイハウ）よろこばしきしらせ　眼中（ガンチウ）にかけぬ　科學（クワガク）系統ある學理を以て組織せる學問　原素（ゲンソ）もと　復（フク）一　科語（クワゴ）科學に用ゐる語　天堂（テンダウ）天國、神の國　福音（フクイン）うれしきしらせ　美（ビ）　ラテン語 Latin　太利語佛蘭西語等のもとの國語　◉〔一〇〕諸蕃（ショハン）もろ〳〵のひらけ　建國（ケンコク）國を建ておこす　ゲーテ Goethe　シルレル Schiller　スタイン Stein　救助（キウジョ）すくひ　礎（イシヅエ）もと　爾（ジ）　來（ライ）それより　國家敎育（コクカケウイク）國家が施す敎育　蓋世（ガイセイ）世をおほふ、大なるたとへ　ビスマルク

ク　Bismark
普通教育　普通國民として知り置くべき知識技能を授くる教育　基礎　もとゐ　上
田萬年　文學博士

三　愚公の山

◉〔一二〕家居　すまひ　引き具して　つれて　耒耜　すき　一簣　一トもつこ
毀ち　智叟　◉〔一三〕寓言　たとへばなし　ならし　だらう
◉〔一四〕禦寇　諷し　それとなしにしらす

四　四明山下の卜居

卜居　場所をさだめて住む　春來　春より　僻地　かたよれる地　八朔　陰暦八月一日　茅
屋　かやぶきの家　一宇　一軒　◉〔一五〕佳境　よきところ　閑居　しづかにすまふ

是非外　うるさい人の世をはなれてゐる　閑人　ひまな人　挺身　身をぬきだして、眞先に　戎夷　えびす
皇天后土　天地　先登　さきがけ　直言　かざらぬことば　◉〔一六〕風味　おもむき
同氣相求む　同類相集まる　閑に　風月　自然の樂のこと　存念　かんがへ　不
宣　十分のべつくされません　梅田定明　號は雲濱、幕末の志士

五　蘇武

蘇武　支那漢代の人にして北方の匈奴に使者と成りて行き、匈奴の王に仕へを勸められしも之を却けし忠節の士　颯颯　風のふくおと　あ
きふけて　秋が末になつて　◉〔一七〕おもき君命　國君より命ぜられし重大なる使命　匈奴
夷す　えびす　故郷母あり　故郷には老母いませり　老の寢覺やいかならん　寢覺に雁の聲を聞いて我が子よりの便りやあると思ふであらう　雁鳴きて　◉〔一八〕よしや　たとへ　草

枕（マクラ）昔は旅して草を枕に宿したるより旅の枕詞（マクラコトバ）に草枕な用ふ

なく　面接（メンセツ）　まのあたりにあふ　國書（コクショ）　國王より國王への書面　かうと　かく　つぶさに　くはしくおもち

◉〔一九〕單身（タンシン）　ひとりで　をしみ　ほめる　しかあらば　さうであると　可（キ）かざれば　荒山（アラヤマ）　たくやま　いはや　窟　旨意（シユイ）　おもむき　非道（ヒダウ）　道をわきまへない

◉〔二〇〕頃（コロ）し　丁度その時に　料（シロ）　材料　こたび　こんど　幽閉（イウヘイ）　おしこめる　放免（ハウメン）　ゆるしはなす　あざけり　嘲り

◉〔二一〕無念（ムザン）　れん　最中（モナカ）　さいちう、まんなか　かくて在る　かうして生きて居る　筆（フデ）　のあとみてが　ゆめの間（マ）や　早くすぎた　赦され　罪をゆるされ　雪　白髪のこと　使（ツカ）と雁に手紙をことづけしこと　和議（ワギ）　なかなほり　雁（カリ）の　忠節（チウセツ）　忠節のみさを

六　胃險心（バウケンシン）

◉〔二三〕胃險心（バウケンシン）　危險を胃して物ともせぬ心　狂夫（キヤウフ）　きちがひ　碌碌（ロクロク）　ぐつぐつすること　調合（テウガフ）　程よくあはす　愼重（シンチヨウ）の態度（タイド）　つゝしみ深きふるまひ　辭（ウ）　口上にげ　負（オ）ふ　おかげをうける

◉〔二四〕臆病者（オクビヤウモノ）　遁（トン）　走　常識（ジヤウシキ）　Commonsence.　無謀（ムボウ）　考へのない　凡骨（ボンコツ）　凡人、俗人　人生の要（エウ）　世に處する大切なこと

◉〔二五〕膨脹（バウチヤウ）　ふくれる、ひろがる　夢想（ムサウ）　空想　天資（テンシ）　うまれつき　コロンブス　Colombus　周（メグ）り　パス　コ、ダ、ガマ　Basco da Gama　登錄（トウロク）　書きのせる　横斷（ワウダン）　よこぎる　蕃殖（ハンショク）　ふえる　先導（センドウ）　さきする　聰明（ソウメイ）　さとくかしこし　未然（ミネン）　將來　洞觀（トウクワン）　見とほす　審（ツマビラカ）　つまびらか　斷斷乎（ダン〳〵コ）　きつぱり

◉〔二六〕知慮（チリヨ）　かんがへ　當初（タウショ）　はじまり　閉目（ヘイモク）　めをつぶる　遲疑（チギ）　ためらふ　處（ショ）し　あたり　銅（クワイ）　まふ　暗中（アンチウ）の飛躍（ヒヤク）　先の暗いわからぬ中でも勇氣を出して飛ぶこと　須（モチ）る

輕擧（ケイキョ）　むやみに事を爲す

妄動（モウドウ）

七　ベスビオ　Vesvio

◉〔二七〕熔巖（ヨウガン）　噴火口より流ろる赤くさけし岩

目睫（モクセフ）　睫まつげ、まぢかく

灌木（クワンボク）　丈低き木

疎（ソ）

◉〔二八〕松明（タイマツ）

焔（ホノホ）　靡（ナビ）け

滅（キ）え　細逕（ホソミチ）　鎗（タニ）

導者（ダウシャ）　案内

◉〔二九〕巓（イタヾキ）

振（フ）り翳（カザ）し　踝（クルブシ）

列（ツラナ）り　ならび　由（ヨシ）なし　方法なし

一息（ヒトイキ）

錯落（サクラク）　ごころ〳〵と不順序にあること

圓錐（エンスヰケイ）形　まるきりの形

火口（クワカウ）のまは　火坑（クワカウテイ）堤（つゝみ）のごとく

來路（ライロ）　くるみち

遮（サヘ）られ

◉〔三〇〕坑口（カウコウ）　あなのくち

闇夜（アンヤ）　よみ

核心（カクシン）　なかまん

不斷（フダン）　たえずつゞける

支持（シヂ）　さゝへたもつ

噴（ヘ）き　火（クワ）の柱（チウ）　直（チヨク）上（ジヤウ）に上（のぼ）る

巨砲（キヨハウ）　大砲

逆（サカ）り　ルビン　玉紅

嵌（ハ）め　心裏（シンリ）　心のうち

屏息（ヘイキ）　いきをこらし

客人達（マラウドタチ）　麾（サシマネ）き

◉〔三一〕身幹（シンカン）　みのたけ

陰翳（インエイ）　かげ

巖罅（ガンコ）　いはのすきま

ゆらめく　ゆれる

◉〔三二〕褪（アト）せ

表層（ヘウソウ）　おもて

凝（コ）り

隈隈（クマ〳〵）　すみ〴〵

腾上（トウジヤウ）のぼる

◉〔三三〕痕（アト）

印（イン）す　しるしつける

斷文（ダンブン）　きれたる

殷紅（アンコウ）　くろあかい

濃（ヒロ）し

四圍（井）（セヰ）　あたり

滑（スベ）り

去路（キヨロ）　かへりみち

徒（ト）爲（井）（ヰ）　むだ

跳（テド）り

森林太郎（モリリンタラウ）　號は鷗外、文學博士醫學博士陸軍軍醫總監

◉〔三四〕蹴（ケツ）て

促（ウナガ）し

斂（テサマ）り

昵坐（ヤヨザ）　うづくまる

◉〔三五〕品格（ヒンカク）　品位（ひん、）

前途（ゼント）　將來

觀（クワン）

滅盡（メツジン）なくなる

八　歐米人（オウベイジン）の氣風（キフウ）

自重心（ジチヨウシン）　自らの品位を保ちて徒に卑下せぬこころ

念がん　海事思想　海に關する

◉〔三六〕經營　鼓吹　鼓は太鼓をうつ、吹は笛を吹く。言論文章にて人をうながすこと

◉〔三七〕性格　誇稱　ほこり　宏壯　大きく　整備　きちんと

ととのへる　立てゝ作る　しりへに　うしろに

實　ちみて　瞠若　驚きて目をはりおどろくこと　自負心　人に下らぬ心　堅

かたし

輻輳　一所にあつまる　粹　よきもの　自由貿易　干渉せぬ貿易、海關稅などをさらぬもの

たのむ　秩序　おきて、きまり　一丸　たまり　血色　皮膚の色　信賴　信用して

坑夫　かれほり　小成　小さい成功

士　Gentleman　寧

推す　おして知る　レコード　破　在來の記錄（Record）を破ること

◉〔三八〕開拓　きりひらく　向上心　進んでやまぬ心

修養　學德をつむ　下劣　下卑てされる　紳

◉〔三九〕自營　自分の事を自分ですること　獨立　他人の世話にならぬこと

◉〔四〇〕進取

模　しくみ　宏大　大なり

ルーズベルト　Theodore Roosevelt

敢爲の氣象　進んでやり、思ひきつて行ふ元氣

しめす　あかす　國運　國の運命

要訣　大切なるわけ、むづかしくのでて

九　ポートサイドより

新奇　めづらし　曇に　櫓　突飛　だしぬけ

◉〔四一〕セイロン　錫蘭

埃及　Egypt

境界　さかひめ

拙書　つたなき手紙　落手　うけとる　船足恙なく　航海も無事に

◉〔四二〕夢寐　ゆめ　徃來　ワウライ

怨恨　うらみ　悲愁　かなしみ　傷め　心をいたみ

指顧　指でさす、近きこと

心の通ふ　心の通つた

いたむろ

衰弊（スヰヘイ）おとろへやぶれる

◉〔四三〕盛者必衰（セイシャヒッスヰ）盛んなるも必ず衰ふ

堂閣（ダウカク）高殿

行客（カウカク）旅人

形骸（ケイガイ）心なきむくろ

悽慘（セイサン）いたましい

循環（ジュンクワン）めぐりめぐること

數運（スウ）命

◉〔四四〕感慨（カンガイ）感じなげく

三稜洲（リョウシウ）河口にある三角形の洲

駝（ダ）跨り（マタガ）

荒寥（クワウレウ）あれてさびし

緒く（アカ）

峙てる（ソバダ）

駱（ラク）駝

徘徊（ハイクワイ）よふ

形狀（ケイジャウ）いひあらはす

玻璃窓（ヘリサウ）

ガラスまど

終宵（シウセウ）夜どほし

征衣（セイイ）旅衣

船房（センバウ）船の室

輾轉（テンテン）れがへりすること

レセップス Lesepps

援る（ト）

◉〔四五〕胡弓（コキウ）

弾き（ヒ）

一〇　新聞紙（シンブンシ）

◉〔四六〕耳目（ジモク）耳や目の如く知識をさるに大切なもの

聾（ロウ）ぼつん

瞥（ベツ）めぐら

柳營（リウエイ）將軍の居る所

廻（クワイ）狀（ジャウ）ぶみ

風聞書（フウブンガキ）うはさがき

◉〔四七〕濫觴（ランシャウ）はじまり

正當（セイタウ）あたりまへ

◉〔四八〕姑（シバラク）く

一寸（ワン）

和紙（ワシ）日本紙

ひらし

◉〔四九〕紙幅（シフク）

初刷（ハッズリ）

事態（ジタイ）すう

瓦版（カハラバン）

ひばなしのたれ

輪轉機械（リンテンキカイ）長く續ける紙を以てする器械

片面摺（カタメンズリ）

見窄（ミスボ）らしみぐるし

引札（ヒキフダ）廣告

者

鋤雲（ジョウン）

旗幟（キシ）はた、こゝにては一かどの意見

不熟練（フジュクレン）ない

◉〔五〇〕笑柄（セウヘイ）わらひ

迂遠（ウエン）遠いまはり

宿學（シュクガク）大學

鴻儒（コウジュ）

調（テウ）一本てうし

櫻癡（アウチ）

寄書（キショ）投書

日刊（ニッカン）毎日すり出すこと

四頁（クッ）頁はページ

◉〔五一〕無味（ムミ）

內容（ナイヨウ）なかみ

忠實（チウジツ）まめやか

◉〔五二〕如（ジョ）く

現象（ゲンシャウ）さま

包羅（ハウラ）つゝみあはす

渉（ワタ）り

發兌（ハッダ）發行する

蒐集（シウシフ）あつめる

◉〔五三〕廉（レン）やすいと

密（ヒソ）に

一一　模範村長歓迎會（モハンソンチヤウクワンゲイクワイ）

自治體（ジタイ）府縣郡市町村等（ちやうそんとう）

◉〔五四〕對照（タイセウ）はせ　こりあ

當代（タウダイ）今頃　知名（チメイ）有名　蒔繪（まきえ）　卓（タク）　花（ハナ）

絨緞（ジウタン）　金縁（キンブチ）　光彩陸離（クワウサイリクリ）光や色のきらくするとも　七寶（シツパウ）　花瓶（クワヘイ）はないけ　棚（カバ）

◉〔五五〕撮影（サツエイ）寫眞をうつすこと

劈頭（ヘキトウ）第一番に　温然（おだやか）　禿げ（ハゲ）　額（ヒタヒ）

積徳（セキトク）徳行をつめる　諄然（アイゼン）おだやかにあたゝかし　源泉（グンセン）も　縞（シマ）　袴（ハカマ）

◉〔五六〕瘤（コブ）　三才（サイ）三つの方　合體（ガツタイ）一つになる

◉〔五七〕靈氣（レイキ）　尊きふしぎな氣

燦爛（サンラン）びかびか　有爵（イウシヤク）爵位ある　傾聽（けいちやう）耳を傾けてよくきく　感想（カンサウ）　他所行（ヨソユキ）

◉〔五八〕撚り（ヨ）彩られ（イロド）

◉〔五九〕風来（フウサイ）身なり、やうす　老爺（ラウヤ）　こしより、たやぢ

◉〔六〇〕未婚（ミコン）まだ嫁入せぬ

◉〔六一〕終局（シウキヨク）おしまひ　議論の場所

方言（ハウゲン）地方のことば

一二　農人形（ノウニンギヤウ）

◉〔六二〕往昔（ワウセキ）むかし　宣らせ（のたまはせ）　凍え（こご）　聖詔（せいせう）たつときおことば　勸農（クワンノウ）農を奬め（すゝめ）ましはげます　頑固（ガンコ）かたくな　鋤（スキ）　鍬（クハ）　勝閧（かちどき）　篝火（かがりび）

郊野（カウヤ）のはら　雙眸（サウバウ）兩眼、眸ひとみ　開墾（カイコン）土地をひらくこと　古君子（コクンシ）今の世に見られぬ有德の人　論壇（ロンダン）

◉〔六三〕僧（トモ）　行厨（カウチウ）べんたう　披き（ひらき）　歡娯（クワンゴ）よろこびたのしむ　竭さしめ（つくさしめ）

瓢箪（へうたん）　清遊（せいいう）さつぱりせる遊び　縦（ホシイマヽ）　素燒（すやき）　皹げり（ひさげり）　賣つて居る　結（クク）

髪（かみ）をいつた（ツミワラ）　積藁（つんだわら）　跪座（きざ）かしこまる　雅致（ガチ）風雅なもむき　居常（きよじやう）平生

◉〔六四〕小亭（セウテイ）　小さいちん

稼穡（カシヨク）　稼はうう、穡はなさむ。農事

朝な朝（アサ）毎朝

忘れじな（ワス）　わするまいぞ

慈母（ジボ）　深き母親

座右（ザイウ）　そば

初穗（ツホ）

摸造（モザウ）　まねっくる

菟裘（トキウ）

◉〔六六〕監修（カンシウ）　監督して書を編むこと

庵（イホリ）　書院（ショヰン）　齋（シキ井）　閤

容る（イ）

撤し（テッ）　のけ（さり）

承け（うけ）づく（ウ）

一三　人の一生（ヒトシヤウ）

◉〔六七〕堪忍（カンニン）　長久（チヤウキウ）　かえるながくさ

一四　植物の景觀と氣象との關係（シヨクブツケイクワンキシヤウクワンケイ）　その一

◉〔六八〕景觀（ケイクワン）　めながめ

氣象（キシヤウ）　空氣中の現象

優美（イウビ）　やさしくうつくし

艶麗（エンレイ）　あでやかにうらくし

◉〔六九〕調和（テウワ）　程よきさりあはせ

◉〔七〇〕滴ら（シタ）

宇宙（ウヂウ）　天地のこと。宇は空間、宙は時間

空合（ソラアヒ）　そら

紫雲英（ゲン）　れんげ

臘梅（ラフバイ）　からうめ、花

特性（トクセイ）　その物のみ有する性質

籠め（コ）　をち方（カタ）遠方

淡き（アハ）

蒲公英（ダンポポ）　特徴（トクチヨウ）他に無き特別の點

萬緑（バンリヨク）叢（ソウ）中（チユウ）　候（コウ）　すべての草木の緑色となる時節

竹むら（タケ）　竹

叢竹（サウチク）

配合（ハイガフ）　とりあはせ

◉〔七一〕縦（モ）　燕子花（カキツバタ）　色は黄

槭樹（カヘデ）

公孫樹（イテフ）

菖蒲（シヤウブ）

幽情（イウジヤウ）　おくゆかしき心もち

◉〔七二〕形容（ケイヨウ）　かたどりあらはす

驟雨（シウ）　にはか雨

滋き（シゲ）

梧桐（アヲギリ）

鮮（セン）

綠（リヨク）　あざやかなみどり

聯想（レンサウ）　一の物より他のものをおもひ出すこと

突起（トツキ）　つきでたもの

芋（イモ）

◉〔七三〕天鵞絨（ビロウド）

沾ひ（ウルホ）　さびしきこと

束ね（ツカ）

濕る（ヌ）

はかなげ　あはれさうな

◉〔七四〕灑ぎ（シヤ）

蕭條（セウデウ）

一五　植物の景觀と氣象との關係（シヨクブツケイクワンキシヤウクワンケイ）　その二

しめやか　しつこりとせる

◉〔七五〕常磐木　濃綠（こみどり）　露れ　南天燭　魁偉（大なるを）
しなやか（やさしき）　豪壯（たくましく元氣）　清楚（さつぱりときれい）　そよ吹く（かろくふく）
樂（音樂）　木枯（初冬の風）　◉〔七六〕芒　蘆　戰げる（ふるひうごく）　松
籟（松風の音）　吟詠（詩歌に作りうたふこと）　◉〔七七〕をかしき（おもしろき）　見紛ふ（みちかへる）
雲の峰（夏の雲）　幽邃（おくぶかしき）　田沼　◉〔七八〕罩め
風趣（おもしろきおもむき）　夙く　禾本科　欵冬　朧
◉〔七九〕中秋（八月）　暗香（目に見えぬにほひ）　浮動（空にたゞよふ）　一面　一方　適く
◉〔八〇〕曉月　景致（ながめのおもむき）　三好學（理學博士、植物學者）

二六　品性

尊卑（たつときといやしきと）　劃つ　飽食暖衣（あくまで食ひあたゝかくきる）　大廈高樓（大なるいへ）
弊衣（やぶれ衣）　草屋茅舍（草ぶきのあばらや）　財力かれ　◉〔八一〕拱
手（手をくんで）　頤使（おとがひて使ふ、自由に使ふ）　營營（つとめるさま）　完全無缺（缺點のないこと）
素養（下地たる用意の學問）　◉〔八二〕意を得る（贊成する）　畢竟（つまり）　心事（こゝろ）
高潔（けだかくてけがれなし）　眞成（まこと）　美辭（よきことば）　私利（己のみの利益）
◉〔八三〕要路（大切なる地位）　窃　滔滔（水の盛に流るゝこと、多きにいふ）　大勢（大體のなりゆき）
闊歩（ゆつたりとあるく）　清廉（心清く廉恥ある人）　汚濁（けがれにごれる）　◉〔八四〕跋扈（ふみはびこる）
忌む（きらふ）　趁うて　◉〔八五〕品評（しなさだめする）　失墜（失ひおとす）
刮目（目をみはつて）　アモス、ローレンス Amos Rolence　縦令

●〔八六〕嘉納治五郎（カナフヂラウ） 文學士、柔道の大家

一七 運命（ウンメイ） その一

左右（ザイウ）する 自由にする　一半（イツパン） かたはし　附着（フチヤク） くつつく　暗暗裏（アンアンリ） 人に知られぬこころ

●〔八七〕畏（オソレ）　無限無邊（ムゲンムヘン） かぎりなくはてなし　既往（キワウ） 前の事　途上（トジヤウ） 行く途中

履歴（リレキ） 經歴　疲勞（ヒラウ） つかれ　●〔八八〕暑熱（シヨネツ） あつさ　樹陰（コカゲ）　決意（ケツイ） 決心

鬱葱（ウツソウ） しげれるを　喬木（ケウボク） 高き木　憩（イコ）ふ 一寸休む　懷（オモ）ふ　渇（カハ）き　喉（ノド）

潤（ウルホ）し　●〔八九〕絶好（ゼツカウ） 此上なくよい　蓐（シトネ）　沸沸（フツフツ） よくわきたるを　耳邊（ジヘン） 耳のほとり

微搖（ビエウ） かろくうごく　陶然（トウゼン） うつとりとして　恍惚（クワウコツ） 我を忘れてうつとりするを　うまい

熟睡　點點（テンテン） ちらばら　●〔九〇〕寓目（グウモク） 見る　思念（シネン） おもひ　無邪氣（ムジヤキ） あどけないを

讃（サン） ほめる　譏（キ） そしる　湊（アツマ）れり　輕車（ケイシヤ） よききくるま　縻（ツナ）ぎ　轔轔（リンリン） 車のおと

●〔九一〕轄（クサビ）　凝視（ギヨウシ） みつめる　低語（テイゴ） 小聲でいふ　容與（ヨウヨ） ゆつたり

●〔九二〕縺（モツ）れ　所行（シヨギヤウ） おこなひ　邂逅（カイコウ） めぐりあふ　面（オモ）ざし ほか　肖（ニ）たる

●〔九三〕喚（ヨ）び 聲あげて　惑（マド）ひ　無心（ムシン） たのしげに　●〔九四〕反復（ハンプク） くりかへす

忽焉（コツエン） たちまち　鞠鞠然（ククゼン） いびきをかくを

一八 運命（ウンメイ） その二

●〔九五〕頭巾（ヅキン）　目深（マブカ）　徘徊（ハイクワイ） うろつく　贓物（ザウモツ） ぬすんだ品物　囁（サヽヤ）く　匕（ヒ）

首（シユ） あひくち　●〔九六〕擬（ギ）し あてがふ　抽（ヒ）かん　頻（シキリ）に　嗅（カ）ぎ　一壜（イチビン）

●〔九七〕醫（イヤ）し　唇（クチビル）　搖（ウゴカ）せり　半殘（ハンザン） のこり　殷殷（インイン） 音の盛な

ると　轟々 車の大なる音　轆轤 車のはしる音　◉〔九八〕顧眄 ふりかへりみること　照射 てらす

森田文藏 號は思軒、文豪「運命」の原文は米國のNathaniel Hawthornの作

一九　水の聲

◉〔九九〕井上通泰 文學博士、御歌所寄人　杉垣 杉の生垣　やり水 庭などにうつ水　うき世 浮世　福羽美靜 舊石見津和野の藩士、維新の際功ありし人、國學者にして和歌に巧なり　佐佐木信綱 文學博士、弘綱の子、和歌に巧なり　たて髪 鬣　あふさか 逢阪　小出粲 號は梔園、御歌所寄人なりき

◉〔一〇〇〕瑕 玉のきず　あたら 惜しい哉　眞玉 まことの玉　落合直文 有名なる國文學者　かしこ おそれ多い　御くるま 鳳輦　舊都 京都　雲の上 皇居の意

二〇　朝鮮の風俗

平安時代 桓武帝の延暦十三年平安朝の奠都より後四百年の間鎌倉時代までをいふ　酷似 酷ははなはだし、よくにてゐる

◉〔一〇一〕上流社會 地位の高き人々の間　下層 下の方　興る　延喜 醍醐天皇の御代　天暦 村上天皇の御代　聚斂家 税など重くとりたてて我物とするもの　官省 役所　藁葺

◉〔一〇二〕豚小屋　葺替　簡單　武家時代 鎌倉時代より徳川時代までの間　穿く　着流し きたまゝ　惡化 悪い方にかはる

◉〔一〇三〕被物　冠物　烏帽子　露す 外に出す

◉〔一〇四〕元服 男子の成人して冠をつける時の式　大人　娶る　階級 上下のだん

◉〔一〇五〕有力者 富貴の者　輕蔑 かろんじあなどる　早婚 年若くして結婚すること　弊害 わるい風習　虛弱 よわい　滋養 やしない

◉〔一〇六〕生血　啜る　臟腑 はらわた　匙　盛切 一度もつたきりにすること

現代（いまごろ）　頃（ころ）　今

類似（るいじ）　にたこと

全般（ぜんぱん）　たいぜん

民性（みんせい）　その國民の特有の性質

繰（く）り

發揮（はっき）　あらはす

保存（ほぞん）　のこしておく！

同化（どうくわ）　同じやうに化せらるる

懇篤（こんとく）　れんごろに

由之（よしゆき）　文學博士、史學者

史學（しがく）　歴史の學問

◉〔一〇八〕誘導（いうどう）　いざなひみちびく

萩野（はぎの）

二　金吾秀秋（きんごひであき）

金吾秀秋（きんごひであき）　金吾は左右衛門尉の漢名なる執役なり、秀吉征韓の時には右衛門督なりき、故にかくいふ

朝鮮伐（てうせんばつ）

たれん大將軍（たいしやうぐん）　朝鮮征伐の總大將

承（うけたまは）り　仰せをうけ

引（ひ）き具（ぐ）し　ひきつれ

都合（つがふ）　あはせて

勢（せい）　數人

むねと　宗徒、已れのよりごする人々

明軍の爲に蔚山に圍まれて危し、秀秋歩騎二萬を以て明軍の後ろをまき之をたすく

◉〔一〇九〕後卷（うしろまき）　慶長二年の十二月清正

馬武者（うまむしや）　騎兵

太閤（たいかう）　關白の職にある者より父な

ろ　前の關白をさしていふこと、此時の關白は秀頼なり

しく　甚し

御代官（ごだいくわん）　御名代

◉〔一一〇〕事（こと）の體（てい）　事の次第

本道（ほんだう）　征韓軍の主力の通る可き道

仰（おほ）せ下（くだ）さるべうもや候（さふら）ふ　仰せ下さつて然るべきことでありませう

けしさうす　御やうす

御感（ぎよかん）　感心せられたことが一通りでない

ゆゆ

九箇所（かしよ）　朝鮮にて九の城を築きしなり

軍奉行（いくさぶぎやう）　今頃の參議官

輕卒（かるづつ）　かるはずみ

◉〔一一一〕ありあふ　居あはせたる

つどひ　あつまり

凱陣（がいぢん）　凱旋

かへすがへすも　かされがされ

後悔（うくわいざんねん）　なこと

一吉（かづよし）

世の常（つね）　世間なみの

などか辭（じ）し申さでは　聞（き）きもあへず　十分にきかずして

◉〔一一二〕不覺（ふかく）の事（こと）　油斷してあやまる事

どうしておこことわりせずにをりませう

御屋敷（おんやかた）

しやくび　貴樣の首

刎（はね）ねる　切りは

玄蕃允（げんばのすけ）

うち刀（かたな）　つばのつける刀、普通の刀なり

起（た）つ

●〔一一三〕とかく　かれこれ　制し　おしとどめ　尼孝藏主　尼とは奥女中の務めを解きて後剃髪して宮仕へする者のこと、孝は女の名、藏主は倉庫を掌る役　奇怪　けしからぬ　すべからく　ぜひに　徙る　尼前　尼御前の略　覺えず　ないさ思ふ　命あらん限り　生きてゐる中は　おつかへさる　たひかへさる

●〔一一四〕内府　内大臣のこと、こゝは家康を指す　政所　退り　貴人の許を辭するを　あらまほし　ありたい　さのみ　それほど　心づよくはおはせじものを　かたくなる御心でもあるまいから　家人　けらい

●〔一一五〕外様　代々の家來ならぬもの　ことに　別に　仰せ出さるる旨もなし　何とも仰せがない　いたはしう　かあいそう　えこそ申しもいだし侍らぬ　申し上げにくい

●〔一一六〕饗宴の儀　さかもりの事　引出物　下される物　御芳恩　ありがたい御恩　報い參らすべき時　秀秋後に至り關原の戰に東軍に應じたり

三　桃山時代の工業

●〔一一七〕難波石山　難波なる石山の　聚樂第　京都に築きしやしき　續續　つゞいて　大土木　土木の大工事　貔貅　猛獸の名、勇士のこと　叱咤　しかりはげます、號令する　蹂躪　ふみにじる　豪邁　をゝしくすぐれる

●〔一一八〕百間廊下　長い廊下のこと　燈籠　壯觀　さかんなるやうす　式　流儀　長押　座敷の鴨居の上の横木　鴨居　敷居と對するもの　襖　貼り　そのかみ　その昔　意匠　おもひつく　門扉　門のとびら

●〔一一九〕調度　手まはり道具　筑紫の陣　肥前名護屋の陣　輩出　人物の多く出ること　恩顧　恩をうけたる

●〔一二〇〕風尚　おもむき　遺風　昔の風　別天地　別世界　象眼　金屬に他の金屬を

はめて細工せるもの　横井時冬（ヨコヰトキフユ）史學者

二三　職業（ショクゲフ）の選擇（センタク）

●〔一二一〕粛啓（シュクケイ）　令弟（レイテイ）の御弟の意

●〔一二二〕誤用（ゴヨウ）　白馬（ハクバ）、金鞍連（キンアンレン）　白馬に黄金の鞍をおきてのる者、贅澤なる暮しをする人達

●〔一二三〕放擲（ホウテキ）　虚譽心（キヨヨシン）　ほめられたい心、即ち

●〔一二四〕さる　振舞（フルマヒ）　騙走

●〔一二五〕ひらに　下戸（ゲコ）　酒ざらひ

●〔一二六〕美保の谷（ミホノヤ）　亭主（テイシュ）

●〔一二七〕手ごろ　古染附（フルソメツケ）

●〔一二八〕攫（ツカ）んで　詮（セン）ない　しかたのない

●〔一二九〕器量（キリヤウ）　材能

●〔一三〇〕略（リヤク）し　煙管（キセル）

●〔一三一〕遇（グウ）せん　癪氣（シャクキ）

●〔一三二〕さる　大輪（ダイリン）　金米糖（コンペイダウ）

●〔一三三〕ひらに　遠慮（エンリョ）なく　きしむ　つかへる　撮（ツカ）み

●〔一三四〕美保の谷　鍬（シコロビキ）曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒（サ）め

●〔一三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一三七〕手ごろ　難澁（ナンジフ）　ほどよき　錢金（ゼニカネ）

●〔一三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一三九〕器量　材能

●〔一四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一四一〕遇せん　癪氣

●〔一四二〕さる　大輪　金米糖

●〔一四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一四九〕器量　材能

●〔一五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一五一〕遇せん　癪氣

●〔一五二〕さる　大輪　金米糖

●〔一五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一五九〕器量　材能

●〔一六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一六一〕遇せん　癪氣

●〔一六二〕さる　大輪　金米糖

●〔一六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一六九〕器量　材能

●〔一七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一七一〕遇せん　癪氣

●〔一七二〕さる　大輪　金米糖

●〔一七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一七九〕器量　材能

●〔一八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一八一〕遇せん　癪氣

●〔一八二〕さる　大輪　金米糖

●〔一八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一八九〕器量　材能

●〔一九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔一九一〕遇せん　癪氣

●〔一九二〕さる　大輪　金米糖

●〔一九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一九五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔一九六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔一九七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔一九八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔一九九〕器量　材能

●〔二〇〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二〇一〕遇せん　癪氣

●〔二〇二〕さる　大輪　金米糖

●〔二〇三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二〇四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二〇五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二〇六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二〇七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二〇八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二〇九〕器量　材能

●〔二一〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二一一〕遇せん　癪氣

●〔二一二〕さる　大輪　金米糖

●〔二一三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二一四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二一五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二一六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二一七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二一八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二一九〕器量　材能

●〔二二〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二二一〕遇せん　癪氣

●〔二二二〕さる　大輪　金米糖

●〔二二三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二二四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二二五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二二六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二二七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二二八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二二九〕器量　材能

●〔二三〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二三一〕遇せん　癪氣

●〔二三二〕さる　大輪　金米糖

●〔二三三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二三四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二三七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二三九〕器量　材能

●〔二四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二四一〕遇せん　癪氣

●〔二四二〕さる　大輪　金米糖

●〔二四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二四九〕器量　材能

●〔二五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二五一〕遇せん　癪氣

●〔二五二〕さる　大輪　金米糖

●〔二五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二五九〕器量　材能

●〔二六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二六一〕遇せん　癪氣

●〔二六二〕さる　大輪　金米糖

●〔二六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二六九〕器量　材能

●〔二七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二七一〕遇せん　癪氣

●〔二七二〕さる　大輪　金米糖

●〔二七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二七九〕器量　材能

●〔二八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二八一〕遇せん　癪氣

●〔二八二〕さる　大輪　金米糖

●〔二八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二八九〕器量　材能

●〔二九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔二九一〕遇せん　癪氣

●〔二九二〕さる　大輪　金米糖

●〔二九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二九五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔二九六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔二九七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔二九八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔二九九〕器量　材能

●〔三〇〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三〇一〕遇せん　癪氣

●〔三〇二〕さる　大輪　金米糖

●〔三〇三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三〇四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三〇五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三〇六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三〇七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三〇八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三〇九〕器量　材能

●〔三一〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三一一〕遇せん　癪氣

●〔三一二〕さる　大輪　金米糖

●〔三一三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三一四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三一五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三一六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三一七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三一八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三一九〕器量　材能

●〔三二〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三二一〕遇せん　癪氣

●〔三二二〕さる　大輪　金米糖

●〔三二三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三二四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三二五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三二六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三二七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三二八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三二九〕器量　材能

●〔三三〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三三一〕遇せん　癪氣

●〔三三二〕さる　大輪　金米糖

●〔三三三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三三四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三三七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三三九〕器量　材能

●〔三四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三四一〕遇せん　癪氣

●〔三四二〕さる　大輪　金米糖

●〔三四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三四九〕器量　材能

●〔三五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三五一〕遇せん　癪氣

●〔三五二〕さる　大輪　金米糖

●〔三五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三五九〕器量　材能

●〔三六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三六一〕遇せん　癪氣

●〔三六二〕さる　大輪　金米糖

●〔三六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三六九〕器量　材能

●〔三七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三七一〕遇せん　癪氣

●〔三七二〕さる　大輪　金米糖

●〔三七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三七九〕器量　材能

●〔三八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三八一〕遇せん　癪氣

●〔三八二〕さる　大輪　金米糖

●〔三八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三八九〕器量　材能

●〔三九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔三九一〕遇せん　癪氣

●〔三九二〕さる　大輪　金米糖

●〔三九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三九五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔三九六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔三九七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔三九八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔三九九〕器量　材能

●〔四〇〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四〇一〕遇せん　癪氣

●〔四〇二〕さる　大輪　金米糖

●〔四〇三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四〇四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四〇五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四〇六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四〇七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四〇八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四〇九〕器量　材能

●〔四一〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四一一〕遇せん　癪氣

●〔四一二〕さる　大輪　金米糖

●〔四一三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四一四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四一五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四一六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四一七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四一八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四一九〕器量　材能

●〔四二〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四二一〕遇せん　癪氣

●〔四二二〕さる　大輪　金米糖

●〔四二三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四二四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四二五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四二六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四二七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四二八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四二九〕器量　材能

●〔四三〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四三一〕遇せん　癪氣

●〔四三二〕さる　大輪　金米糖

●〔四三三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四三四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四三七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四三九〕器量　材能

●〔四四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四四一〕遇せん　癪氣

●〔四四二〕さる　大輪　金米糖

●〔四四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四四九〕器量　材能

●〔四五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四五一〕遇せん　癪氣

●〔四五二〕さる　大輪　金米糖

●〔四五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四五九〕器量　材能

●〔四六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四六一〕遇せん　癪氣

●〔四六二〕さる　大輪　金米糖

●〔四六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四六九〕器量　材能

●〔四七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四七一〕遇せん　癪氣

●〔四七二〕さる　大輪　金米糖

●〔四七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四七九〕器量　材能

●〔四八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四八一〕遇せん　癪氣

●〔四八二〕さる　大輪　金米糖

●〔四八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四八九〕器量　材能

●〔四九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔四九一〕遇せん　癪氣

●〔四九二〕さる　大輪　金米糖

●〔四九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四九五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔四九六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔四九七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔四九八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔四九九〕器量　材能

●〔五〇〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五〇一〕遇せん　癪氣

●〔五〇二〕さる　大輪　金米糖

●〔五〇三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五〇四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五〇五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五〇六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五〇七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五〇八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五〇九〕器量　材能

●〔五一〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五一一〕遇せん　癪氣

●〔五一二〕さる　大輪　金米糖

●〔五一三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五一四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五一五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五一六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五一七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五一八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五一九〕器量　材能

●〔五二〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五二一〕遇せん　癪氣

●〔五二二〕さる　大輪　金米糖

●〔五二三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五二四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五二五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五二六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五二七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五二八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五二九〕器量　材能

●〔五三〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五三一〕遇せん　癪氣

●〔五三二〕さる　大輪　金米糖

●〔五三三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五三四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五三七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五三九〕器量　材能

●〔五四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五四一〕遇せん　癪氣

●〔五四二〕さる　大輪　金米糖

●〔五四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五四九〕器量　材能

●〔五五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五五一〕遇せん　癪氣

●〔五五二〕さる　大輪　金米糖

●〔五五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五五九〕器量　材能

●〔五六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五六一〕遇せん　癪氣

●〔五六二〕さる　大輪　金米糖

●〔五六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五六九〕器量　材能

●〔五七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五七一〕遇せん　癪氣

●〔五七二〕さる　大輪　金米糖

●〔五七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五七九〕器量　材能

●〔五八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五八一〕遇せん　癪氣

●〔五八二〕さる　大輪　金米糖

●〔五八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五八九〕器量　材能

●〔五九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔五九一〕遇せん　癪氣

●〔五九二〕さる　大輪　金米糖

●〔五九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五九五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔五九六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔五九七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔五九八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔五九九〕器量　材能

●〔六〇〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六〇一〕遇せん　癪氣

●〔六〇二〕さる　大輪　金米糖

●〔六〇三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六〇四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六〇五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六〇六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六〇七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六〇八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六〇九〕器量　材能

●〔六一〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六一一〕遇せん　癪氣

●〔六一二〕さる　大輪　金米糖

●〔六一三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六一四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六一五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六一六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六一七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六一八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六一九〕器量　材能

●〔六二〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六二一〕遇せん　癪氣

●〔六二二〕さる　大輪　金米糖

●〔六二三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六二四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六二五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六二六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六二七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六二八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六二九〕器量　材能

●〔六三〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六三一〕遇せん　癪氣

●〔六三二〕さる　大輪　金米糖

●〔六三三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六三四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六三五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六三六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六三七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六三八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六三九〕器量　材能

●〔六四〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六四一〕遇せん　癪氣

●〔六四二〕さる　大輪　金米糖

●〔六四三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六四四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六四五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六四六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六四七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六四八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六四九〕器量　材能

●〔六五〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六五一〕遇せん　癪氣

●〔六五二〕さる　大輪　金米糖

●〔六五三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六五四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六五五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六五六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六五七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六五八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六五九〕器量　材能

●〔六六〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六六一〕遇せん　癪氣

●〔六六二〕さる　大輪　金米糖

●〔六六三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六六四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六六五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六六六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六六七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六六八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六六九〕器量　材能

●〔六七〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六七一〕遇せん　癪氣

●〔六七二〕さる　大輪　金米糖

●〔六七三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六七四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六七五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六七六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六七七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六七八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六七九〕器量　材能

●〔六八〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六八一〕遇せん　癪氣

●〔六八二〕さる　大輪　金米糖

●〔六八三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六八四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六八五〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六八六〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六八七〕手ごろ　難澁　ほどよき　錢金

●〔六八八〕攫んで　詮ない　しかたのない

●〔六八九〕器量　材能

●〔六九〇〕略し　煙管　癪氣

●〔六九一〕遇せん　癪氣

●〔六九二〕さる　大輪　金米糖

●〔六九三〕ひらに　遠慮なく　きしむ　つかへる　撮み

●〔六九四〕美保の谷　鍬曳　鍬はかぶさの後にあるもの　醒め

●〔六九五〕ひらに　遠慮なく　

は武官の官名、左右あり
讒言（ザンゲン）わるつ げぐち
たる如き玉
◉〔一三二〕默然（モクセン）だまつて
樊噲（ハンクワイ）
盾（タテ）
擁し（エウ）手にだく
〔一三三〕揮ひ（フル）
撞き（ツ）
斗巵（トシ）一斗入の杯
拜謝（ハイシヤ）ありがたくうける
瞋し（イカラ）
目眦（モクサイ）じり
壯士（サウシ）元氣よきわかもの
生彘（セイテイ）生の豚肉
俎（マナイタ）
啗ふ（クラ）
巵（シ）
酒（シユ）さかづきの酒
虎狼（コラウ）の心 殘忍にしてあくなき心
封侯（ホウコウ）諸侯にたてらる
亡秦（ボウシン）亡びた る秦
◉〔一三四〕宮室（キウシツ）宮殿
封閉（フウヘイ）さじる
竊に（ヒソカ）
取らざる（ト）不賛成
剛（カウヤ）
◉〔一三五〕大行（タイカウ）は、細謹（サイキン）を顧みず（カヘリ）
大なる禮を行ふには小さい謙遜は入らぬ
大事を行ふには小き譴は入らぬ
大禮（タイレイ）は、小讓（セウジヤウ）を辭（ジ）せず
刀俎（タウソ）刀とまないた
猶豫（イウヨ）ためらふ
度（ハカ）り
酒（シユ）
東嚮（トウカウ）東に向ふ
玉玦（ギヨクケツ）玦は環の一方缺けたる如き玉
軍門（グンモン）軍營の入口
與に（トモ）
衞士（エイシ）番兵
拒む（コバ）さへぎる
壽（ジユ）ひ言お祝ひ
急（キフ）あやふき
與に（トモ）
謀るに（ハカ）足らず相手にならぬ
足下（クツカ）きみ
玉斗（ギヨクト）玉にて作れるひしやく
豎（ジユ）子小僧

量（リヤウ）なし酒を澤山のめない
白璧（ハクヘキ）白のたま

修訂中等國語讀本詳解字引　巻四終

修訂 中等國語讀本詳解字引 卷五

一 尊王論の起因

◉〔一〕起因 起つた原因　幕府 將軍の政治を行ふ役所　文教 學問　地を拂ひ あとかたもなくなること　朝威 朝廷の威光　變態 かはつたやうす　尊王斥覇 皇室を尊び武家をしりぞく　辨へ 當に　人道 人の道

◉〔二〕殺伐 あらあらしい　粗暴 あらまし　政策 政の方針　追懐 おもふ　抑壓 おさへつける　知名 有名　聘し 禮を以てまねく　損ふ 傷ふ　治亂興亡　春秋褒貶の微旨を　肩し 彰考館　寓し 孔子にならひ正しきをほめ正しからざるをおとす心持をふくませる　名分 君臣の別

◉〔三〕本紀 紀傳體の歷史

にて帝王の事を記せる本筋　亂臣賊子（ランシンゾクシ）　わるもの

のこれるいさをし　系（ケイ）　すぢ　蕩然（タウゼン）　盛に起る

志氣（シキ）　元氣　喚起（クワンキ）　よびおこす　契沖（ケイチウ）

◉〔四〕夙（ツト）に　典籍（テンセキ）　書物　造詣（ザウケイ）　學問などのいたれること　古文辭（コモンジ）　昔の文學

荷田（カタ）　淳良（ジユンリヤウ）　儀表（ギヘウ）　てほん　弊習（ヘイシフ）　わるいならひ　矯（タ）め　國史（コクシ）　歷史

律令（リツリヤウ）　法律命令　闡明（センメイ）　ひらき明にする　見地（ケンチ）　みどころ　帷（キ）を垂る　學校を開くこと　雒誦たれぎぬ

風靡（フウビ）　なびかす　内外本末の序（ナイグワイホンマツジヨ）を誤り　も二もなく支那を尊べる者などありしをいふ　墜緒（ツヰショ）　衰へたる

事柄　◉〔五〕古傳（コデン）　ふるきみち　神權（シンケン）　神より傳はりし權　名實（メイジツ）　名と實際　頭腦（ヅノウ）

勃興（ボツコウ）　にはかに起る　古典學（コテンガク）　古書を研究する學問　主唱（シユシヤウ）　おもだちてとなへだす

二　岩倉公（イハクラコウ）の逸事（イツジ）　その一

逸事（イツジ）　正史などにもれし事蹟　◉〔六〕月日（ツキヒ）の小車（ヲグルマ）　年月のこと

大詔（オホミコト）　かしこきみのり　のまにまに　右府公（イウフコウ）　右大臣

きはみなき　限りなき　鑑（カンミ）てほん　史人（シジン）の料　歷史を書く人の材料　富嶽（フウガク）　富士山　十年一日（トトセワタリ）

復（カヘ）る　神武天皇の如く天皇親ら政をとり給ふこと　神武の古（イニシヘ）に　大義（タイギ）　大すぢ

搢紳（シンシン）　搢は挿む、紳は大帶。笏を帶に挿むことにて朝廷に立つ官位高き人　輔翼（ホヨク）　たすける　碩學（セキガク）　大學者

居た　◉〔七〕所見（ショケン）　意見、かんがへ　御（オン）おぼえもめでたかりし　御氣に入つて

朝廷（テウテイ）、轉じて公卿　隙（ゲキ）を生ず　すきを生ず、仲違ひすること　天曆（テンリヤク）の迹（アト）　醍醐、村上兩天皇の御治績　延喜（エンギ）、天曆の迹

達觀（タツクワン）　あきらかにみさほす　有職（イウシヨク）　古の儀式制度等を研究する學問、又はする人　公家（クウケ）　朝廷と武家と

看破（カンパ）　見ぬく　中興（チウコウ）　一旦衰へたるを興すこと

人あり　其人あり、人物がある
百揆庶政　揆ははかる、もろもろの政事　庶はこひねがう、國政をさすこと
人の力　盤根錯節　わだかまれる根、入りまじれるふし。世事の艱難
原動力
思ふらめども　思ふかも知れぬけれども
遡り　天平　聖武天皇の時代、其頃は藤原氏外戚として大に權をふるひたり
勢に乗じて事をずんずん進めること
宿弊　つづき來れる悪しき事
蟄居　謹慎して引きこもり居ること
◉〔八〕譴を蒙り　大ふくろ
参内　宮中へまゐること
大嚢　天下の政事を經營すること
文書　もの
起草　したがき
經綸
策案　はかりごとのしたごしらへ
物論　世上の議論
紛紛　ごた〳〵してまとまらぬこと
躬　從容　ゆつたりとおちついて
應答　受けてこたへる
雄藩　勢力ある大名
容を改め　考へをかへる
大令　王政復古の大令
攝關　攝政と關白と
議奏　幕府よりの奏聞を傳奏より受つぎて直接天皇に御取次ぐ職
傳奏　幕府よりの奏聞を取次ぐ職
親政　天皇みづから政をとりたまふこと
洪圖　洪は大、圖ははかりごと

旬日　十日あまり
◉〔九〕就中　その中でも
女房の請謁を納る　女官の取次げる願ひを聞き入れ給ふこと
禁闥　宮中
達文
布達の文
扇の要　大切なること
晩年　死ぬる前頃
偶〻よく
起居　たちふし
畫策　はかりごとをめぐらす
推して　ほめあげて
薨去
三位以上の人の死
◉〔一〇〕履歴　經歴
功績　てがらといさほし
一夕　晩或
なせそ　してくれるな
開國　鎖國の反對
姦雄　姦は惡
屏風
國是　國として取るべき方針主義
隱戸　外に知れぬやう作れる戸口
頒つ
◉〔一一〕名士　名高き人
引き　まれき
内外　國内海外
非　わるいこと
ことわり　道理も
三　岩倉公の逸事　その二

剛膽（ガウタン）きもだまのふときこと　要徳（エウトク）大切な徳

の内（ウチ）蕭牆は垣や屏、一族又は一國の内輪の意　武勇（ブユウ）のきこえある一人　桐野利秋を指す　蕭牆（セウシヤウ）

貴人にまみゆること　一應（オウ）二度も三度も　竪（タ）ち　◉〔一二〕鞘（サヤ）も撓（タワ）むる　謁見（エツケン）

枉（マ）げる　動（ドウ）ずる　ぐさわ　畏（カシコ）きあたり　陛下のこと　われをおきて人（ヒト）

はあらじ　誰よりも一番働くの意　君臣水魚（クンシンスイギヨ）　君臣の親しき情　雲（クモ）の上（ウヘ）　最も高き意にて宮中のこと

◉〔一三〕心交（シンカウ）　親しき交り　心（コヽロ）もとなし　氣にかゝる　夜（ヨ）な夜な　毎晩　少（ワカ）き

契（チギ）りし　約束　日（ヒ）ならざるに　間もなく　◉〔一四〕遭難（サウナン）　難にあふ　創業（サウゲフ）

業をはじむ　撥亂（ハツラン）　亂れたるを治むること　内治（ナイチ）　國内の政治　料（ハカ）らず　遺訓（キクン）　のこし給ひし教へ

臣下の主をたすけること　竭（ツク）させ　台鼎（タイテイ）　位高きこと　◉〔一五〕公達（キンダチ）　身分高き男子

輔弼（ホヒツ）

のこと　家範（カハン）　一家の守るべき大則　貽（ノコ）し

案文（アンブン）　下書文案　調印（テウイン）　印をおす　今（イマ）はの際（キハ）　臨終

寸時（スンジ）しばし　侍（サムラヒ）やある　誰か居るか　準（ナゾラ）へ　公（オホヤケ）の事（コト）　天下の事

らん後（メチ）　死後　◉〔一六〕代筆（ダイヒツ）　代理して書くこと　あらざ

心づくしの　心（コヽロ）をこめたる　遊惰（イウダ）　なまけること　泳（トコ）　侍（サムラ）ふ

節節（フシ〳〵）　かど　さりともと　何のかひもなく

藻鹽草（モシホグサ）　もしほをとるに用ゐる藻草、詩歌文章を集めしもののこと

かづきあぐらむ　とりあげるだらう、役にたたせてくれるだらうか。此歌は自分の心を汲みて誰が我が代りに君の爲につくしてくれるだらうかと也

誰（タ）が　たれ　おりたちて　此浦におりて

◉〔一七〕節操（セツサウ）を二つにす　みさをを守らざること

辭表（ジヘウ）　職を辭すの上書　上（カミ）陛下　晩節（バンセツ）　晩年の節義。ここは前原一誠江藤新平、西郷隆盛等を指す

◉〔一八〕夢（ユメ）現（ウツヽ）、　亡（ナ）からん　序（ツイデ）順序　いや　いよ　丈夫（マスラヲ）　斟（ク）ませ　衾（フスマ）　かけぶとん

地下の靈（レイ）　死せし人は地下の黄泉に赴くといふによりてかくいふ

四　先覺者（センカクシャ）

先覺者（センカクシャ）　世に先んじて事をさとる人

百出（ヒャクシュツ）　たくさんでる

間髪（カンパツ）を容れず　間にすきのなきこと

泰西（タイセイ）　西洋

文物（ブンブツ）　文明の事業

凌辱（リョウジョク）はづかしめ

異端（イタン）　聖賢の道に反する學問

◉〔一一一〕さらなり　及ばず

しきところ

難文（ナンブン）　むづかしき文章

厄災（ヤクサイ）　わざはひ

危地（キチ）　あぶない目

未發（ミハツ）　知らない

一新路（イッシンロ）　別の新しきみち

千辛萬苦（センシンバンク）　多くの艱難

心血（シンケツ）　血

嚇嚇（カクカク）　光りかがやくこと

◉〔一一九〕障礙（シャウガイ）　さまたげ

懷き（イダ）　時論（ジロン）　當時の世論

固持（コジ）　かたくたもつ

擴張（クワクチャウ）　ひろげる

主唱（シュショウ）　主になり

◉〔一二〇〕心を寒からしむ（コころをサムからしむ）　ぞつとする

夷狄、蠻夷（イテキ、バンイ）　えびす

蔑視（ベッシ）　あなどる

疑義（ギギ）　うたがはしきところ

荊棘叢中（ケイキョクソウチウ）　いばらや

誇張（コチャウ）　ふるくさき

看破（カンパ）　みぬく

◉〔一二二〕風潮（フウテウ）　ならはし

わきたつさま

醸し（カモし）　作り

◉〔一二三〕陣腐（チンプ）　ふるくさき

傑士（ケッシ）　すぐれし人

僥倖（ギョウカウ）　こぼれざいはひ

彰誼（シャウギ）　よしみをあらはす

府下（フカ）　東京府下

そか

◉〔一二四〕機會（キクワイ）　よきをり

水師提督（スイシテイトク）　ペリー　Commodore Perry

締結（テイケツ）　しめむすぶ

傳道師（デンダウシ）　敎をひろめる人

五　ペリー記念彰誼會における演説（ペリーキネンシャウギクワイ）

藤田茂吉（フジタモキチ）　明治の文章家

衆議（シュウギ）　多くの議論

決議案（ケツギアン）　決議した文案

光榮（クワウエイ）　ほまれ

長夜の眠（チャウヤのネムり）　長き泰平の眠り

鎖國（サコク）　外國との交通を絶つこと

披露（ヒロウ）　嚴肅（ゲンシュク）　おごそか

流石（サスガ）　自覺（ジカク）

外敎（グワイケウ）　外國の宗敎

禁制（キンセイ）

ゆるさぬ　布教　たしへ　悦んで

醫は　學校　精勵　力をつくす　顧問　相談役

力をつくす主義　根蒂　物のねもと　堅忍不抜　強きこと　服膺　むねにとめて守る　熱誠　熱心　覺醒　めざむる

後嗣者　あとつぎ　友誼的助言　友達のよしみとしての忠告

ソン人種　英米人　近因　近き原因　滿腔　むね一杯　鞠育　やしなひそだてる　干戈相見ゆ　千たて、戈ほこ。戰爭すること

つくす　懇切　ねんごろ　周到　よくゆきとどく

先に開けた　詳言　くはしくいふ　勃興　俄におこる　反射　形をかへて出たもの

感化力　教へ導く力　微意　こころの一端　大隈重

語學　外國語學　學制　教育のおきて　組織　くみたて　盡瘁　つくすこと

人道的博愛主義　人道を重んじ國際間の平和を尊むねにとめて守る　熱誠　熱心　覺醒　めざむる

後嗣者　あとつぎ　友誼的助言　友達のよしみとしての忠告

ソン人種　英米人　近因　近き原因　滿腔　むね一杯　鞠育　やしなひそだてる　干戈相見ゆ　千たて、戈ほこ。戰爭すること

つくす　懇切　ねんごろ　周到　よくゆきとどく

先に開けた　詳言　くはしくいふ　勃興　俄におこる　反射　形をかへて出たもの

感化力　教へ導く力　微意　こころの一端　大隈重

信伯

六　母に上る

〔三〇〕一見　ここは一見り見る　逆ひ　さからひ　沙汰　さた　うは

〔三一〕隔り　へだて　艫　とも　擡へ　もたげ　挺　ぬきんでその上に

〔三二〕剩へ　あまつさへ　奉行　幕府時代にある職の長官　傍若無人　人前を憚らず我儘勝手にふるまふこと　與力同心　徳川時代に武家に屬せし兵卒にして與力は今日の警部、同心は巡査の如し

〔三三〕穿鑿　しらべたづねる　大略　たいりゃく　公邊　公儀、幕府を指す　罷り　まかり　めでたくかしこ　めでたくは祝する意、かしこは恐惶の意女子の手紙又は女子への手紙に用ふ

七　ながれ木

内藤鳴雪　名は素行、伊豫松山の人

だぶりと春の川　春の川の水多くしてながれ木の流るるさまをよめ

るもの

森鷗外（モリオウガイ）　醫學博士文學博士陸軍醫總監、石見津和野の人

鼓樓（コロウ）　太皷をうつ堂

鐘樓（シヨウロウ）　かれつき堂

高濱虛子（タカハマキヨシ）　名は淸、俳人にして小說家、松山の人

五月雲（サツキグモ）　河東碧梧桐（カトウヘキドウ）　名は秉五郎　松山の人

鹿鳴館（シカナ）　武藏野の水田に五月の雲のうつれるさまをよめるもの

奈良の春日山の夕ぐれのさまをよめるもの、さびしきさまなり　ともし火

正岡子規（マサヲカシキ）　名は常規、松山の人、明治第一の俳人

牛ひとつ（ウシ）　冬の初めさびしきさまなり　しぐるる　時雨ふる

尾上（ヲノヘ）　山のみれ　みづうみの　秋の山中の湖の景なるべし

八　道話數則

道話（ダウワ）　心學の話

順ひ（シタガ）　輪轉（リンテン）まはる

著する（チヤク）　執著する

中庸（チウヨウ）　偏頗なく頃あひよきこと

凡俗（ボンゾク）　佛敎の僧侶たち

佛家（ブツカ）

【三六】

【三五】

そればかり　一偏（ヘン）

世俗の人

【三四】武藏野（ムサシノ）　武藏野の水田に五月の雲のうつれるひろびろたるさまをよめるもの

奈良の春日山の夕ぐれのさまをよめるもの、さびしきさまなり　ともし火

時雨（シグレ）ふる　しぐるる

春風ののどかに寺ある所にわたれる　ならび立つ（タ）

籬（マガキ）　**棧**（クヒ）

平等均一（ビヤウドウキンイツ）　おなじやうに

【三七】揖（カヂ）

伐る（キ）　至愚（シグ）大馬鹿

讓（ジヤウ）へりくだる

【三九】刻苦（コツク）　心を注ぐこと

福住正兄（フクズミマサエ）　二宮尊德の高弟

專務（センム）　第一のつとめ

溺死（デキシ）　おぼれじに

松明（タイマツ）

勤（キン）働く

【三八】

力（リヨク）　心を一にし力をあはせ

上荷（ウハニ）　上につめる荷物

儉（ケン）つつましやか

わきて　特別に

災（ワザハヒ）

一心協力（シンケフリヨク）

九　田舍と偉人

偉人（イジン）　すぐれたる人

邑里（イウリ）　むらさと

【四〇】擅（ホシイマヽ）

雄飛（ユウヒ）　己の勢をはること

畢世（ヒツセイ）　一生涯

狹隘（ケフアイ）　せまくるしきこと

窄小（サクセウ）　すぼまり小さし

後昆（コウコン）　子孫

崛起（クツキ）　俄に起る

篤論（トクロン）　實際の論

村落（ソンラク）

村閭（ソンリヨ）　ねなか

茅屋（ボウヲク）　かやの家

齷齪（アクセク）　ぐづぐづ働くこと

都門（トモン）　都會

屛息（ヘイソク）　がすぼまり

活潑（クワツパツ）　勢よきこと

淸澄（セイチヨウ）　きよし

雄壮（ユウサウ）　元氣よくさかんなり

旺盛（ワウセイ）　さかんなり

身體精神（シンシン）　假らば（カ）　比鄰（ヒリン）　となりより

囂囂（ガウ〳〵）　ごたごたしてやかましい

涵養（カンヤウ）　ひたしやしなふ

逍遙（セウエウ）　さまよふ

孤枕（コチン）　一人寢のこと

散策（サンサク）　策むち散歩

壯觀（サウクワン）　大なるけしき

山驛（サンエキ）　山中の村

敲て（ソバダ）　枕を敲てさは夜中目のさめること

山徑（サンケイ）　やまみち

敧危（キキ）　そばだつてあやぶい

細棧（サイサン）　かけ橋

掬し（キク）　手にすくふ

三宅雄次郎（ミヤケユウジラウ）　文學博士號は雪嶺

一〇　旅況の古今（リョキャウのココン）

◉〔四一〕鐵路（テツロ）　道（ミチ）　鐵

萬境（バンキャウ）　すべてのもの

血氣（ケツキ）　渚き元氣

朗（ホガラカ）　紛紛（フンプン）

◉〔四二〕旅況の古今（リョキャウのココン）　昔と今の旅の有様

御代なる御めぐみにて、宿場々々で宿をかりて野宿もせずに旅をしたわいの意

宣下（センゲ）　天子より臨時に仰せ下さること

君が代は（キミヨ）　君

うまや　驛、宿場

衾裯（キンテウ）　しとねよぎのふとん

鬩く（ナ）　再は支那を開きたる昔の天子

竹添井井（タケゾヘセイ〳〵）　名高き漢學者

◉〔四三〕齋（セイサイ）　持つて行き

厠寶（シドク）　便所

矢（シ）　大小便をする

驅道（カレドコ）　道へども

往時（ワウジ）　むかし

客店（カクテン）　やどや

◉〔四四〕糞ふ（クソヒカ）　土をこやす

儲へ（タクハ）　御先觸（オサキブレ）　前知らせ

糒（ホシヒ）　夜着（ふとん）

飡て（エフか）　飯を盛る器

筒（ケ）　はこゝ

枕席（チンセキ）　まくらやしきもの

豚柵（トンサク）　豚を入れたかこひのかき

刺客（セキカク）　暗殺をする者

麥隴（バクロウ）　麥畑のあぜ

窺ふ（ウカヾ）

棧雲峽雨日記（サンウンカウウニッキ）

僦二臥房一（ダワガフヲカリテ）　寢室をかりて

渉レ遠（トホキニワタル）　遠方へ行く

行旅者（カウリョシャ）　旅人

蜀（シヨク）

禹域（ウキキ）　支那のこと、

痩削（サウサク）　やせて

北地（ホクチ）　北の地方

輒（スナハチ）　すぐに

準ず（ジュン）　なぞらふ

軍防令（グンバウレイ）　大寶令中の守兵の令

◉〔四五〕贄川（ニエガハ）

上洛（シャウラク）　京都へ上ること

夜の物（ヨルノモノ）

路次中（ロシヂウ）　途中

◉〔四六〕漬す（ホトバス）　水につける

三月分の（ダワッ）　三月分の旅人が自分の薪で飯をたくならば

自分（ジブン）　一人前の宿賃が四文

人に四文（ヒトニシモン）

煩し（ワヅラハ）　竊む（ヌス）　故老（コラウ）老人　逆旅（ゲキリヨ）宿屋　扮す（フン）いでたち、芝居の役をつとめること
炊ぎ（カシ）　昌平（シャウヘイ）泰平　◉〔四七〕六十六部（ブ）法華經を六十六ヶ所の寺に納めあるくの意より出で、諸國の靈場を巡拜する者のこと

一　ヒマラヤ紀行（キカウ）　その一

紀行（キカウ）旅行の文　餘脈（ヨミャク）えだの山脈　劃せる（クワク）しきりせる　大障壁（ダイシャウヘキ）大なるかべ
◉〔四八〕豊饒（ホウゼウ）作物のよく出來ること　千古萬古（センコバンコ）とこしへに　依然（イゼン）かはりなき　壯容（サウヨウ）大なる景色
下界（ゲカイ）人の世　下瞰（カカン）みおろす　包擁（ハウヨウ）つつみいだく　雄宕（ユウタウ）をゝしく大也
夢想（ムサウ）夢にみる　河畔（カハン）畔ほとり　對岸（タイガン）むかふのきし　舷頭（ゲントウ）ふなばた　晩輝（バンキ）夕日の光
已に（スデ）　◉〔四九〕微塵砂（ミヂンサ）小さき砂　模糊（モコ）ぼうッとして　生暖き（ナマヌル）

亡國（バウコク）の恨（ウラミ）事實上英國に亡ぼされたるをいふ　蠻歌（バンカ）野蠻人のひなうた　悲愴（ヒサウ）の情懷（ジャウクワイ）いたみかなしむおもひ
睡眠客車（スヰミンカクシャ）寢臺車　◉〔五〇〕軌道（キダウ）レール　工費（コウヒ）工事の費　嶮峻（ケンシュン）けはしき
重疊（チョウデフ）かさなりあふ　蜿蜒（エンエン）うねりうねつて　山勢（サンセイ）山のすがた　突兀（トッコツ）つきたつ
◉〔五一〕剩す（アマ）　峯腰（ハウエウ）山腹　巒巓（ランテン）いただき　匍ひ（ハ）　鼓動（コドウ）動悸をうつ
戰慄（センリツ）をののきふるふ　煩蒸（ハンジョウ）むしあつい　◉〔五二〕白皚々（ハクガイガイ）ま白なること　透し（スカ）
涯（カギリ）水のかぎり　翺翔（カウシャウ）空をかける　關門（クワンモン）せき所　◉〔五三〕唯一（ユヰイツ）唯一つありて外にない

二　ヒマラヤ紀行（キカウ）　その二

蒼黄（サウクワウ）あわてゝ　大觀（タイクワン）大なるながめ　森寂（シンセキ）ひつそりとさびしい　◉〔五四〕絶世（ゼッセイ）絶代　石逕（セキケイ）石の小道
辿る（タド）　下弦（カゲン）陰暦二十二三日以後の月　戞々（カツカツ）馬蹄の音　崎嶇（キク）

けはしき　騎行（キカウ）　馬にのつて旅行する　瞬く（ツマヅ）

パノラマ　Panorama　點綴（テンテツ）　つづりあはす

一道（ダウ）　ひとすぢ　眼を眩せんとす（グン）　目をくらまさうとする

山脚（サンキヤク）　ふもと　當面（タウメン）　まんまへの　絶巓（ゼツテン）

琥珀（コハク）　うすべに　屹然（キツゼン）　高くそびゆるこさ

壯嚴（サウゴン）　正しくは莊嚴　燦（ラン）として　光のかがやくこさ

雄麗（ユウレイ）　大にして美し　恍然（クワウゼン）　うつとりぼんやり

筆舌（ヒツゼツ）　文や話　畢生（ヒツセイ）　一生

描出（べウシユツ）　えがきだす　恍惚（クワウコツ）　うつとりすること

舞蹈（ブタウ）　おどること

一三　望遠鏡と顯微鏡（バウエンキヤウ　ケンビキヤウ）

◉〔五八〕天體（テンタイ）　日月星辰等

精細（セイサイ）　こまかく

確實（カクジツ）　たしか

◉〔五九〕燦然（サンゼン）

◉〔五五〕

心膽を寒（サム）うするこさ

◉〔五六〕淡紅（タンコウ）

絶巓（ゼツテン）　まんまへの

◉〔五七〕

言慮の外（ホカ）　口にも言へず心にもはかること

きらきらする

一顧（コ）　ちよつとみかへる

等差（トウサ）　ひとしからぬ

敬慕（ケイボ）　うやまひしたふ

反動（ハンドウ）　原動に對する反對の運動

◉〔六〇〕

傾向（ケイカウ）　かたむき

こせこせ　ざるこさ

細心（サイシン）　めんみつ

緻密（チミツ）　こまかな

史書に載せられるこさ、昔は竹や帛に字をかきたり

劇甚（グキジン）　ひどいこさ

頭腦（ヅノウ）　かんがへ

◉〔六一〕戰爭場裏（センサウヂヤウリ）　いくさばの中

雄偉（ユウヰ）　なたしくふらい

性行（セイカウ）　性質行爲

疎放磊落（ソハウライラク）　やりつぱなしで小事にこだはらぬ

看過（カンクワ）　みすごす

一矚（キヨ）　ひとわらひ

その意を得ぬ（エ）　わけのわからぬ

崇拜（スウハイ）　あがめる

芳名（ハウメイ）　かんばしき名

竹帛に垂（タ）る

馳驅（チク）　はせまはる

◉〔六二〕快感（クワイカン）　こころよいかんじ

全局（ゼンキヨク）　全體の有樣

微小瑣末（セウサマツ）　極めて小さい事項（ジカウ）

小心翼翼（セウシンヨクヨク）　心小さくつつしみ深きこさ

鋟（ヒヤウ）　大に反省するこさ

趨（ハシ）る　一心に走る

獵逸語學者にして又教育學者　大村仁太郎（オホムラニタラウ）

一四　座右の銘

◉〔六三〕銘（いましめの言）　いとほしみ（愛し）　しげし（さかへる）　老（老人）
有徳（徳ある人）　無能（為すなきの人）　忽（おろそか）　辭は中るべくして（道理に叶ふことを）
口にする　敏く（はやく）　篤からんことを（情あついこと）　法（のり、のつとるべき道）
◉〔六四〕怒に難を思へ（腹の立つ時にはあとで難義にあふことを考へよ）　欲に義を思へ（欲心の起つた時は先づ義理を考へよ）　樵夫（きこり）　他山の石は玉を磨くべし（玉を磨くには他の石を用ふ。ここには石を小人に比し玉を君子に比す、小人の言行も修養の参考となるの意）　◉〔六五〕衣て　散る花を（過去を追ふな）
忠言（いさめの言葉）　中根若志（徳川時代の學者）

一五　蘆庵と君平　その一

建武延元（後醍醐天皇の時代）　天朝（朝廷）　舊典（昔なりのおきて）　文章（學問）　餘毒（あとに殘せる害）
古學（昔の學問）　◉〔六六〕張りし（盛に）　死力（必死の力）　噬み
有二終身喪一（一生涯も喪に服したい）　無二革命時一（二君に仕ふる心なきをいふ）　臍を堅む（覺悟すること）
文人、墨客（詩歌書畫などを嗜む人）　時情（其時代の人心）　愜はず　迂闊　狂妄（きちがひ）
噱はぬ　貶さず　故實（昔の法令儀式などのおきて）　通達（よく知ること）
六經　資け（たすけ）　◉〔六七〕夏夷（夏は支那を指す、えびす）　紊る（すぢ道をみだる）
逸史（世に知れぬ歴史）　經世（天下を經綸すること）　曲學阿世（正しき學をまげて世俗におもねる）
鄰をなさじ（仲間入りをすまい）　荒廢（あれすたれる）　掤めん　路費（旅銀）
◉〔六八〕里老（村の老人）　舊圖　存亡（ありなし）　目擊（したしくみる）　探求（さがしもとむ）

萬葉風（マンヨウフウ）　萬葉集のやうな　詠歌（エイカ）　うたをよむ

おとなふ　訪問する　伴り（イッハ）　假に作り

掻（カ）き　◉〔七〇〕摧（クダ）き　つばらに（くはしく）　枉（マ）げて（しひて、ういはずさ）

しがじか〳〵（かやう）　わ殿（ドノ）　あなた　世に拗（ス）ね　手に世人を相せぬ　隱逸（インイツ）　世にかくれたる人

こゝらあたり　此の邊　他事（タジ）もなく　大切に一心に　物を思（オモ）はせ　心配させ

一六　蘆庵（ロアン）と君平（クンペイ）　その二

ともすれば　ややもすれば、時としては　心づかひ（コヽロ）　心配　餌（イナ）みはること　◉〔七二〕

更闌（カウタ）けて　夜ふけて　子（チ）二つ　蔬菜（ソサイ）野菜　さゝせるどに　道草食（クサク）ふ　途中で遊ぶこと

吐（ツブヤ）く　飾（カザ）る　いひわけする　懺悔（ザンゲ）　後悔して過を

白狀すること

◉〔七三〕心頭（シントウ）　こゝろの中　ぬば玉　夜の枕語、ぬば玉は黒き玉也　社（コソ）

器（ウツ）し　半醒（ナカバサマ）して　うまい　熟睡

長嘯子（チャウセウシ）　ゆきもえやらず　そのまま過ぎがたく

外族（グワイゾク）　妻方の親族　采地（サイチ）　知行

世捨人（ヨステビト）　出家の人　えせ歌（ウタ）　あやしげなうた

人の盲人が誤りを傳へて多くの智なきものの之に從ひ道を誤ること

大に笑ふこと

◉〔七四〕敲（タヽ）き　叩（カヽ）き　からかと　去（イ）にし　わぬし　汝

物ほしう　何か食べたい

◉〔七五〕旗色（ハタイロ）　いきほひ　鬼胎（キタイ）　臆病心

一盲衆盲を引き（マウシウマウヒ）　佛典に、譬如二一盲無レ見千盲衢一。

冥罰（メイバツ）　天罰　毆（ウ）ち　なぐる　腹（ハラ）を抱（カヽ）へ

一七　岡井（オカヰ）某（ナニガシ）に與ふ

瀧澤解（タキザハカイ）　號は馬琴、名高き小說家、八犬傳、弓張月等の作あり

御意を得　快くあつて下ざつて　饗應　走

◉〔七六〕悉さず　御祀

大學頭　出府　幕府に出頭する　一天の君　一天萬乗の天子　壞れ　有識

ものしり　等閑　なげやり　◉〔七七〕闕た所　鹿沼　腰の物　大小の刀

浪浪　浪人となること　物入　入費がかかる

金賣は兩替商、橘次は吉次とも書く　義擧　義にかなへる行爲　金員數　高金　◉〔七八〕金賣橘次

姻親　婚姻上の親戚　一鄕の良　一村でのよき人　忠感神明に達し　神も忠義なことを感心せられる

浦生秀實　平君

一八　平等院の鳳凰堂

◉〔七九〕源融　御堂　別業　莊　佛殿　ら　兵燹　いくさ火

めでたかりけんを　立派であつたらうものを　◉〔八〇〕文華　文明の華

◉〔八一〕繪所の長　宮中にて繪の事を司る役のかしら　者　名匠　名高き工人　天井　格子

鷄鳴貝などの美しき貝を切りはめたるもの　ちりばめ　金屬の中に他物をほりはめること　碑碟、赤珠、瑪瑙。　瑠璃　紺色の玉　嵌入　はめこむ　螺鈿　七寶　ここにては七つの寶の意、法華經には金、銀、瑠璃、碑碟、瑪瑙、眞珠、玫瑰。阿彌陀經には金、銀、瑠璃、玻璃

淨土九品　說相　說明せるさま　欄間　天井と鴨居との間の格子　供養

色紙形　六寸に五寸角位の紙に五彩の模樣金銀箔等を施せるもの　剝落　はげおちる　ものさび　古めかし

釣殿　魚をつる爲の御殿　ゆかし　なつかし　滔滔　水のさかんに流るるさま　たたなはれる

聳えたる　幽邃　おく深くてさびし　◉〔八二〕生唼　池月　磨墨　いななき　嘶

あじろ　冬期河中に竹又は木にて柵の如くし魚をとるもの　忍び　思ひ　放生院　釋尊の僧といふに同じ

あらがき　目のあらき垣　補刻　刻み足す　離宮　離れ御殿　菟道稚郎子尊

氷魚（ヒヲ）色白き氷の如き小魚、冬期に産す

遺稿（イカウ）落合直文の文集也

一九　建武中興論（ケンムチウコウノロン）

論ふ（アゲツラ）論議する　成敗（セイハイ）成功と失敗と　諺（コトワザ）

風谷　◉〔八四〕下知（ゲヂ）仰せ、命令　句践（コウセン）范蠡（ハンレイ）

むことのみを志す武者　曉らぬ（サトラ）得ぬ　ものまなび學問　曉る（サト）猪武者（井ノシシムシャ）無暗に進

◉〔八五〕荘園（シャウエン）中古の頃權臣功臣などが私有せし土地人民　闕所（ケッショ）領主のなき荘園　おしなべて（おしならして）

夜見の國（ヨミノクニ）地獄　醜女（シコメ）　集ひ（ツド）荒ぶ（スサ）　押領（アフリヤウ）むりにとる

しるべ（しほり）先案内　◉〔八六〕鎌倉（カマクラ）この方（カタ）鎌倉幕府の時代此方　蓬（ムグラ）　強ひて

そのかみ（そのむかし）　いでや（さあ）　風氣（フウキ）

二〇　芳野の行宮（ヨシノノアングウ）

兒徒（キヨウト）わるもの共　相語ひ（アヒカタラ）相談する　行啓（ギヤウケイ）皇后陛下皇太子殿下などのおでまし　尊號（ソンガウ）の儀（ギ）　天子の位を遜り給ひて太上天皇となり給ふことに定まりたるを指す

歸參（キサン）かへる　臨幸（リンカウ）行幸、おでまし　合戰（カッセン）

左衛門督（サエモンノジヤウ）　◉〔八八〕

内侍所（ナイジドコロ）宮中にて神鏡を奉安する所

鎭守府（チンジュフ）

◉〔八九〕

うたた　工み（タクミ）　涙にひぢて（びちては濡れて泣くこと）　践祚（センソ）即位、践はふむ、祚は天子の位

覺えぬ（オボ）何も知らぬ　そぞろなる　物も

おほみ業（ワザ）大なる御事業　むだなる、いろいろの　沙汰（サタ）取り沙汰をする　◉〔八七〕

安心させる（ナリナカ）　成良　居る（ス）

めでたき（しかるべき）　奇特（キトク）めづらしい

神璽（シンジ）神器、璽は印　具し（グ）引きつれ

戊寅（ツチノエトラ）

鎭守（チンジュ）府

海道（カイダウ）　東海道
なげくべき（なげく）　あまた度（タビ）なんども
社壇（シャダン）　社殿
空（ムナ）しくなり　死すること
忠孝の道（チウカウ　ミチ）　親房、顯家も
やぶれし也
心うさ（コヽロ）

◉〔九〇〕さてしも止むべきならず（ヤ）　そのままでうちすておくべきでない
親王　節度（セツタク）　軍の命令
儲君（チヨクン）　よつぎの君、即ち皇太子
陸奥の御子（ムツ　オンコ）　義良
道中のことも恐れ多い　道の程（ミチ　ホド）もかたじけなかるべし
異母（イボ）　腹ちがひの
啓し（ケイ）　申上げ
仕度（シタク）　支度
纜（トモヅナ）を解く（ト）　出帆すること
よそひ　仕度
おごろおごろしく　おそろしく、すさまじく
さぶらひ（はん）べる　御威光の衰へし世、みだれし世
末の世（スエ　ヨ）　御世
めづらかなる（めづらしき）
鄙（ひな）　天照大神（スメラオホカミ）
皇（かみ）大神
野州（ヤシウ）　上野下野
唐土、支那
舊都（キウト）　京都
下向（グカウ）　京より下ること
もろこし

◉〔九一〕いとど（たいへん）

◉〔九二〕こはく（つよく）

◉〔九三〕かきあへねば　いづくか　神器さへましませ

大日本島根（ヤマトシマ子）　我國
もとよりの皇都　全體がどこでも都なりの意
寢（イス）るが中（ナカ）なる夢（ユメ）の世　人の世はかなきばどこでもの意
かきは、涙をかきはらふと筆にでかくとの兩方にかかる
神代よりの正しき血すぢ
素意（ソイ）　平生よりの志

二二

閑月日（カンジツゲツ）

◉〔九四〕ささずとも　戸を閉さずとも

閑月日（カンジツゲツ）　ひまなつき日
伊達政宗（ダテマサムネ）　獨眼龍將軍
誰（タレ）かはこえむ　越す人もあるまい　よは半夜
誰も引きとめやうとはしないけれども
限（カギリ）あれば　花の命に限りがあるから
太田道灌（オホタダウクワン）
浦生氏鄕（ガマフウジサト）
村雨（ムラサメ）　ばらばらと降つて通る雨

◉〔九五〕菊地（キクチ）

ぬれざらましを　ぬれなかつたであらうものを

◉〔九六〕たれとむるとは、なけれども、

武時（タケトキ）　南朝の忠臣

武夫（モノノフ）　うは矢（ヤ）のかぶら　一筋なる語に添へたるにて、かぶら矢のこと

源（ミナモト）

實朝（サネトモ）　源氏第三代將軍

矢（ヤ）なみ　矢の列

つくらふ（そろへる）　小手（コテ）　たばし

る（とび）　散る

しの原（ハラ）　篠原、野原のこと

梶原景季（カヂハラカゲスエ）　源太景季を

君（キミ）　賴朝をさす

せき

もり　關守、關所の番人

平忠度（タヒラノタヾノリ）　薩摩守

行（ユ）きくれて　あるくうちに日がくれて

あるじ　やどのあるじ

源賴政（ミナモトノヨリマサ）　源三位

みやま木（ギ）　深山の木

その

◉〔九六〕

梢（コズエ）　その（櫻の）梢であるとは

花（ハナ）がさいてわかる

なこそ　名古曾は關の名にて勿來（ナコソ）即ち「來る勿れ」の意にとりて此歌を作れる名がナコソといふ故、吹く風も來ないだらうと思つたに云々

みちもせに　路もせまく

いざはさア、さアさア知らせて

いざさせ給（タマ）へ

◉〔九七〕

母御前（ゴゼ）　母樣

新玉（アラタマ）の年（トシ）　新しき年

二三　空行（ソラユ）く雁（カリ）　その一

◉〔九八〕

女房（ニョウバウ）　女侍

心（コヽロ）づよく　氣強く

◉〔九九〕

羨（ウラヤマ）し　さめざめと　うばのこと

乳母（メノト）の女房（ニョウバウ）　人（ヒト）もこそ聞け　他人にも聞えるだらう

さやうにては　なぜさうしては

二三　空行（ソラユ）く雁（カリ）　その二

下さい

遙（ハルカ）に忘れたるこし方（カタ）　こし方は昔、昔赤澤山の狩倉に、夫祐泰の工藤一臈の爲に討たれしことをいふ

消（キ）え入（イ）る　深く心に感じてたえ入ること

曾我殿（ソガドノ）　祐泰討たれし後、十郎五郎の二人の子を携へて曾我祐信に嫁したる故に十郎も五郎も

姓を曾我といへり

◉〔九八〕

女房（ニョウバウ）　女侍

心（コヽロ）づよく　氣強く

雁の音、轉じて雁のこと

つばさ　鳥

◉〔九九〕

羨（ウラヤマ）し　さめざめと　うばのこと

乳母（メノト）の女房（ニョウバウ）　人（ヒト）もこそ聞（キ）け　他人にも聞えるだらう

さやうにては　なぜさうして

二三　空行（ソラユ）く雁（カリ）　その二

陳（チン）じ　口にのべる

一臈（ラフ）　きり者　切り者、樞臣

闕（タ）け　ふけ

隈（クマ）も　照らさぬくまも

雁（カリ）がね

別（ベツ）の翼（ツバサ）　他の鳥

人倫（ジンリン）　人の仲間

和殿（ワドノ）　そなたは

しみじみと涙を流すこと

こざかしく　賢こさうに

和上郎達（ワジヤウラウタチ）　若樣たち

◉〔一〇〇〕竹の小弓（タケノコユミ）　玩具の弓
薄矧（ススキハギ）　うすくはぎたる矢
遠侍（トホザムラヒ）　武家の中門の廊番をつとめる武士の居る所
明障子（アカリシヤウジ）　今頃の紙の障子のこと
とにも、かくにもなりなむ　その上はどうなってもよい
一の能（ノウ）　第一とすべき藝
領掌（リヤウシヤウ）　承知する
年（トシ）ばへには　年のわりには
怖（オソロ）しき　大望を、いだく

◉〔一〇一〕實か（マコト）
謀叛（ムホン）
館（ヤカタ）へ　い
申（マヲ）しなして　作っていうて

◉〔一〇二〕安穩（アンヲン）　やすらか
希有（ケウ）　めったにない
芳恩（ハウオン）　ありがたき御恩
生生世世（シヤウジヤウヨヨ）にも　此世も後の世もかけて、いつまでたつださて
口說（クド）き

◉〔一〇三〕談議（ダンギ）　相談
曾我物語（ソガモノガタリ）　五郎十郎の復讎を書けるもの

二四　誠（マコト）

妄語（マウゴ）　いつはりをいふ
妄（ミダリ）に
虛言（キヨゲン）　實のなきことば

◉〔一〇四〕闕下（ケツカ）　闕は宮門

蘧伯玉（キヨハクギヨク）
下公門（コウモンニクダリ）　公門は君門、君の門前をばかりて車より下りてあるく也
式路馬（ロバニシキス）　路は大、路馬は君の馬車のと、式は車上にて行ふ禮也
昭昭（セウセウ）　明るきこと人に知れるを
冥冥（メイメイ）　くらい、人知れぬ
節（セツ）を信（ノ）べず　みさをを守らず
行（オコナヒ）を墮（オト）さず　悪行をせず

◉〔一〇五〕間斷（カンダン）　すきま
薰（カヲ）り
帚灑（サウセイ）　はききよめる
蜘蛛（クモ）
い　とい
見まがふ　みちがへる
文（カザ）る

◉〔一〇六〕なき名（ナ）ぞと　名は評判、人に咎められた時に、實のないうはさであるとのいひわけもできやうが、自分の心が問ふた時は何と答へたらよからうか、良心は欺かれぬの意
顙（ヒタヒ）
不審（フシン）　うたがひ
起請（キシヤウ）
いみじく　いちじるしく、殊に
三浦晋（ミウラシン）　幕末の學者に勝

二五　鹽原（シホバラ）

◉〔一〇七〕鹽原（シホバラ）　下野にあり。此文は金色夜叉の一節也
車（クルマ）　汽車なり
境（サカヒ）　土地
悒鬱（イウウツ）　心むすぼ

れてふさぐこころ　やる方なき　やるせない

遐（はるか）　平蕪（へいぶ）　草茫々たる平野　　斷雲（だんうん）　ちぎれ雲

坦途（たんと）　平坦なる途　　重巒（ちょうらん）　かさなれる山　　窮（きわ）まらず　行きつかない

山の氣　　壑（たに）

◉〔一〇八〕いくめぐり　何度も曲る　　淙淙（そうそう）　水の音　　嵐氣（らんき）

しげれる木　　聲々の鳥（とり）　しきりになくこと　　葛（つづら）折　うれること　　密樹（みっじゅ）

水上（みなかみ）　すはや　さア、そりヤ　　空山（くうざん）　人なき山　　幽草（いうさう）　小さき草　　步步（ほ、ほ）の花　花のつぐけること

細瀧小瀧（さいろうせうろう）　珊珊（さん〳〵）　玉を轉ずる如き音、さら〳〵　　白光（びやくくわう）　劉（つツ）り　　蘚碧（こけみどり）に

蹤（こ）え　　飛瀑（ひばく）たぎ　　全逕（ぜんけい）　全體の途　　灑（そゝ）げる　　調（しらべ）よき音　　緒（いと）

箒川（はゝきがは）　泝（さかのぼ）る　　巉巖（ざんがん）　きりたてたるいは　　◉〔一〇九〕綿綿（めん〳〵）　綿をつむぐ如くつゞく樣

青銅（せいどう）から　かれ　　藥硏（やぐん）　藥をくだくもの　　瑠璃末（るりまつ）　瑠璃の粉　　◉〔一一〇〕宛然（えんぜん）　さながら　　夾（さしはさ）む

魚止瀑（うらどめのたき）　　兒（ちご）が淵（ふち）

左巓（さがん）の巉（そばだつ）　古（ふる）り　　布瀑（ぬのたき）　　翠（みどり）　染み　　仞（じん）　尋（ひろ）、　　◉〔一一一〕轔々（りん〳〵）　水の音

小夜（さよ）　　激湍（げきたん）　はげし　き瀨　　磊砢（らいか）　ごろ〳〵と石のあるさま　　俯瞰（ふかん）　うつむきて見る　　嶙峋（りんじゅん）

崖（がけ）　磧（かはら）　　翠巒（すいらん）　青き山　　素練（それん）　白きれ　り絹

◉〔一一二〕琅玕（らうかん）　青き玉　　玉簾（たまだれ）　丘壑（きうがく）　をかやたにに　　別境（べつきやう）　別世界　　清穩（せいらん）　浮世はなれてしづかやかなる

嚚然（あいぜん）　やはらかなるさま　　頓（とみ）に　には　かに　　麗（うるは）し　　壤（つち）　　堆（うづだか）さ

暢（のど）けし　　牢（ろう）として　かたくして　　半生（はんせい）　一代の半分、これまでの　　痼疾（こしつ）　持病

齒牙（しが）にも懸（かけ）ず　何とも思はぬ、とりあげぬ　　淡（あは）し　　尾崎德太郎（ざきとくたらう）　號は紅葉、名高き小說家

二六　擴張（くわくちやう）せる日本（につぽん）

◉〔一一三〕版圖（はんと）　一國の地圖、轉じて領地の意　　統治權（とうちけん）　すべをさめる權　　治（あまね）く

◉〔一一四〕雄飛（ユウヒ）　雌伏の反對

ひきあはせる照會と異る

◉〔一一五〕須ツ（マ）　必要とするまで

同等の位置に立ちての交際

◉〔一一六〕範圍（ハンイ）　しきりの内

二七

高田屋嘉兵衛（タカタヤカヘエ）

船戸（センコ）　船を扱ふ店

饒（ユタカ）　富

擇捉（エトロフ）　島

互市（ゴシ）　通商貿易

憂鬱（イウウツ）　氣をふさぐこと

大擧（タイキヨ）　多人數こぞつて

◉〔一一七〕遠藤隆吉（エンドウリウキチ）　文學博士

庶政（ショセイ）　もろ〳〵の政治

更張（カウチヤウ）　あらためて大きくす

野鄙（ヤヒ）　學問なくいやしい

◉〔一一八〕

傭（ヤトヒ）　雇ふ

拮据（キツキヨ）　熱心につとむるを

擇捉（エトロフ）　島

拓殖（タクショク）　開拓

祖法（ソハフ）　昔よりのきまり

悼み（イタ）

報復（ハウフク）　しかへし

入寇（ニフカウ）　あだをしに來る

◉〔一一九〕震駭（シンガイ）

轉漕（テンソウ）　こぎまはる

公廩（コウリン）　幕府の米倉

反復（ハンプク）　くりかへす

無賴漢（ブライカンなら）ず者

嘉し（ヨミ）

通好（ツウカウ）　よしみを通ずるを

嘉永（カエイ）　年號

家資（カシ）　家のもの

紹介（セウカイ）

對等の交際（タイトウカウサイ）

漸愧（ザンキ）

暴掠（バウリヤク）

ふろひき（フリヨ）　不慮（フリヨ）の難

戍卒（ジユソツ）　番兵

俘者（フシヤ）　とり

釋（ユル）さんつ（はな）

◉〔一一〇〕環（メグ）り

昂然（コウゼン）　意氣さかんなるさま

水手（カコ）

◉〔一一一〕拉（ラツ）し　ひきつれ

反目（ハンモク）　互にうらみにらむを

釋放（シヤクハウ）　ゆるしはなつ

遺（オク）り

嚇（オド）す

◉〔一一二〕葛藤（カツトウ）　二字共にかづらもつれのを

膝行（シツカウ）　にじりよるを

◉〔一一三〕冷笑（レイセウ）

哂（ハ）み

一抹（マツ）　一さなで

目眦（モクシ）　まなじり

暗雲（アンウン）　わだかまり

案じ（アン）　手をかけるを

髣髴（ホウフツ）　かすかに

將（ヒキ）ゐ

髻（モトドリ）

幷（アハ）せ

疾視（シツシ）　にくみてにらむを

麾（サシマネ）いて

消息（セウソク）　やうす

囑（ショク）し　ことづけをたのみ

實無き罪に用ふ（ツミ）

なつ

豪語（ガウゴ）　あらさうな言葉

期（キ）する所（トコロ）　待ち構へる所

敬憚（ケイタン）　うやまひはゞかる

縷（ル）縷　言葉をつくすを

商議（シヤウギ）　協議

屏（シリソ）け

劍戟（ケンゲキ）　つるぎやほこ

威容森然（井ヨウシンゼン）　怖しき樣子をするを

哨艇（セウテイ）　見張りの小舟

烽（ホウ）　烽火、のろし

慴伏（セフフク）　おそれちゞかむ

あさわらふ

◉〔一二四〕熟睡（ジユクスヰ）　よくれ入る　虚（キヨ）　ひまずき　怯夫（ケフフ）　ひけふもの　尚（タフト）ぶ

豪爽（ガウサウ）　つよくてさわやか

士班（シハン）　さむらひの組　優遊（イウイウ）　ゆつたりたのしむ　褒賞（ホウシヤウ）　ほめて物を與ふると　昌（サカ）へ　旗旆（キハイ）　たなびく

二八　荒井城址（アラヰジヤウシ）

◉〔一二五〕城址（ジヤウシ）　址はあと　渡津（トシン）場　渡し　舟子（シウシ）　船頭　小網代（コアジロ）　義意（ヨシモト）

半世（ハンセイ）の　年若くして死ぜる　八州（シウ）　關東八州　荊棘（ケイキヨク）　いばら　松籟（シヤウライ）　松風の音　うら

さびし　こゝろさびし　主（アルジ）　末路（マツロ）　一生のをはり　◉〔一二六〕颯（サツ）たり　颯々と吹く

濤聲（タウセイ）　波の音　矛（ホコ）　夢（ユメ）に通ふ　夢に見える　斷崖（ダンガイ）　きりぎし　一基（キ）　一個

刻字（コクジ）　ほりつけたる文字　左手（ユンデ）　平布（ヘイフ）　平にしく　怨魂（エンコン）　うらみて死せて魂　切所（セツシヨ）

駄（ダ）　馬の荷を數へる語　好漢（カウカン）　好男子、丈夫

◉〔一二七〕敗餘（ハイヨ）　まけのこり　弓矢（ユミヤ）の意地　ひけをさぬ意氣地　烏兎　太陽には三足の烏、月には

白兎のすめりといふ傳説より月日のことにいふ　しるしの立札　大中黒（オホナカグロ）の征矢（ソヤ）　羽の中央に黒き斑の入りたる軍用の矢　深仇（シンキユウ）　恨みふかきあだ　朝雲暮煙（テウウンボエン）　はかなきにたとふ　木標（モクヘウ）

たかが延鐵細工（エンテツサイク）の劒（アルギ）　何にせよ鐵をのべた細工の劒だ

鏃（ヤジリ）　鉢金（ハチガネ）さばき　鬢髪（ビンパツ）　櫻（サクラ）すかし　櫻の花をすかしぼりにせる

川上亮（カハカミリヤウ）　號は眉山、小説家　一蓋（ガイ）　蓋は笠、ふた等を數へる語　ひとに　一にぎりは

二九　心育（シンイク）と體育（タイイク）

◉〔一二八〕兩全（リヤウゼン）　二つながらまつたし　理想（リサウ）　完全無缺なりと思ふ觀念の對象　訓育（クンイク）　をしへそだつ

醇化（ジユンクワ）　美しく化す　態度（タイド）　身のこなし　莊重（サウヂウ）　おもおもし　暢然（テウゼン）　のびのびり　確乎（カクコ）

しつかりすると

姿態（シタイ）　すがたかたち

拳闘（ケントウ）　拳にてうちあふこと

参與（サンヨ）　あづかること

端正（タンセイ）　きちんとたゞしき

◉〔一三〇〕聰明叡智（ソウメイエイチ）　物事にさとくあきらかにかしこきこと

極致（キョクチ）　は　て

懸河（ケンカ）の辯（ベン）　竪板に水の如き辯

高雅（カウガ）　尚

特行（トクカウ）　ひとりで行ふ

氣概（キガイ）　氣意

修辭學（シウジガク）

◉〔一三一〕彫塑（テウソ）　ほりもの

聽衆（チャウシウ）　きき手

審判（シンパン）　さばくこと

オリーブ　Olive

綰（ワガ）ね

旌表（セイヘウ）　ほめあらはす

讃歌（サンカ）　ほめたゝへた歌

聯關（レンクワン）

つながらす

醇美（ジュンビ）　まじりけなく美し

◉〔一三二〕率（シタガ）うて

完徳（クワントク）　きずのなき徳

精粹（セイスヰ）　まじりけなくよき所

適（カナ）ふ

修訂中等國語讀本詳解字引　巻五終

修訂中等國語讀本詳解字引　巻六

一　准后親房（ジュンゴウチカフサ）　その一

◉〔一〕准后（ジュンゴウ）　准三宮に同じく攝政關白などの人に、特に三后即ち太皇太后、皇太后、皇后の三宮になぞらひて賜はる尊號

南朝　

精彩（セイサイ）　ひかり、いろどり

殉國（ジュンコク）　國に殉ず、國の爲に命を捧げること

具平親王（トモヒラシンワウ）

齋（イツキ）　すゑ、子孫のこと

美譚（ビダン）　美しきはなし

◉〔二〕わが世盡きぬる心地（ココチ）　生き甲斐もなき心地

信任を蒙（カウム）り　御信用をうけて官に任ぜられること

罷（ヤ）め

剃髪（テイハツ）　かみをそること

吉野朝（ヨシノテウ）

親房公（チカフサコウ）

朝野（テウヤ）　朝廷民間と

事蹟（ジセキ）　ことがら

史籍（シセキ）　史書

徴（チョウ）す　證據とする

出仕（シュツシ）　出てつかへる

准（ジュン）ぜられ　待遇をなぞらへる

幹旋（アッセン）　力を盡すこと

無爲（ムヰ）　働きのなきこと

消息（セウソクやう）す

公武（コウブ）　朝廷と武家と

軋轢（アツレキ）　きしろ、すれあひ

英邁（エイマイ）　すぐれたること

奸謀（カンボウ）　悪だくみ

身方（ミカタ）　味方は正しからず

黒幕（クロマク）　かげに居りてはかりごとするもの

◉〔三〕源師親（ミナモトノモロチカ）

結託（ケッタク）　くみむすぶこと

計策（ケイサク）　はかりごと

運らせ（メグ）

ひぢをひかへて思ふやうにさせぬこと

果決（クワケツ）　思ひ切つて事をきめること

肘を掣し（ヒヂ　セイ）

◉〔四〕跳梁（テウリヤウ）　あばれまはること

慘死（サンシ）　いたましき死

一大打撃（ダイダゲキ）

一つの大なるいたで

大規畫（ダイキクワク）　大計畫、おほむくろみ

廟謨（ベウボ）　朝廷のはかりごと

經營（ケイエイ）　治めること

歷歷（レキ〳〵）　ありありと

建議（ケンギ）　意見を上ること

方寸（ハウスン）　胸の中

電馳（デンチ）　はやくはしること

綸旨（リンシ）

みことのり

◉〔五〕經略（ケイリヤク）　經はかる、略をさむ。

復せん（フク）　もとにかへさん

形勢（ケイセイ）　いきほひのさま

閏七月（ウルフグワツ）

龍虎の兩將（リヤウコ　リヤウシヤウ）　龍や虎の如き二人の名將

股肱（ココウ）　股また、肱ひぢ。最も力たよりにし給ふ臣のこと

南山雲深き所（ナンザンクモフカトコロ）　吉野のこと

萬斛の淚（バンコクナミダ）

逆旅（ゲキリヨ）　たびの淚

◉〔六〕顧命（コメイ）

死後のたのみ

依託（イタク）　たのみ

骨子（コッシ）　ほね

關山（クワンザン）　關や山をへだつる

實にや（ゲ）　德望（トクバウ）　其人の德を仰ぐこと

二　准后親房（ジユンゴウチカフサ）　その二

苦心慘憺（クシンサンタン）　心をくるしめ考へなやむこと

奬め（ス、）

言を左右にし（グンサイウ）　あゝ云ひかう云ひすること

◉〔七〕異圖（イト）　異るかんがへ、むほん氣

仰望（ギヤウバウ）　あふぎのぞむ

北辰（ホクシン）　北斗星

相持す（アヒヂ）　互に下らずして勢をたもつこと

興國（コウコク）　後村上天皇の第二年

八紘（クワウ）八方

夜雨蕭蕭（ヤウセウ〳〵）　夜の雨のしめやかなること

羈愁（キシウ）　旅のうれへ

楚歌（ソカ）　楚の國の歌、敵軍の聲

綽綽（シヤク〳〵）　ゆつたりとゆとりあること

餘裕（ヨイウ）　ゆとり

神皇正統記（ジンノウシヤウトウキ）

增補（ソウホ）　ましおぎなふ

訂正（テイセイ）

ただすこと

物せる（モノ）　書きたるもの

上乘（ジヤウ〳〵）　最上

名分（メイブン）　君臣の名分

正閏（セイジユン）　王者の正統と否らざる

◉〔八〕堂堂（ダウ〳〵）　しつかりとして動かす可からざる貌

興亡成敗（コウバウセイバイ）　興ること亡ぶこと成ること敗れること

識見（シキケン）　識見
超拔（テウバツ）　こえぬきでる
有職故實（イウソクコジツ）　昔の法令儀式などの事
兵馬倥偬（ヘイバコウソウ）　いくさがあつていそがしい
博學洽聞（ハクガクカフブン）　博く學びあまねく聞く
三内口訣（サンナイクケツ）
廣才博覽（クワウサイハクラン）　博く書を見、才大なること
推す（オ）　おしほめる
資治通鑑（シヂツガン）　班固の著せし史書
蘊奥（ウンオウ）　奥儀、おくそこ
推服（スヰフク）　たつとびしたがふ
尋いで（ツ）
辛勞（シンラウ）　ほねをり
◉〔九〕水泡（スヰハウ）に歸（キ）し　泡あわ、むだになること
行宮（アングウ）　假宮
更（カウ）の闌（タ）くる　よがふけること
撫養（ブヤウ）　なでやしなふ
根據地（コンキヨチ）　ねじろ
水師（スヰシ）　水軍
精鋭（セイエイ）　すぐれて強し
鍊熟（レンジユク）　よくならされてゐること
抄掠（セウリヤク）　かすめとる
殊遇（シユグウ）　殊の外の待遇
諸成敗（シヨセイバイ）を掌（ツカサド）り　政治をとること
持明院流（ヂミヤウヰンリウ）　後深草天皇の御末裔
◉〔一〇〕掉尾（タウビ）の勇（イウ）　終りのぱッと盛なること
壯擧（サウキヨ）　さかんなるくはだて
驚天動地（キヤウテンドウチ）　天を驚かし地を動かす、大なること
沒落（ボツラク）　おちいる
恢復（クワイフク）　もとにかへす
賀名生（カナフ）
絶代（ゼツダイ）　世にたえてなき
◉〔一一〕邊隅（ヘングウ）　かたすみ

挫折（ザセツ）　くじける
義故（ギコ）　義理を重んずる知合の者
糾合（キウガフ）　よびあつめる
精髓（セイズヰ）　たましひ
おほほれ
乃父乃祖（ダイフダイソ）　乃は汝、轉じてたゞ父、祖のことにいふ
欽す（キン）　したふ

三　月雪花（ツキユキハナ）

涼（スヾミ）
大宮人（オホミヤビト）　宮中の人
丁稚（デッチ）
◉〔一二〕歡樂（クワンラク）　たのしみ
芋（イモ）
雅興（ガキヨウ）
風雅の樂
俚謠（リエウ）　俗歌
沁み（シ）
歷史的因緣（レキシテキインエン）　歷史に關係ある事歷
唐人（モロコシビト）　支那の人
高麗人（コマビト）　朝鮮の人
逕庭（ケイテイ）　ちがひ、へだて
翫ぶ（モテアソ）
◉〔一三〕詩的教育（シテキケウイク）　風流を解するをしへ
塵世（ヂンセイ）　俗世
隱遁者（イントンシヤ）　世捨人
所行（シヨギヤウ）　行ひ
皎皎（カウ〱）　白く光ること
皚皚（ガイ〱）　白きこと
名利（メイリ）　浮世の名譽利益
營營（エイ〱）　それのみを追ふさま
高尙（カウシヤウ）　けだかきこと
溫雅（ヲンガ）　やさしくみやびやか
悠揚（イウヤウ）　こせ〱せぬこと　ゆつたりすること
神聖（シンセイ）　最もきよく尊きこと
有情（イウジヤウ）

化（クワ）心あるものの如くみなすところ

有徳化（イウトククワ）徳あるものやうにみなす

汚（ケガレ）

◉〔一四〕光風（クワウフウ）晴天に吹く風と霽月（セイゲツ）はれた月、清月

君子

蔽（オホ）ふ（かく）す

掩（オホ）ふ（さへぎる）

君子（クンシ）

一點塵（テンヂン）の塵　一點

冷（ヒヤ）い

邪佞（ジヤネイ）よこしまなる者

皎潔（カウケツ）白くてけがれがない

いひつたい

髣髴（ハウフツ）ほのかなるさま

節義（セツギ）みさをを守る

足跡（ソクセキ）あしあと

恣（ホシイマヽ）に

◉〔一五〕傳說（デンセツ）

吹雪（フブキ）

◉〔一六〕御賜（ギヨシ）たまひたるもの

俯仰（フギヤウ）ふしたりあふいだりして

金字塔（キンジタフ）ピラミツト

感慨措（カンガイオ）く能（アタ）はざらしめる佳話（カワ）心に感ぜずにはゐられない程のよき話

四　小品二篇（ヘン）（小品文は一寸した事を書ける文章）

〔一、杜鵑（トケン）を聞（キ）く記〕

庚子（カウシ）かのえね　立夏　陰暦五月五日

故兒（コジ）なくなつた子

愾愾（イウ〳〵）ふさぎうれふ

◉〔一七〕脆（モロ）き

〔一、砧（キヌタ）を聞（キ）く詞（コトバ）〕

砧　布帛を槌にてうつ臺

きる（しげくなる）

みなあらず　みんなではない

瀧澤解（タキザハカイ）號は馬琴

たゆみ（ゆるくなる）

羅（カリ）がね（ぶんな）

泊洎舍文集（サヽナミノヤブレシフ）

五　笠置山（カサギヤマ）

◉〔一八〕類火（ルヰクワ）けの火（ともや）

餘煙（ヨエン）あまれるけむり

主上（シユジヤウ）陛下、後醍醐天皇

卿相（ケイシヤウ）

太政大臣、左右大臣、大中納言のこと

雲客（ウンカク）四位五位の官の人。卿相雲客とつゞけて高位高官の人

步跣（カチハダシ）

扶（タス）け

關（トキ）

援（ヒ）き

十善（ジフゼン）の天子　天子は前世に十善を積みたるものといふ佛教の語

玉體（ギヨクタイ）御からだ

田夫野人（デンプヤジン）の男（しづ）

そこ共も知（シ）らず　どこともなくて

赤阪（アカサカ）の城（シロ）正成の城

◉〔一九〕青塚（セイチヨウ）苔（さびし）むるばかり

寒草（カンサウ）さびしくさ

疎（マバラ）

羅穀（ラコク）あやうすもの

幽谷（イウコク）　奥ぶか き谷

◉〔二〇〕うつつの夢（ユメ）　心やすらかな らぬ夢のこと

ゆく　指して行くのサスと笠置山のカサとをかけたるもの

樹蔭（コカゲ）　さして

あめが下（シタ）　天が下のアメと笠とにかけたるもの

かくれが

隠るべきいへ

憑む（タノ）

藏人（クランド）

◉〔二一〕天恩（テンオン）　天子の恩

私の榮華（エイクワ）を期（キ）せよ　その上で自分の榮華を期せよ

所存（ショゾン）　かんがへ

もだし　だまりこむこと

網代（アジロ）の輿（コシ）

青竹のあじろにてあめるこし

◉〔二二〕張輿（ハリコシ）　疊表にてはれるこし

南都（ナント）　奈良の古名

夏臺（カダイ）　地名

汚さず（ウルホ）

六

西郷隆盛（サイガウタカモリ）に與（アタ）ふ

幕下（バクカ）　お手許の意

故山（コザン）　故郷

謦咳（ケイガイ）に接す　したしくお目にかかるの意

舊雨（キウ）の感　森槭黄州に赴く時、弟の蘇轍と別れに臨みて詩を贈答せしこと

滄桑（サウ）の變（ヘン）　物事のうつりかはること

◉〔二三〕旗鼓（キコ）の間

戰爭の間

亡狀（バウジャウ）　らんぼうなるさま

巨魁（キョクワイ）　おやだま

謀主（ボウシュ）　かしら

斥（シリゾ）け

異圖（イト）を懷き　むほん心をもつ

突如（トツジョ）　突然

說者（セツシャ）　とく人、ある人

公布（コウフ）　一般人民にしめす

韜晦（タウカイ）し　かくれてあとをくらます

◉〔二四〕自省（ジセイ）　自ら省みる

萬一（マン）に僥倖（グウカウ）せん　萬一のもつけの幸を求むること

奇貨（キクワ）　よいこと

讒誣（ザンブ）　わるくつげる

蒼生（サウセイ）　天下の民

靡然（ビゼン）

浸潤（シンジュン）　ひたしうるほす、深く影響すること

卓識（タクシキ）　すぐれし見識

◉〔二五〕洞察（トウサツ）　見ぬく

乘（シヨウ）口、金（キン）を燦（トカ）す　多の人が讒誣すれば金鐵の如き人も考をかへることをいふ

鳳輦（レンカ）の下、帝京

履踐（リセン）　ふみ行ふ

情勢（ジャウセイ）　いきほひ

敎唆（キウサ）　そゝのかすこと

◉〔二六〕不遇（フグウ）　まはりあはせあしきこと、立身せぬこと

故舊（コキウ）　ふるなじみ

毀譽（キヨ）　ほまれとそしり

父子同胞等の爭ふこと

寸毫（スンガウ）　すこし

度外（ドグワイ）　よそ

骨肉相食（コツニクアヒハ）み　いくたびまけても

◉〔二七〕

百敗（ハイ）

麾下（キカ）　幕下、部下

◉〔二八〕

守戰（シュセン）城を守る爲のいくさ　國憲（コクケン）國の法

涕涙（ティルイ）なん　情懷（ジャウクワイ）心の中

七　福原（フクハラ）

水無月（ミナヅキ）六月のこと　都（ミヤコ）うつり　攝津を又京都に遷せしこと　ことなる故（ユエ）之といひて別にちがふわけ

◉〔三〇〕世（ヨ）に仕（ツカ）ふる程の人（ヒト）仕官する人　ことわりにも過（ス）ぎたり　無理からぬ

陰（カゲ）を憑（タノ）む　めぐみの下に居る　世（ヨ）に餘（アマ）されて　世の中のさりのけ者にされること

期（キ）する所（トコロ）めあてとするところ　淀川（ヨドガハ）に浮（ウカ）び　毀ちたる家の材木の流れ行くこと　馬鞍（ウマクラ）武士を指す

牛車（ウシグルマ）三位以上の人の乘物也。是等の人も亦馬に騎りて車に出るをいふ　西南海（セイナンカイ）西海道南海道。平氏の所領は其地方に多し

おのづから自然に　事（コト）のたより事用　今の京（キヤウ）福原　條里（デウリ）町のわり方

◉〔三一〕內裏（ダイリ）主上の御所　木（キ）の丸殿（マルドノ）齊明天皇の新羅征伐の時の行宮、筑前朝倉山にあり

やう子様　故郷（コキヤウ）京都を指す　あちつかおこと　衣冠（イクワン）公卿の正服　布衣（ホイ）狩衣、無紋のもの

ありとしある人（ヒト）あらゆるひと　浮雲（ウキグモ）の思（オモ）ひなびたるねなからしき　直垂（ヒタタレ）武家の服　手振（テブリ）風俗

兆（キザシ）まへじるし　しるく知り得られること

◉〔三二〕

いにしへの、かしこき御代（ミヨ）仁徳天皇の御代をいふ　蒼（アヲ）き　みつぎ物（モノ）租稅

準（ナゾラ）へ　方丈記（ハウヂヤウキ）鴨長明の著

八　藝苑逸話（ゲイエンイツワ）

◉〔三三〕〔一〕繪佛師良秀（エブツシリヤウシウ）

ちかづかね　知（し）らぬを　さながら　そのまま　繪佛師（エブツシ）佛畫をかく繪師　鄰（トナリ）　物（モノ）もう　むかひのつら　向ふのがは

煙炎（エンエン）　けむり　くゆり　けむりの
ほのほ　たつこと

しろべの人　所得（ショトク）の　さりげなげ　さうとも思　はぬふり　知音（チイン）

この道（ミチ）　道絵の　和黨（ワタウ）　あなた方　よぢり不動（フドウ）　不動の火炎のれ　ちりてあるもの　何條（ナデウ）どうして

〔二一、鳥羽僧正（トバソウジヤウ）〕　金堂（コンダウ）　本堂　供米（クマイ）　比叡山へをさめるそなへの米、京の町へ供米袋を出して米をいれしめたり

辻風（ツジカゼ）　つむじ風　◉〔三五〕塵灰（ヂンカイ）　ちりやはひ　大童子（オホワラハ）　法師（ハウシ）ばら　法師ども

御入興（ゴニフキヨウ）　おもしろしさ　おもふこと　實（ミ）の物（モノ）　比興（ヒキヨウ）　たとへがおもしろい

◉〔三六〕〔三二、能因入道（ノウインニフダウ）〕　彼（カ）の國（クニ）　伊豫の國也　和歌（カカ）にめで　和歌を愛し

國司（コクシ）　國のつかさ　あまの川（ガハ）　三島の神が天下りますあるならばあまの川を苗代水にせきさめて下し給はれの意　みて

くら　幣（ヌサ）のこと　神司（カンヅカサ）　神官のこと　炎旱（エンカン）の天（ソラ）　ひでり　おしなべて　一やうに

鰐（ワニ）を呑めりける故事　唐の太宗の時、あが夏旱天にて蝗夥しく發生せり。時に帝數匹の蝗を呑みて神に祈りしこと　すき者（モノ）　風流な人

次（ツイデ）に　披露（ヒロウ）

九　天の川（アマガハ）

松尾桃青（マツヲトウセイ）　號は芭蕉　あら海や　越後出雲崎にてよめるもの、壯大の眺めなり　榎本其角（エノモトキカク）　蕉門す哲の一

◉〔三八〕稲妻（イナヅマ）や　夏の夕暮の瞬間のながめなり　西山宗因（ニシヤマソウイン）　檀林派の祖　しら露や　白露の玉

は何物の上におきても美し

盥をもてあまさるさまなり　かれ枝に　葉も落ちつくせる枝に　烏の來りてとまれる淋しきさま也　行水（ギヤウズイ）の　夏の末の夕暮、蟲の聲すがくしきあまりに水を捨てんとして

明月の夜に、月の光にうかれて三井寺までも上りて見たしとなり　名月や　明月の夜に障子おしあけて月を見るさま書けり如し　三井寺（ミヰデラ）の

◉〔三九〕森川許六(モリカハキヨリク)　蕉門の一人　欄干(ランカン)に　清き月の夜に菊の影が欄干にうつれるさまをよめるもの、菊の匂ひも浮ぶが如し

服部嵐雪(ハツトリランセツ)　蕉門十哲の一人　黄菊白菊(キギクシラギク)　富貴の庭に美しくさけるもよからん、されど田舎家の垣根におのづからに黄菊白菊の匂へるもゆかしかるべし

横井也有(ヨコヰヤイウ)　俳文に長けたる人　化(バケ)ものの　化物ならんと近づき見れば横尾花なりけり

一〇　白峯の陵(シラミネノミササギ)

相阪(アフサカ)　近江逢坂の關　秋來し山(アキコシヤマ)　秋が來た山　鳴海潟(ナルミガタ)　尾張　むらさき匂ふ　「紫の一本故に武藏野の草はみながら哀れとぞ思ふ」の歌よりいへるもの

◉〔四〇〕鹽竈(シホガマ)　陸前　和(ナ)ぎ　象潟(キサカタ)　羽後國　蜑が苫屋(アマガトマヤ)　漁家　佐野(サノ)　上野國　歌枕(ウタマクラ)　歌の材料、よき景色の地　葭(ヨシ)がち

る難波(ナニハ)　大阪　笻(ツエ)　松栢(マツカシハ)　兒が嶽(チゴガダケ)　峙(ソバダ)ち

◉〔四一〕うばら　いばら　うらがなし　心かなし　紫宸(シシン)　紫宸殿、正殿にして大禮を行はせらるる御殿　淸涼(セイリヤウ)殿　淸涼殿

主上の御住ひの御殿　百(モモ)の　多くの　御言(オンコト)　御おほせ　かしこみ　つゝしみまもり　藐姑射(ハコヤ)の山　仙人の住めりといふ山　思(オモ)ひきや　おもひがけなく　麋鹿(ビロク)　麋は大鹿　おどろの下(モト)　おどろは草木の生ひ茂れること　神(カミ)がくれ　神となつてかくれ　宿世の業(スクセノゴフ)　前世よりの因縁

◉〔四二〕供養(クヤウ)　誦(ズ)し　よみ　松山(マツヤマ)の　山や川はもとの如きも君のお姿はきえ給ひぬの意　かたなく　あとかたもなく

牀(トコ)　衾(フスマ)　神淸(シンス)み　心すみ　物(モノ)とはなしに　何となく　すさまじき　ものさびしき

上田秋成(ウヘダシウセイ)　浪華の人、短編に名高し

一一　文話一則(ブンワイツソク)

◉〔四三〕敍(ジヨ)す　述ぶ　含蓄(ガンチク)　中にふくむこと　緊要(キンエウ)　大切　原則(ゲンソク)　もととする規則

◉〔四四〕會得(エトク)　具體的(グタイテキ)　讀者をしてさながら見また聞くが如く感ずるやうにのべること　抽象的(チウシヤウテキ)　明らきま

に理のみを述べるをいふ

貧宴（ヒンエン）　まづしくしてやつるること

あきらか　歸結（キケツ）　落ち着き

文を能くする人　多　眞率（シンソツ）　かざりなくまじめ

面（オモテ）ほか　血（チ）に飽き　血を十分すひこみ

胡頽子（グミ）　赤き小き木の實

索然（サクゼン）　無味なること

◉〔四七〕三昧（マイ）　佛語、心を一點に集めて他を顧みぬ境、妙境

譯に妙なりし人

一二　空論（クウロン）を避くべし

空論（クウロン）　實行なき議論

歸納的（キナフテキ）推理　多くの事實より一つの理を推し考へること

論の立て方　結論（ケツロン）　三段論法の終の命題、こゝは斷定の意

箇箇（コ）一つ一つ

理論（リロン）　物事の理を論ずること

◉〔四八〕論法（ロンパフ）

◉〔四五〕瞭瞭（レウレウ）

晦瞑（クワイメイ）　くらし、明ならず

是（ゼ）　よきこと

◉〔四六〕能文（ノウブン）の士

神韻（シンイン）ゆたか　文字の妙なること

諫止（カンシ）　いさめとめる

袖（ソデ）にし　そでに入れ

森田文藏（モリタブンザウ）　號は思軒、明

◉〔四九〕常識（ジヤウシキ）　英語 Commonsence

はじめつくる　演繹的（エンエキテキ）　一つの原理を特別の事實にあてはめて論ずる法

六部（ブ）　六部僧、行脚の僧が六十六の靈地に六十六部の法華經ををさめあるく者

◉〔五一〕暴（アバ）れ

浮世（ウキヨ）　世の中のこと

哲學（テツガク）　萬有の最高原理を研究する學

粗漏（ソロウ）　あらめにしてぬかりあること

◉〔五〇〕創造（サウザウ）

一三　讀書（ドクシヨ）の選擇（センタク）

Ralph Waldo Emerson

◉〔五二〕エマソン

徒費（トヒ）　むだにつかふ

氣阻（キバ）み　元氣失せ

頽然（タイゼン）　すたれたるさま

靈光（レイクワウ）　靈妙なる光

さらぬ　つまらぬ

涉獵（セフレフ）　あれこれとあさること

神餃（シンウ）　心がうゑ

覺（モト）む

◉〔五三〕煥發（クワンパツ）　ぱつと盛にひらく

覺醒（カクセイ）　さまつす

審美（シンビ）　美しき

生氣（セイキ）　活氣

庶幾（コヒチガ）　はくは……することが出來るにチカ〕からうか

を得（エ）んか

◉〔五四〕名篇大作（メイヘンタイサク）　すぐれた作　親炙（シンシャ）したしむ　警醒（ケイセイ）いましめます　啓發（ケイハツ）ひらく　清新（セイシン）新しく生々せる　涵養（カンヤウ）ひたしやしなふ　徒勞（トラウ）むだぼねなり

◉〔五五〕偏狹（ヘンケフ）せまくるしい　固陋（コロウ）かたくな　反故（ホゴ）　溷汰（タウタ）悪しきをすつること　散佚（サンイツ）ちらばること　文學通（ブンガクツウ）文學に通じた人　蟻集（ギシフ）蟻の如くあつまる　鑑賞（カンシヤウ）味ひてほめる　推敲（タイカウ）

◉〔五六〕賭（ト）して　かけて、賈して　癡（チ）たはけ、おろか　敷演（フエン）いひのべる

◉〔五七〕ヒル Hill

最好手段（サイカウシユダン）最もよきてだて

一四　室鳩巣に與ふ（ムロキウサウアタ）

◉〔五八〕驚愕（キヤウガク）びつくりする　是非（ゼヒ）に及ばず候　いたしかたのないことです　火急（クワキフ）大いそぎ　令郎（レイラウ）御子息　貽（ノコ）し　買田（カヒデン）舍（ヘヤトフ）俗人が子孫の爲に田を買ひ家を建てなどすること　簿（ボ）しるし　拮据（キツキヨ）ほねをおること　手錄（シユロク）手びかへ　廉潔（レンケツ）廉恥潔白　同門（ドウモン）同じ門下の者

一五　成吉思汗（ジンギスカン）

◉〔六〇〕連戰連勝（レンセンレンシヨウ）つづけて戰ひつづけて勝つ　殺戮（サツリク）殺しつくす　史家（シカ）歷史家　覇圖（ハト）覇業（王者の業）のはかりごと　ジユリアス シーザー　ザル　皇人の長　攫大（クワクダイ）ひろげる　やつとのことで　辛うじて（カラ）

◉〔六一〕アレクサンドル　アレキサンダー大王　チヤーレス　カロロ

◉〔六二〕隷屬（レイゾク）臣下としてつかへる　こもごも　遊牧民（イウボクミン）水草を追ひて移住する人民　酋長（シウチヤウ）かばるがはる

◉〔六三〕兵機（ヘイキ）の妙機（いくさ）　汗位（カンヰ）汗の位、汗は王に譯す

◉〔六四〕名篇大作　すぐれた作　親炙　したしむ　清新　新しく生々せる　涵養　ひたしやしなふ　反故　溷汰　悪しきをすつること　文學通　文學に通じた人　癡　たはけ、おろか　最好手段　最もよきてだて

一四　室鳩巣に與ふ

◉〔五八〕驚愕　びつくりする　是非に及ばず候　いたしかたのないことです　火急　大いそぎ　令郎　御子息　貽し　買田舍　俗人が子孫の爲に田を買ひ家を建てなどすること　簿　しるし　拮据　ほねをおること　手錄　手びかへ　廉潔　廉恥潔白　同門　同じ門下の者

一五　成吉思汗

◉〔六〇〕連戰連勝　つづけて戰ひつづけて勝つ　殺戮　殺しつくす　史家　歷史家　覇圖　覇業（王者の業）のはかりごと　ジユリアス シーザー　攫大　ひろげる　やつとのことで　辛うじて

◉〔六一〕アレクサンドル　アレキサンダー大王　チヤーレス　カロロ　遊牧民　水草を追ひて移住する人民　酋長　こもごも　臣下としてつかへる

◉〔六二〕隷屬　臣下としてつかへる　こもごも　かばるがはる

◉〔六三〕兵機　の妙機　汗位　汗の位、汗は王に譯す

◉〔六四〕名篇大作　すぐれた作　親炙　したしむ　清新　新しく生々せる　涵養　ひたしやしなふ　反故　溷汰　悪しきをすつること　文學通　文學に通じた人　癡　たはけ、おろか　最好手段　最もよきてだて

一四　室鳩巣に與ふ

◉〔五八〕驚愕　びつくりする　是非に及ばず候　いたしかたのないことです　火急　大いそぎ　令郎　御子息　貽し　買田舍　俗人が子孫の爲に田を買ひ家を建てなどすること　簿　しるし　拮据　ほねをおること　手錄　手びかへ　廉潔　廉恥潔白　同門　同じ門下の者

一五　成吉思汗

◉〔六〇〕連戰連勝　つづけて戰ひつづけて勝つ　殺戮　殺しつくす　史家　歷史家　覇圖　覇業（王者の業）のはかりごと　ジユリアス シーザー　攫大　ひろげる　やつとのことで　辛うじて

◉〔六一〕アレクサンドル　アレキサンダー大王　チヤーレス　カロロ　遊牧民　水草を追ひて移住する人民　酋長　こもごも　臣下としてつかへる

◉〔六二〕隷屬　臣下としてつかへる　こもごも　かばるがはる

◉〔六三〕兵機　の妙機　汗位　汗の位、汗は王に譯す

◉〔六四〕名篇大作　すぐれた作　親炙　したしむ　清新　新しく生々せる　涵養　ひたしやしなふ　反故　溷汰　悪しきをすつること　文學通　文學に通じた人　癡　たはけ、おろか　最好手段　最もよきてだて

一四　室鳩巣に與ふ

◉〔五八〕驚愕　びつくりする　是非に及ばず候　いたしかたのないことです　火急　大いそぎ　令郎　御子息　貽し　買田舍　俗人が子孫の爲に田を買ひ家を建てなどすること　簿　しるし　拮据　ほねをおること　手錄　手びかへ　廉潔　廉恥潔白　同門　同じ門下の者

一五　成吉思汗

◉〔六〇〕連戰連勝　つづけて戰ひつづけて勝つ　殺戮　殺しつくす　史家　歷史家　覇圖　覇業（王者の業）のはかりごと　ジユリアス シーザー　攫大　ひろげる　やつとのことで　辛うじて

◉〔六一〕アレクサンドル　アレキサンダー大王　チヤーレス　カロロ　遊牧民　水草を追ひて移住する人民　酋長　こもごも　臣下としてつかへる

◉〔六二〕隷屬　臣下としてつかへる　こもごも　かばるがはる

◉〔六三〕兵機　の妙機　汗位　汗の位、汗は王に譯す

◉〔六四〕名篇大作　すぐれた作　親炙　したしむ　清新　新しく生々せる　涵養　ひたしやしなふ　反故　溷汰　悪しきをすつること　文學通　文學に通じた人　癡　たはけ、おろか　最好手段　最もよきてだて

一四　室鳩巣に與ふ

◉〔五八〕驚愕　びつくりする　是非に及ばず候　いたしかたのないことです　火急　大いそぎ　令郎　御子息　貽し　買田舍　俗人が子孫の爲に田を買ひ家を建てなどすること　簿　しるし　拮据　ほねをおること　手錄　手びかへ　廉潔　廉恥潔白　同門　同じ門下の者

一五　成吉思汗

◉〔六〇〕連戰連勝　つづけて戰ひつづけて勝つ　殺戮　殺しつくす　史家　歷史家　覇圖　覇業（王者の業）のはかりごと　ジユリアス シーザー　攫大　ひろげる　やつとのことで　辛うじて

◉〔六一〕アレクサンドル　アレキサンダー大王　チヤーレス　カロロ　遊牧民　水草を追ひて移住する人民　酋長　こもごも　臣下としてつかへる

◉〔六二〕隷屬　臣下としてつかへる　こもごも　かばるがはる

◉〔六三〕兵機　の妙機　汗位　汗の位、汗は王に譯す

◉〔五九〕御事（オンコト）を缺（カ）かせらるる　御不自由なさせる　黃禍論（クワウクワロン）Yellow Peril　黃色人種が白皙人種に禍すとの論　席卷（セキケン）席むしろ、むしろを卷く如くせめとること　ケー　アレキサン　ダー　アレキサンドル　大王